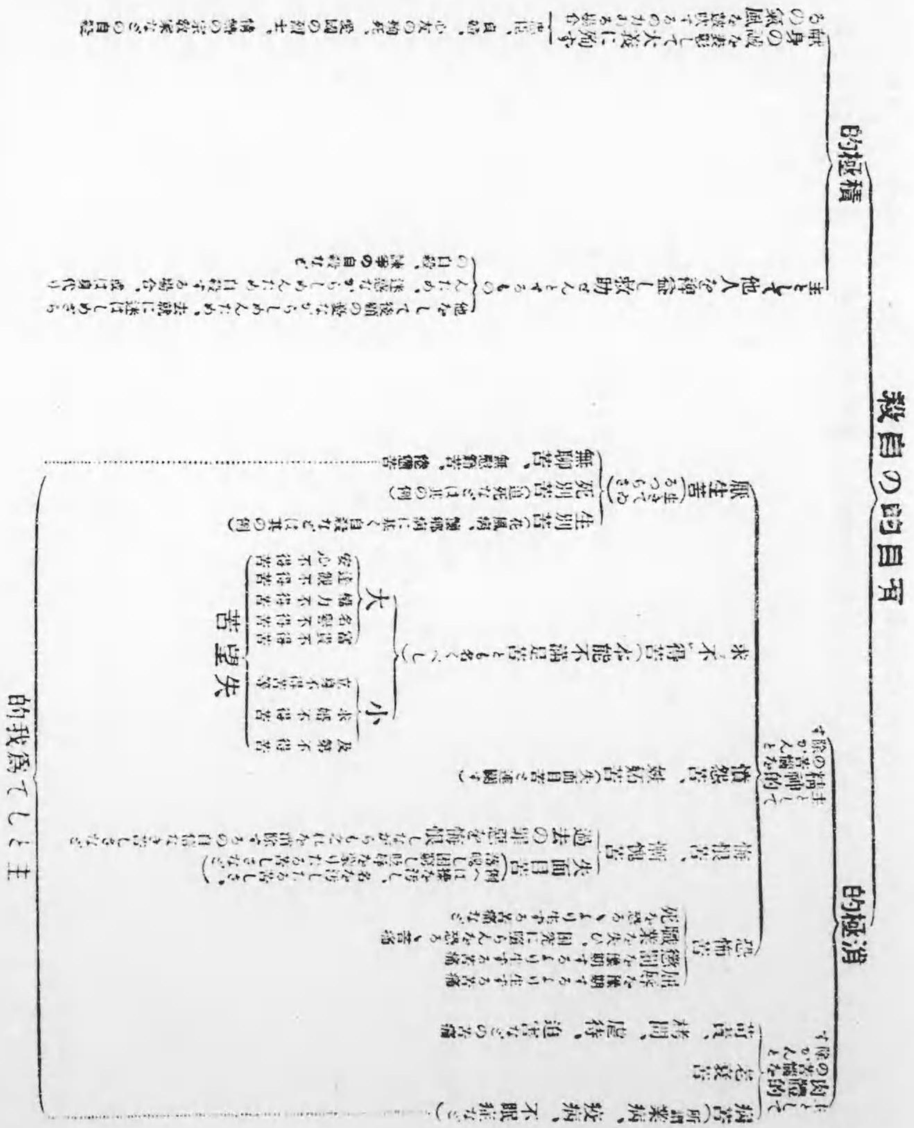
但し有目的の自殺と無目的の自殺――病的自殺――とは糾へるが如くもつれあひて多小相因果することを免れざれば、到底截然とは辨別しがたし。

救ひ得べき自殺、殊に積極的自殺は文明の進むにつれて寧ろ減少せんとする傾向あるが如し。――日本の今日は空前の過渡期なれば暫く除く。――然るは社會の狀態の一變したるに因るべく、人の智慮周細となりて速斷早計せざるにも因るべく、倫理思想の革りたるにも因るべく、自殺の效能の概して眼前一時のものたるに止まりて所詮は消極的たることを覺り得たるにも因るべく、敗れて忽ち却走すること、自ら不能と限ること、忍苦の勇に乏しきことなどの總て弱志の證、怯懦の徵たるを意識し來れるにも因るべし。

第三　絶對の非認は成立すべからず

基督教は、全智全能の造化神を前提となして事の是非を判ずるが故に、自殺――人間が自儘勝手の絶命――を絶對に非認するに至りたるや其の理論上の必然なれども、之れと同樣の前提を具へざる限りは、無差別、無條件にして自殺を非認する能はざるは、猶ほ無差別、無條件にして之れを是認する能はざるが如し。社會中心主義又は實利主義の倫理家はいざ、自殺は協同の義、相助相養の旨に悖るゆゑに非なりと。然れども是れ未だ自殺を絶對的に非認するの理由とはなすに足らず。何と



なれば自殺にして協同の義を損害せざるもの往々あるのみならず、却りて積極的に世を裨益するの例も尠からざればなり。（圖表を參照せよ）。或ひは社會を有機體と見做して自殺の自由を否拒せんと試る者もあれど、該細胞が無能有害の病細胞ならん場合に、其の自滅が何故絶待的に非認せらるべきか解し難し。或ひは自殺は動物が自衛の生欲（インパルス）に戻り、人間が向上の本性（インスチンクト）に背くが故に非なりといふ。是れ將た不備の論なり。何となれば生來の欲に背き、本然の性に悖るゆゑに非なりといはば、大概の戒律、大概の制規、およそ人爲に成れるもの——文明の所産——は斯くして皆非認せられつべき虞れあればなり。或ひはまた論じていふ、自殺は忍苦の勇なきに原因す、故に非なりと。是れもまた半面の觀察なり。圖表を參照せられん人は、如是の評は只消極的自殺にのみ適合することを悟るべし。要するに、無上命令を前提とする一種の宗教的批判を離れては、自殺は或ひは非、或ひは是なり、之れを絶待的に非認すべきの理は發見しがたし。

第四　「是認」の種々義

然らば如何なる場合が非認すべくして、如何なる場合が是認すべきかといはんに、之れに答ふるに先きだちて一通り「是認」の意義を定めおく必要あり。夫（か）の詐欺、强盜、謀殺などいふ明かに他に損害を及ぼす底の罪惡は、通例、俗人も非認し慣れて是非を分け惑ふと稀有なれども、自殺は往々

にして害他せずして利他する場合もあるゆゑ、武士道教育の遺風まだ去りやらぬ我が國などにては自殺者の宣言次第にて、ともすれば同情を呼び易く、是非褒貶紛らはしくなる傾きあり。加ふるに個人中心主義（イゴセントリンズム）の尙ほ熾んなる今日のことゝて、貧と富と、貴と賤と、不公平なる競爭苦鬪の行はる結果、個々人が去就進退の自由、尠くとも其の消極的自由――自滅の自由――を主張するの必要あるより、暗側面（ダークサイド）に立つ者幷びに之れに同情を寄するの徒は、勢ひ自殺是認を唱へんとする傾きあり。然るに其の所謂是認の意義は、其の實おの〳〵殊別にして、甲の是認は乙の非認の義と同一なるが如きこともあれば、又單に消極的にのみ是認せるもありて頗る紛らはし。是れ是非論に移る前に「是認」の種々義を稽査して予が謂ふ是非の義を明かにせんとする所以なり。

一に曰はく、自殺の多數は先天的なり、生理的なり、生存するに適せざるが故に自滅するなり、是れ豈に人力を以てして制むべけんや、是非を超脫せるなり、非難すべきにあらずと。是れ消極的なれども一種の是認なり。

二に曰はく、或る自殺は非難するに忍びざる也。例へば、多年不治の業病に罹りて近く死ぬべき見込もなく、而も生きて自他に寸益なく、むしろ自他に苦惱ある場合に於ける自殺の如き、常情の免れがたき所、人情の必至也、有理（ことわり）至極なりと。是れも一種の是認なり。

三に曰はく、個人は社會に對して義務ありといふも、社會にして無能薄恩、人を益すること空し

からんか、個人は無論之れを脫するの自由あるべし。或ひは多く他を害して脫するの自由は無からんも、只我れひとり脫し去るに何の不可もなかるべき理也。よしや又社會が相應に其の效用をなせる場合たりとも、個人が自由意志によりて脫し去らんに、之れを奈何ともなすべからざる筈なり。彼れ既に生を欲せずといひて去る。株式會社員の脫會に比すべく、春秋戰國の退隱者もしくは米國に移住せしピューリタン宗徒などに比すべし。其の脫去の前後に於ける措置宜しきを得て、所謂起つ鳥の跡を濁すことなく、周圍に甚だしき累を及ぼすことなからんには、如何なる點より見ても之れを非認すべきの理を發見するを得ざるなりと。是れも一種の是認なり。

前の三是認の中、初めの二は特種の自殺のみを是認せり。第一は業病的なるをのみ、第二は人情の至極なるをのみ是認したるが、如何なるを業病的、如何なるを人情の至極と認定すべきかに至りては頗る疑問なり。又第三は無條件にして是認したるに似たれど、是れ將た倫理上に謂ふ眞の「是認」の義とは違へり。倫理上にて「是」といふは「善」と同義にして、奬勵すべく鼓吹すべき者を指せる也。「止むを得ず」、「據ろなし」、「尤も至極」、「人情の必至」、「是非に及ばず」、「非認は出來ぬ」、「如何ともしがたし」など、孰れかといへば消極的なるは與らず。

希臘、羅馬の古代、近くは日本、支那などにて或る種の自殺を是認したるは前の三者と同じからずして、明かに奬勵鼓舞の意を含みたり。父が其の女（むすめ）に懷刀を授けて、汝もし暴漢に辱しめられん

とすることあらば自殺せよと訓へしが如き、戰場にて君危からん時は汝矢面に立てと命ぜしが如きは、積極的是認たること明かなり。武士の務、貞婦の分として是非なく然かせよといふよりも、美擧として善事として士風、女道を鼓吹すべき行爲として敢て推奬したる概あり。其の當否は別問題として、かくの如くなるを倫理上の眞の「是認」と見做すなり。隨つて倫理上にて「非認」といへば、「普くは許しがたし」、「多數には許すべからず」、「推奬すべからず」、「警戒すべし」、「防止すべし」などいふ義を含むなり。

「是認」、「非認」の義をかくの如く解して古今の自殺を品隲せんに、如何なるを「非」とし、如何なるを「是」とすべきか？

第五　是非の理由となるべき條件

凡そ倫理上にて是非の理由となるべき根本條件は三あるのみ。第一、其の人克己力ありや否や、くはしくいへば、自立特行の意志剛强なりや否や、ともかくも目前の小欲に克ち、一時の劣情に克つの勇ありや否や、爲さんと決しては卽ち敢て爲し、爲さゞるべからずと信じては必ず爲し、爲すべからずと信じては必ず爲さゞるや否やと問ふに及びて、然りと答へ得るは「是」なり。否と答へざるを得ざるは「非」なり。蓋し克己は主として對己の德なれども、個々人自立して後に社會はじ

めて成るの理なれば、克己は人倫の最根本の美德たること明か也、これあるも次ぎの二德を缺けば、十分の「是認」を得がたきこと勿論なれども、尠くとも三四分、否、六七分の「是認」を傾し得べき理合あり。是れ往々にして克己力に富める惡漢が一部の景崇を博するに至る所以なり。

第二、其の人に利他――忠恕――の念ありや否や？　くはしくいへば其の行爲の動機は利己的一偏なるか、將た多少同胞をも裨益せんの念ありてか、個人にまれ、團體にまれ、我が一身以外の者の爲に多少利する所あらんとしての行動なりや否や？　必ずしも純粹に利他的すなはち獻身的なりや否やと問ふを要せず、他人の爲、人類の爲といふ情念が利己、爲我の情念と同じ程の度合に存在しての行爲なりや否やと問ふに及びて、然りと答へ得るは「是」にして、否と答へざるを得ざるは「非」也。蓋し忠恕、相愛は社會經營の根本義にして他の二德を地盤乃至煉瓦石に比すべくば、これは漆灰、セメントに比すべきこと辯を要せざれば也。世人の往々にして宋襄の仁、老女の惻隱に流れて而も其の過誤を悟らざる、世の之れを許する者も亦た斯かる過失に對しては兎かくに寬大ならんとを欲するが如き、畢竟皆裏面より此の德の大切なるを證するなり。然れども其の實「克己」にはぐれたる「忠恕」は宜を失へる忠恕、次第を紊りたる博愛、中庸に悖れる慈悲なれば、不具の德たること勿論なり。

第三、其の人の意至誠なりや否や？　夫れ人に好譽の慾――人にほめられたし、好かれたしと思ふ

心――ある限りは、多少の假僞を免れざるは常人の習ひ也。其の勇氣や忍耐や熱心や勤勉や英斷や若しくは忠恕や慈悲や博愛や往々にして表裏なき能はず、矯飾なきを得ず、衒耀の弊なきを保せざる習ひなれば、只其の爲す所のみを見ては其の眞意知り易からず、こゝに於て前の二德――克己と忠恕と――を備へたりと見ゆる行爲に就いても、更に其の意の「誠」か「不誠」かを檢せざるを得ざることゝなる。卽ち其の人の克己は果して誠意よりいでたりや？　其の人の忠恕は果して誠意よりいでたりや？　換言すれば他を欺かざるや否や？　假令意識しては他を欺かざるも、自負もしくは不學の爲に自ら欺くこと甚しく、隨つて知らず〳〵他を欺けるが如きことはあらざるか否かと問ひ、之れに對して然り、欺かずと答へ得るは「是」にして、否、欺けりと答へざるを得ざるは「非」なりと定むべきなり。

以上の三條件を標準とすれば、古今の自殺を是非せんこと難からざるのみならず、何故に或る自殺は是認せられ、或る自殺は非認せらるゝの習ひなりしか、其の理を觀ることも難からざるべし。

第六　是認せられたる及びせらるべき自殺

自殺は意志の薄弱に原因す、卽ち卑法の沙汰なりとは、主として消極的自殺の上にのみいふべし。前に擧げたる、積極的自殺の如きは、概ね克己力の大なるを示せり。彼等は目前の苦惱を忍ぶ能はず

ずして絶命せるにあらで、或ひは大義の爲に、或ひは國家の爲に、或ひは恩人又は意中の人の爲に獻身の誠を表彰せんとして死にたる也。「義は盤石よりも重く、命は鴻毛よりも輕し」、「士は己れを知る者の爲に死す」、「死ぬべき時に死なざれば死ぬるに勝る恥あり」、「瓦となつて全からんよりは玉となりて碎けん」などいふ敎訓を實踐せるものと解すれば「義を見て爲さゞるは勇無し」といふ本文の旨に吻合す、其の當代に嘉賞せられしこと怪むに足らんや？　或ひはまた其の目的は殉義、殉道にあらざるも――利己一偏の動機にいづるも――其の自發的なる點、他力に致されたるにはあらで自力に賴りて英斷するの點、ともかくも他の薄志弱行、優柔不斷、何事も他人の刺擊を俟ちて後に動く駑馬の如き、機械の如き、勇往の熱なく、果敢の炎なく、只死是れ怖れ、只生是れ貪る、末錬臆病なる、豚の如き、狐に似たる鈍根、俗物に比し來れば、幾分か克己力の勝れるを見る。

例へば、彼の悔恨に自殺し、慚愧に自殺し、憤怨に自殺するの徒は、尠くとも其の情熱の點に取り所あるなり。蓋し恥を知るは勇に近し、大辱を蒙りても悔恨悲憤する氣概なきに比すれば流石に賴もしき所あり。世人の此の種の自殺を多少寛假せんとするは、一に此の理に因るならん。

次ぎに、自殺は往々にして至誠の證たり。僞假多き世の習ひとて人の言多くは信ずべからず。予は何々の主義の爲に、敎旨の爲に、恩人の爲には死をだにも辭せずといふ、未だ遠かに信ずべからず。只其の實に死するに及びては誰れか亦た其の志を疑はん？　所謂武士の金打、起請文、血を啜

りての盟約、誓紙、指切、髪切などいづれも疑ふべけれど、彼の死を以て其の意の僞ならざるを證するばかりは所謂獻身の誠にして疑を容るべき餘地なし。其の唱ふる所、其の奉ずる所、其の信ずる所、其の敬する所、其の愛する所の爲に身を獻じたるの明證たり。此の種の自殺の古今に嘉賞せられたる、其の理覩易からずや？

然れども仔細に稽査すれば、古來是認せられたる自殺は、孰れも前の二德の外に必ずや他の一德——忠恕利他——をも兼ね備へたるを見る、すなはち間接もしくは直接に自己以外を利するの自殺たるなり。例へば、彼の業病者又は墮落者——大惡人——などの自殺の如き——こは古今の碩學の屢〻是認したる所なるが——其の是認せらるゝ所以の一は、死して世累を除くといふ利己以外の效果あればなり。我が子又は夫などをして後顧の憂ひ無からしめん爲に自刃せし母又は妻の嘉賞せらるとほゞ同理なり。更に明著なるものを求めんに、彼の稚郎子の如き、平手淸秀の如き、村上義光の如き、佐藤嗣信の如き、コドラスの如き、セミストクリスの如き、ライカルガスの如き、カルシウスの如き、いづれも身を殺して仁を爲せるものなり。或ひは彼の敎訓に殉し信仰に殉せしたぐひ、是れ將た人道を益し人間を利するが爲の故に嘉賞せられたるに外ならず。前にいへる悔恨懺悔の自殺の如きも、一面照々たる天命の畏るべき、峻嚴なる道義の崇むべきを暗示して賊子亂人を畏懼せしむるの效あるが故に是認せらるゝなり。又彼の節操を守りて自殺し、名譽を惜みて自殺せる貞婦、

義士、忠臣等を嘉賞するも、一に一代の德敎に資益する所あるが爲なり。「貞婦兩夫に見えず、忠臣二君に仕へず」といふことは血統、族閥を重んじたる封建割據期の敎義としては動かすべからざるものなるべく、之れを體しての自殺は當代の士風、女道に資益する所ありしや疑ひなし。總じて敎訓、宗義、信仰、美名等の爲にする自殺は「命を義の爲に輕んず」、「身を道の爲に獻ず」などいふ古今遍通の公式（フオーミユラ）、いはゞ無上命令（カテゴリカルインペラテーブ）ともいふべき不易の型（ルール）にはまるゆゑに是認せらる。但し玆に所謂「義」又は「道」は人類又は尠くとも一種族とか一國とかいふ團體に有益なる根本義といふとにして、其の內容は時勢によりて變移し、時、處を殊にすれば相矛盾するとも屢〻あり、例へば「貞婦兩夫に見えず」といふ敎訓の、今は最早——當年の意義にては——嘉賞せられざるが如し。

婆羅門又は佛敎僧侶の入定又はそれに類似の自滅の是認せられたる、若しくはキニク乃至ストア學徒などの自殺が一部の景崇を博したる、將た同理に因る。平生の敎說を實踐して苦樂一如の證悟を示し、啓蒙轉迷に資する所あるを美（ほ）むるなり、利己的動機より出でずして利生化他の念に基けるゆゑに是とせるなり。

第七　非認せられたる及びせらるべき自殺

或る自殺は克己力の大なるを示す故に嘉賞せらるゝ如く、或る自殺は克己力の劣弱なるを證する

故に非難せらる。最も普通なるは此の種の自殺にして、若し有目的の自殺中に文明と共に增加せるものありとすれば、主として是れなり。

蓋し文化の進歩はあらゆる方面に戰爭を公開し、賢愚、俊凡、富貧、病健を同列に立たしめて激烈なる格鬪を敎唆するゆゑに、素養、力量の懸絶は劣者をして甚しく疲憊せしめ、衰弱せしめ、絶望せしめ、發狂せしめ、自暴自棄せしむるに至るなり。

さりとてかゝる薄志弱行が風を成すは、一に文明の弊禍なりと斷ぜんは早計なるべし。其の幾分はむしろ君主政、寡人政の世には同斑に立つを許されざりし多數の劣者、不能者が民主政——平等主義——の恩惠によりて遽かに競爭の自由を得、或ひは資質を顧慮する遑なく、或ひは必要の準備をなさず、或ひは全く赤手にして突然其の競爭場裡に蝟集し相排擠せるの業果とも見るべきなり。今の所謂薄志者にして戰國の雜卒、君主政下の賤奴に比すべきものならんには、彼等の怯懦は今に始まれるとにあらず。されば見方によりては、文明の進むと共に人間の向上心彌〻加はり、隨つて克己力の一段增加せることを發見すべき理由も成立つなり。要するに忍苦力の薄弱なるが爲に自殺するものゝ現在に多きは事實なれど、其の原因を一に文明の罪とするは恐らく妥當ならざるべし。

夫(か)の艱難に克ち苦患と鬪ふの勇なく、一敗忽ち挫折し、却走し、隱遁し、捲土重來の氣慨なく、刻苦奬勵の精根なく、沈潛反覆幾十年一日の如く工夫研鑽する忍耐なく、粗鹵放縱、懶惰蕩逸、當

座の情感に耽溺し、目前の慾、一時の自儘をだに制するの克己力なく、僅に數ヶ月悶惱して自暴し僅かに數ヶ年煩悶して自棄するの徒は、古今東西を通じて怯懦と烙印(スチグマタイズ)し、賤みて女子の爲(わざ)と做すなり。古今の事實に徵するに、自殺の女子に多きは、正しく女子が情に脆うして、男子に比すれば意力に缺くる所あるを示す也。「恥を忍び辱を忍ぶ是れ男兒」とは封建の世にも言へり、前の條件に該當する自殺の曾て嘉賞せられし例なきこと明かなり。當面の苦患に辟易して遁逃すること既に怯なり。況んや自滅して長へに苦患を免れんとするをや。現實主義の個人中心說よりいへば一種の智なるべし、向上主義に基ける協同相愛の道よりいへば更に一段の怯なり。

次ぎに、不誠實の自殺は皆非なり。他を欺ける自殺の如き尤も非なり。私情に死しながら公憤に死せりと傳へしむるが如き遺書を止めたる、主として家政上の困厄に死しながら專ら技藝上の煩悶に死せるが如くもてなしたる、かゝる例古今に其の例乏しからず。名聞を好む者は死に瀕するまでも名聞を好めばなり。之れに比すれば其の情の憫むべきは勿論なれども、同じく不誠實の自殺たるは自ら欺けるの場合なり。或る倫理論者は、自欺は智慮の及ばざるに基くなれば是非を超脫すとなし、之れを難ずる者を功利論者として斥けんとす、所謂動機論者の一派は是れなり。此の說いかゞあらん？ 當人が當座の智慮の及ぶ限りに結果を豫想すれば可なりとせば、短慮者、粗忽者、淺見者は法律上に於ける狂癡にひとしく道德上に一種の特權を有するものとなりて、孔子が智を重んじ、

反省を奬め、『詩』、『書』、『易』、『春秋』を講ぜし意、アリストートルが思慮（プルーデンス）（處世智）を尊み叡智（ウイスドム）（直觀）を崇め、釋氏が見思二惑を排して智慧、禪定を勸めし意、及び中庸を至善とし、仁義兼備を至德とするの理も餘り剴切ならぬとともなりぬべし。夫れ情の上より憫むは一の事にして理の上より是非するは他の事也。混同すべけんや？　況んや其の所謂結果は常識の豫想し得て餘りあることなるをや。

彼の事情いまだ逼迫せず、境遇いまだ至惡ならざるに、逼迫せり、至惡なりと假定し、手段未だ盡きず、術策いまだ窮せざるに盡きたり、窮せりと假定し、「せんかたなし」、「せうことがなし」と歎じ「是非に及ばぬ」、「絶體絶命」、「進退維谷」と叫びて、輕々しく我が境遇を最惡と斷じ、我が命を最薄と信じ、自暴し自棄する者、是れ豈に古今東西の血氣未定の徒、短慮淺視の輩、爲我の情に強く、爲他の念に薄く、隨つて意志の一層孱弱なるともがらの所爲ならずや？　其の無智と魯直とは寔に憐察するに堪へたりと雖も、壹圓金の遺失、隻語の嘲罵もしくは數日の赤貧、一旦の病苦――インフルエンザの苦に堪へずして自殺するもの間〻泰西にありとか――數月又は數年の煩悶、かくの如き瑣屑の事は自殺を是認（ジヤスチフハイ）するの條件となるべしや否や？　意志薄弱の徒は酒、煙草、阿片などの如き嗜好品をすら――甚しきはおのが病ひを治するが爲にすらも――廢するとを難（かたん）ずる習ひゆゑ、生別、死別の苦、失戀、失敗の苦は當然堪ふべからざるものゝ如く思惟し、おのが弱志の辯疏地を

作らんとするにはあらずやと邪推せらるゝまでに、世上の無分別者、薄志者の自殺に同感し、或ひは情死者に頌を獻じ、或ひはロマンチシストの技と才と功とを拔き去りて其の病的思想のみを追へる似而（せ）非詩人、一知半解の僻見家、我儘者、放蕩者の爲に飾非の辭を供して隱然人の子を賊うて察（さつ）らざるものも無きにあらず。これらは其の何の心なるかを解するに困む。言はずや「愛するが故に懲罰す」と。又言はずや「慈悲に似たる無慈悲」と。彼等の謂ひにあらざるか？

或ひは自ら天才を以て居り、直覺、頓悟を以て任じ、他の碌々たる凡才は之れを能（よく）せじとするも我れは之れを能すべきの理なりと獨斷し、增長慢の結果、輕々しく自ら限りて自暴自棄する者もあるべし、其の自ら天才と信じたるの誤りならざる場合に於ても尙ほ天才を以て力行を要せざるものと解したるは一の大謬なれば、是れ將た自欺の一例たり。誰れか能く釋迦、孔丘、其の他古今東西の大賢、大哲をば天才にあらずといひ、且つ彼等は力行を要せざりきと言ひ得る者ぞ？　假令彼のファウストの如く、鬢鬚霜雪と化するの日まで心長く研鑽を續けたりし後といふとも、其の自ら「不能」と限りて之れを名義として自殺するの非は明かなるをや。ゲーテがファウストを捉へて其の傑作の本尊となせるは、主として時の思潮を代表せしむるの便宜に出でたるべし、其の是認の意ならざるは猶ほトルストイの『懺悔錄』に見ゆる自殺の辯護が後のトルストイの意に遠きが如くならん。一代の人智、否、數世紀間の理智に照らして不能と思惟せられし諸難問にして十九世紀には解かれ且

つ實行せられたるの夥しきを思はゞ、一個人が天才の信頼しがたきは知るべからずや？　とりわけて「人生の歸趨に關する疑問」の如き、之れを活人生を離れて單に讀書と瞑想によりて解決せんと試みたるなどは、恐らく先づ一の大いなる誤謬なるべきを、まして其の讀書を、或ひは化學、或ひは哲學、或ひは文學の雜著に限りて咄嗟證悟せんと試みたるなど、これ將た自ら欺けるの一例たるをまぬかるべからず。

或ひは世に謂ふ狹義の本能滿足主義を是と信ずるの結果、マアロウ主義、バイロン主義、ニイチェ主義を實踐せんと欲して成らず、甘んじて自滅を求め、若しくは純理の爲に獻身し、純美の爲に命を致すといふ義に立脚して哲學問題、藝術問題研鑽の半にして自殺するものもあらんか、是れもまた一の自欺なるべし。斃れて後止みてこそ學藝に獻身せりといふべけれ。中道にして挫折するをいかでかは獻身といはん？　又本能滿足にして「人間の天性に率ふ」の意ならんには、其の所謂性は爲我、爲他兩性を併せたる者ならざるべからざる道理なれば、之れを「爲我性の滿足」とのみ解するは心理上既に誤謬あるが上に、絶對個人主義を容認する能はざる筈の倫理の批判は、勿論の沙汰として、かくの如き自殺を非認すべし。尚ほ本能滿足主義の是非は倫理以上也、卽ち所謂道德を超越すといふ反對論に對しては後に節を殊にして辯ずべし。

最後に自殺を非認べき標準は不忠恕——不利他——なり。卽ち聊かも相助相愛の旨に稱はざるのみならず累を協同の上に及ぼすやうの結果ある自殺を非とする也。其の後半——累他と云ふこと——は常識の毎に主として提出する非認の理由にして、謂へらく、自儘なる落命は協同の義務を缺きて社會の一員たるの本分を沒す、故に不可也。又曰はく、緣者、知人、社會に何等かの累を及ぼす、殊に其の人の戸主又は相續者たる場合、さなくも何等か責任を帶べる身分の人たる場合には更に非なり、又時としては同病者、同境遇の者、乃至世間の弱志者に惡感化を及ぼすことあるべきが故に非也と。共に功利主義的見解なり。

されど此の理由は「相助相愛の旨に稱ふ」といふ條件の具はれる自殺すなはち積極的自殺に對しては效力を失ふべきと論なし。何となれば、功利主義より云へば大義の小義を閑却することは當然に是認せらるべきが故に、其の人一人を失ふの不利と其の自殺より結果すべき利とを比較して後者の利一段多大ならばかゝる自殺を非認すべき理なき筈なり。よしまた何等の利得なくとも五分と五分ならば可なるべき理なり。畢竟かゝる條件——累他といふこと——のみを標準として自殺を是非するは俗論なり、重きを置くに足らず。不利他、不克己、不誠實の三條件を參酌して以て初めて眞の是非を斷ずべきなり。

第八　超倫理と自稱する批判數則

或ひは精神上、理性上の苦悶に原因する底の自殺――厭世の自殺、宗教、哲學、藝術等に關する煩悶に原く自殺など――は倫理上の是非を超絶すと論ずるものあり。此の種の論文は概ね抽象的にして含蘊を主とす、隨つて其の用語空靈縹渺、然らざれば高語壯言、讃歎と恣嗟と徒らに繁くして理脈紛糾し易く、人をして眞主旨の在る所を發見するを難んぜしむ、故に却りて底見えざる濁水の深しと思はるゝ如く、曇れる鏡裡の物の影が誤つて幻杳視せらるゝ如く、世間の情に熱し理に昏く、意を味はずして辭の華やかなるを喜ぶ青年輩をして其の淺膚を高遠と誤解せしめ、其の悖理を拔俗と買ひかぶらしむることもあれど、要するに其の大概は偏僻不備の見たり。こゝに其の一二を平語に移して大意を紹介し、且つ當座の略批判を加へん、其の論旨の偏僻なるに關らず、こゝに之れを精論せんことは難ければなり。

曰はく眞理の討究に身を委ねたる者は屑々たる現社會の利害休戚は其の顧る所にあらず、されば若し死が人生の最大疑問を開く金鑰たるを信ずる由などありて進んで之れを經驗せるなりと解せんには、其の死は蓋し眞理のための獻身に外ならざるにあらずやと。

そも〳〵人間社會の利害を全く立離れたる眞理の用とは何ぞ？　其の國、其の時代、卽ち現社會

の休戚を顧みざることは咎むるに足らざるべし、されど自殺して大悟徹底する所ありとも我れ再び蘇することなく、之れを他に傳ふるの術も空しとせんには、當來の天地人に對しても寸毫裨益する所なかるべきなり。さすれば自家が目前の精神的苦悶を解く消極の效用あるのみならんを、何の故ありて高尙の所爲となし、他の貧苦の自殺、失戀の自殺、失敗の自殺と分別するぞ？　其の心的苦悶の死たるに於て聊かも差違なかるべきにあらずや？　情欲の煩悶ゆゑに卑し、理智の煩悶ゆゑに高しといふか？　さるは古代の心理說に泥著せる惑ひなり。自家一身の利害たるに止まる以上は理智の用も感情の用も同價値なり、高卑の別なし。且つ然か截然として峻別し得べきものならんや？

理智――理性――を感情と引離して、其の本來性に於て尊貴なるもの〻如く思ふは、詮ずるに聯想の作用なり。古來の利他的事業が大かた皆理智の介酌によりて成りたればなり。然れども其の實人間は理に生きずして情に生くる也。全く情を離れたる理智は冷索を極めたるものなるべく、其の害あるも益なきこと、恰も全く理智に離れたる情感にひとしく、其の社會を安んじ得ざるは勿論、恐らくは個人をも安立せしめざるべし。所謂煩惱はすなはち菩提なり、衆生濟度の大煩惱を離れたる證悟といふもの古今東西にあるべしや、覺束なし。蓋し理智の滿足は叶ふとも人間は安心し得るものにあらず。予の語にて言へば全情の悅樂――すなはち衆他と大同化するの悅樂――が人間をして安住せしむるなり。且つや理の了解と之れに對する情の滿足とは一ならず、了解すればこゝに之れ

を實にしたき欲生じ、之れを實にすること如意ならざればそこにまた第二の苦悶生ず。彼の一部の青年輩が輕々しく理想――人生觀――を建立したる際の一時安立の如きは、毎に必ず自欺なり、現實界に觸れて忽ち衝突し、壞敗し、又更に苦悶を反覆するを常とす。科學書、哲學書などの耽讀のみによりて證悟を了せんと試むることの誤れるは之れによりても知らるべし。

按ふに人生問題、藝術問題などにて自死するは、彼の道の爲、義の爲に自殺するものと其の對象の抽象的なる點は相似たり、是れ其の實は往々にして純乎たる利己的動機にいづるものたるに拘らず、彼の失戀の死、貧苦の死、失敗の死などに比して高尚げに思惟せらるゝ所以なるにあらぬか？ 然れども如何に對象は高尚なりとも衆生濟度又は忠恕獻身の意が堅實且つ剛毅ならざる限りは此の種の苦悶が人類全體に何の關係なきと明かなり。畢竟懷疑といふことの高尚げに思はるゝも倫理的批判をまじふればならずや？ 大疑は信に入るの門なれば、早晩世を益することあるべしと假定すればならずや？

又人生問題を解き得ずしての自殺は佛教徒、ストア學徒などの自殺とも同じからず。後者は無煩悶の死、前者は苦悶の死、後者は教義、信仰の爲の獻身、前者は信仰なく主義なきなり。假りにありとするも單に「苦しき時は死するに如かず」といふ消極的常識のみ。かゝる教訓をば何者か今新たに誨へらるゝことを要せんや？「世の中に寢るほど樂はなきものを浮世の馬鹿が起きてはたらく」

といふ狂歌にて盡きたるをや。

又曰はく人生苦悶多しと雖も道念の不安定と理智の不滿足とは人間最高の苦痛にして古今を一貫す、聖凡共に免るゝを難んずる所の煩悶なり。世俗の大かたは名利に執着し、食色に惑溺する時、幾多の哲人、高僧、詩人、慨世家等と其の煩悶を同うし、彼等の殆ど實行せんとして辛うじて實行せざるを得し所を實行す、其の死は嘉しがたしとするも、其の情懷の高きと其の知見の超凡なるとは賞すべからずやと。

按ふに人生問題に對する苦悶は、之れを換言すれば究理欲を遂げ得ざるの苦悶のみ。何故に特に究理欲を高尚となすかの理先づ解すべからず。前にいへる理智を情感よりも高尚と見做すの意と同じ惑ひにあらざるなきを得んや？ よしや理智の欲は情感の欲よりも高しとするも、そは畢竟其の作用の結果を豫想し影響を聯念せる倫理的標準の沙汰にはあらぬか？ 超倫理の沙汰としては二者は同價値なるべきにはあらざるか？

且つ此の種の苦悶を以て人間の最大苦痛と見做せるは獨斷ならぬか？ 人間の最大苦悶はむしろ廣く求て不得の苦悶なりとこそいふべけれ――（自殺の種類の圖參照）――物事如意ならねばこそ煩悶生じ、疑惑生じ、理智進みたる者にありては、やがて宗教上、哲學上の疑問ともなるなれ。時としては人生問題上の煩悶はむしろ後に附加したる口實にして、其の實は家庭、戀愛、又は金錢の問

題たることもなきにあらず。所謂厭世家に――名義正しき又は正しからざる方法にて――試みに數千金又は數萬金を投じ見ば、或ひは幾程もなくして樂天家と化すること無きを保しがたし。或ひは其の意中の人とめでたく婚せしめ、或ひは十分の榮譽を與へんには、前日の疑惑或ひは釋然たることもあるべし。要するに究理欲不遂の苦を最上苦とするは不徹底の見たるに幾し。

但し煩悶の極に自殺を欲しぬといふとは尠くとも其の狂熱と眞面目とだけを立證するには足る故に、後の功績――利他濟世――と相照らすに及びて古今の哲人、高僧、詩人等を讃美するときの一箇條に援引することあるは事實なり。而も濟世利他の念の微々たる又は闕如せる場合に於て之れを美とするの理は解すべからず。輕々しく自殺を實行したるは單に其の意志の薄弱なるを證するに外ならざるをや。

假りにかゝる自殺は人生の最大苦悶を代表せるものとなさん、されど代表せるが故に高尚なりとは何が故ぞ？　醉生夢死の徒を警醒し、生ありて死あるを知らざるものを驚覺するが故也といはんか？　是れ既に倫理上而も功利上の沙汰にして超倫理といふ義は亡び失せたるを如何にすべき？

又曰はく、佛敎、ストア敎、其の他古今の厭世說の敎ふる如く、人生は要するに苦患の境なり、而して死は最大最終の慰藉たり。夫れ個人を離れては社會なく、自我を離れては人間なく宇宙なし我れに些の慰藉をも與へざる生は之れを惜むの理なく、之れを棄つるを非とすべき理なしと。又曰

はく、宗敎が權能を亡へる今日、科學の立證する所によるに、到底此の世界は壞滅すべく、又厭世哲學の誨ふる所によれば、人生は深く愛着するに足るものならず、觀じ來れば、營々として蜉蝣の斯生の爲に苦まんよりは寧ろ自ら壞滅を急がんこと大覺悟の所爲たりと。ロマンチシズムの泰西に興りてこのかた、これに類する說は尙ほ幾多あり、就中「死」を詩歌的に諷詠して欣求渴仰の價値あるものと做せるなど、いづれも厭世主義、個人的快樂說、絕對個人主義、所謂本能滿足說乃至神祕說等に因緣せる議論なり。

されば、之れを十分に破せんとすれば、勢ひ件の諸學說を破せざるべからざることなるが、そは既に長きに過ぎたる本論の敢て能すべき所にあらず。今は只數語の評のみ加へんに、そも〳〵褒貶是非といふことは絕對個人主義に立脚してなし得べきことなりや否や？　所謂超倫理の是非は何を標準とするにや？　是非褒貶は必ず標準を要するにはあらざるか？　人々おの〳〵標準を殊にするは標準なきにひとしからんを、標準なくして高しとし卑しとするは無意義にはあらずや？　且つ此の見地よりするときはあらゆる求不得苦の自殺は高しとせざるべからず。所謂無理心中も放蕩の自殺も借財の自殺も皆高しとせざるべからず。彼此を軒輊すべき理由の見出しがたければなり。若し夫れ自ら壞滅を急ぐ云々の說に至りては、其の前提已に假、成住壞滅して輪廻すといふが前提ならば個人が一肉體の滅絕は何等の得失もなく消長もなきに終らんのみ。

又曰はく、善的評價の外に美的評價あり、自殺は人力を以て自然を破するの謂ひ、特に偉大なる目的を遂げんとして苦闘し、敗れて自滅するは壯烈なり、豪宕なり、サブライムなり、ともかくも快絶なりと。

人力を以て自然を破するの名は普通の縊死者も之れを分ち得べきが故にかゝる褒詞は單に大苦闘の實ある場合にのみいふことを得べし。ヒマラヤ山を取崩して印度洋をせばめんと望み、南氷洋の大氷塊を引來りて熱帶の熾暑を緩めんと欲し、或ひは廿世紀のナポレオンたらんを期し、或ひはモルガン、カーネギーを理想とし、若しくはワグネル、シェークスピヤ、ブレトー、アリストートル、ルーテル、日蓮、釋迦、基督、乃至桀、紂、ニロ、カリギユラ、ボルジヤ、清盛等を以て自ら任ずるなど、超倫理的にいへばいづれも同價値に偉なるべきが、かゝる志が如意ならずとて自殺せるを壯烈豪宕とするの理は解すべからず。夫れ利己的意志と雖も其の強烈を證し得れば倫理上にても多少之れを美とするなり、さるは「惡にも強きは善にも強し」の旨によりて陰に其の悔悟豹變を期すればなり。然れども短慮、粗忽、忍耐なきが爲の空想の自殺は、其の口實いかに偉大なるも、之れを壯烈と美むべき理如何にしても見出だしがたし。之れを快絶と評するだにも單に絶望狂憤の暫且の慰藉としての見解の外には如何あらん？　所詮善美を截然として分ち得べしと思へるは惑ひなり。人は何故に優美を喜ぶか？　柔和仁愛の標章たればなり。何故に壯美を喜ぶか？　武斷剛強の標章

たればなり。すべて美感は半以上倫理的聯想と解釋とに因りて成ると明か也。古今東西、或る壯烈なる自殺――又は自殺の方法――を美とするとはあり、例へば割腹の後、腸を掴んで天井に拋ちて死し、六十丈の大瀑に躍り下りて死するなど。而も仔細に考へ來ればそは幾分の善的評價を聯想せるものたるとを發見せずんばあらず。卽ち其の意志力の猛烈なるべきを豫想せる倫理的批判たるに外ならざるなり。（自殺者の發狂者たるを知り、單に模倣に出でたるや否や前の歎美の消え去るを以ても美感と倫理的動機との關係を見るべし）

第九　餘論

人生の危機に際して前途多望の身を誤れる者あるに遭うて之れを痛悼するは人情なり。予は近時散見せる自殺者に同感するの辭を讀む毎に深く其の意を諒とす。只其の同感が一轉して回護となり、再轉して讃美となり、三轉して世の懦弱者の爲に一種の口實を供するの弊を釀さんとするに至りては異議なき能はざるなり。彼の妄りに自殺者を天才視し、其の死を證悟の死なる如くに讃美し、剩へ彼れをして死なしめしは主として社會の罪なり、時勢の然らしむる所なりと唱ふる人々の如きはさなきだに依賴心の盛んなる今の多數の青年をして益〻自責の勇を薄からしめ、妄に世を怨み他を咎めて、自ら省み自ら治むるの必要を忘れしむるものにあらざるなきを得んや？　個人に罪なうして社會に罪あるの例、古今其の例乏しからず、されど之れを人生問題に關する煩悶の自殺の上に言は

んとせば、先づ世に攻學の自由なく、言論の自由無かりしことを前提し、多少の迫害、多少直接なる誘惑ありしことを立證し、幷びに當人の堅忍と至誠と、尠くとも尋常人が經驗するよりも以上の苦闘を遂げしことゝを立證せざるべからず。さなくば其の社會の罪といひ時勢の犠牲といふ、殆ど無意義のみ。何となれば同じ惡時代、同じ惡社會のうちに立ちながら、他は皆安全なるに、彼れ一人斃れたるは、偶〻以て其の天資の薄弱と不健全とを立證するものたるべければなり。是れ豈に惡疫流行時に於ける生得の庶弱と不養生の自業自得とに比すべからずや？

今の僧侶、宣教師、學者、詩人等が誨へ導かざるが故に罪彼等に在りて自殺者にはあらずとや？彼等に罪あるとは或ひは然らん、これがために自殺者に――かゝる意味にていへる――罪過なしとはいふべからず。誨へざるの罪過と學ばざるの罪過と孰れか重きぞ？　彼れは薄倖にして學資を缺きたりしか？　彼れは萬卷を讀破し、古今を通覽し、世故人情を味へりしか？　彼れは千里を遠しとせずして良師を東西に求めたりしか？　彼れは大疑を釋かんがために古賢哲が用ひたりしあらゆる手段を盡したりしか？　恐らくは然らじ。按ふに誨へ導かざるの罪を以て自殺者を回護せんと欲するの結果は意外の推論を招致すべし。何となれば社會に罪ありといはんとすれば、勢ひ先づ其の最も近接せる社會を責めざるべからざると、猶ほ傳染病に罹れる者の其の直接傳染者を怨むが如し。況んや誨へざるの罪は主として其の父母、近親、師友に責むるを以て順當となすべきをや。社會の

墮落が厭世の念を促したるが故に社會其の責に任ぜざるべからずといふ者あり。かくの如きも亦た人情一偏の沙汰に近く、道義上の辯護としてはいかゞあらん？　偶〻以て其の家庭及び其の周圍を罪せざるを得ざるの結論を生ずべきにあらずや？　何となれば古往今來、世を憤り人を憎むの念は、主として其の少年時に於ける境遇と閲歴とに――卽ち家庭、學校等に――發端すればなり。

要するに世の有情の士がかゝる自殺者を憫むはさるとなれども、眞に之れを愛憐せば、此の際むしろ緘默するか、先づ懇ろに其の薄志を誡むるの可なるに如かず。いづれにもせよ罪を其の周圍に歸して薄弱を奬むるが如き回護は避くべきにあらずや？　薄志弱行と爲我一偏とは當代第一の惡思潮なればなり。

第十　總收

前論を總收せんに、自殺は絶對的に非なるにあらず、利他救世の誠意の存在は多少之れをして是ならしむるなり。但し單に自己の爲のみにする消極的自殺は概ね皆非認すべし。其の形體苦の爲にすると精神苦の爲にすると其の有形を對象とすると、無形を對象とすると、動物欲の爲にすると悔恨、慚愧、憤怨、嫉妬の爲にすると名譽欲、權力欲、究理欲等の爲にするとを問はざるなり。其のうち業病不治の爲に自殺するは人情の上より之れを憫み、罪惡悔恨の爲にするは倫理上より見ても

幾分か是なりとなす。若し夫れ謂ふ所超倫理の批判に至りては、悉く人類と絶ち悉く人道を離れて事を是非するの標準成立たざる限りは、殆ど全く意義無きにひとし。自ら欺ける性の滿足は或ひはこれあらん、之れを高しとし之れを壯なりとして推奬提說するの理は未だ發見する能はざる也。

禮の分析表

說明

禮とは當の國家の法律や習慣や威權府(オーソリチー)によりて制定せられたる儀式及び作法を謂ふ。其の大なるは宗教上、政務上の秩序を理し、其の小なるは個人相互の關係より家庭に於ける日常の行住進退を規定す。古來、禮の意義に關しては、學者、就中儒家の說く所わづらはしけれども、一言以て蔽へば、秩序を正すの具たるに外ならず。『左傳』に所謂「經國家定社稷序民人利後嗣」といふ事に、仁齋の所謂「爲其所當爲而不爲其所不當爲」の義を體現したる實を加へなば、禮の用盡きたりといふべし。換言すれば、總稱して禮といふ者を、其の目的より分類すれば、凡そ四となる。第一は主として秩序の整理を目的とするもの、國家を經し社稷を定むと謂へるものは是れなり。下の圖表に就きていへば、宗教的、國際的、國家的と名づけたるもの及び社會的と名づけたるもの、多くは之れに屬す。此のうちには單に久しく恒例となり來れることなる故に、それに悖り若しくは背くことの直接もしくは間接に人心に不安もしくは違變を來す虞れありといふ所より、直接には秩序整理の用なきに行ふたぐひもあり。それらはしばらく措く、他の個人相互の日常交際に關するものゝ如

きは、所謂義の實に外ならざるものにて、行うて宜しきに適へるとが有形の型となりたるなり。

蓋し世故人情に通ぜざる間は、如何なる事が他人の迷惑となり、如何なることが他人の不快を釀すかに思ひ到たらざるが常なれば、何等の惡意も無うして種々の不都合を仕出來すことあり。殊に初對面の他人に對しては互ひに氣心分らず、平生の習慣をも心得ざるが故に、知らず〳〵の間に互ひの感情を害ふやうなる擧動をなすことあり。天眞爛漫がよしといひ、正直でさへあればなどいふは、親しき間柄か長い間の交際の上に言ふべきことにて、普通の社交などには應用しがたし。もとより長き經驗を重ぬるにしたがひ、其の人が愚人ならぬ限りは、早晩此の邊の呼吸をばおのづから合點する次第なれども、とかく間ちがひはそれまでのうちに出來し、つまらぬ感情上の行違ひが導火となりて無用の衝突も起るなり。所謂禮は此の弊を救はんために、半は社會進化の自然の結果によりて、半は卓越せる個人の感化によつて、世に行はるゝに至れるなり。故に禮は大別して二種となすを得。未だ人情に通ぜずして忠恕の手心を解し得ざるゝものゝために他人の心を思ひやる型を誨ふる者と世故に慣れざるために交際場に於ける自制克己の手心を解せざる者に、如何にせば相犯さざるを得て正義の道に叶ふべきかを不言不語の間に誨ふるに足る型と、是れなり。

嘗て中學三年生のために草したる禮の訓あり。曰はく

禮は字典に「義の實なり」と見えたれば、行うて宜しきとが型となりたるなりと解すべし。

「宜しきこと」とは中庸なり、程なり、節度を踰えざる程合なり、侮慢に流れず、狎褻に失せざる程合なり。されども其の大部分を思ひやりの型と解するもあしきことなし。

粗暴、野卑の言動は「傍若無人」などいふ語あるによりて考ふるも、自分勝手一方より起る例の多きと明かなれど、時としては其の場合に臨み、其の人に對して、どう思ひやつてよきかが分らぬために、つい先方の自由を妨げ、又は折角の好意を無にし、何の惡意もなくて他人の感情をきずつくるとあり。志しの同じからざる場合には、感情の衝突も是非に及ばず、又男らしく分離せざるべからざる場合、又は相敵對せざるべからざる場合もあるとなれど、謂はれなくして相畔かんとは協同の本義に戻れり。此の際、何か一定の方式ありて初心者を誨へ導くこと、譬へば九九が計算に用ひられ、浮き袋が水泳に用ひらるゝ如くならば便利ならずや。禮の用はこゝにあり。

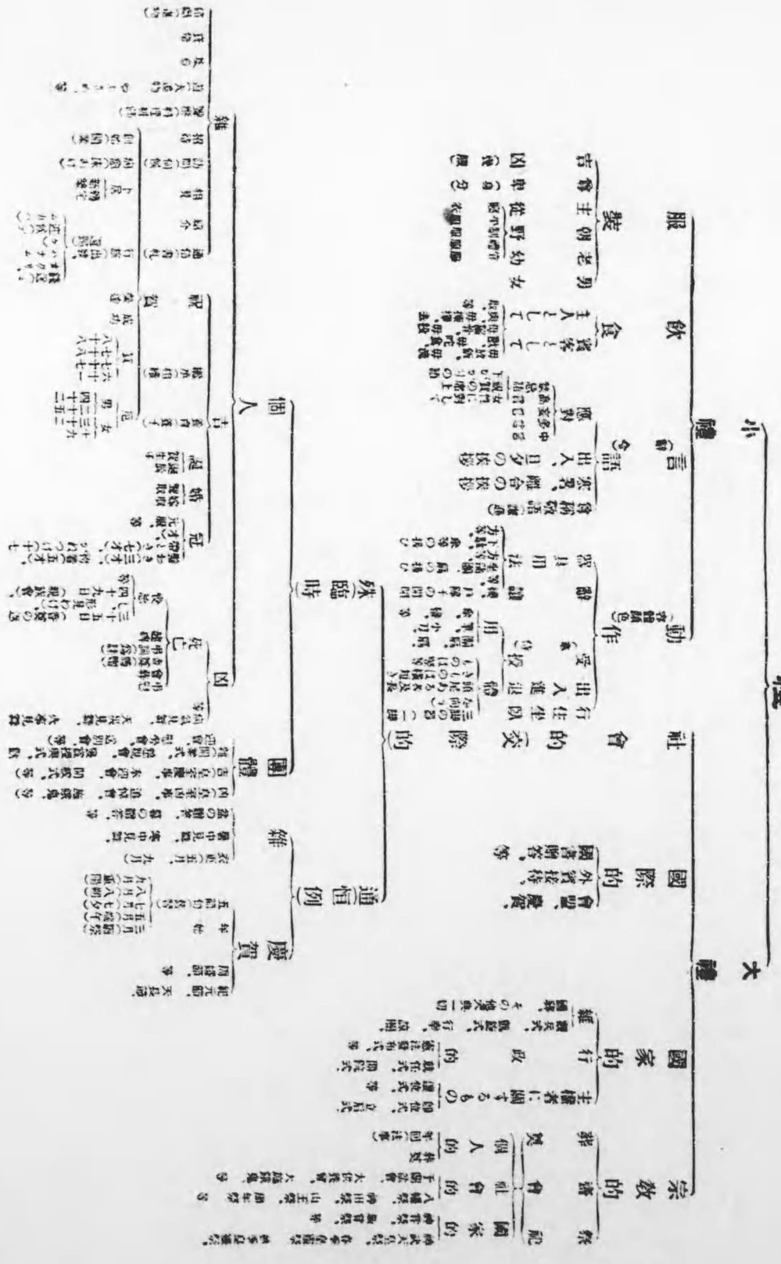
貝原益軒曰はく「人の禮法あるは猶ほ水の堤防あるがごとし。水に堤防ありて汎濫の害なく、人に禮法ありて惡事生ぜず」と。未だ馴らされざる野獸の鎖を要するが如く、人も年少く血氣未だ定まらざるうちは、禮の鎖によりて、暫らく其の野性を馴らすべきなり。

古今、東西とも、日常の言動に關し、又は通信、紹介、訪問、招待、饗應、宴遊、集會、貸借、贈獻等に關して規戒する所を見るに、大抵其の方針は一つなり。行住、坐臥、出入、進退

器具の授受、應對、挨拶の言葉づかひ、辭讓の法、飲食時の心得など、いづれも一を以て貫きがたきはなし。卽ち「自儘を制して他人の心を思ひやる」といふことが眼目なれば、一たび此の理を呑込めば、習はずとも行ひ得べきとのみ。日本の禮に嫻へる人が、學ばずして西洋の宴席などの儀に適へるは、此の理に因るなり。

但し禮は本來が形式なれば、其の作用は機械的となり易く、所謂虛禮、虛儀に流るゝの弊なき能はず。かるが故に、禮儀は正しくして、心術は卑しき者あり。彼の柔術、擊劍の型ばかりに精しうして、勇なく技倆なき者などに似て更に非なり。僞善に近ければなり。或ひは生れながらの勇者あり力士あるが如くに、禮儀、作法は何一つ辨へざれども、剛毅木訥にして仁に近きものもなきにあらず。若し此の二者の何れを擇ぶかといはゞ、禮を知らずして心術の正しきを取るべきこと勿論なり。「過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し」といふことあれども、ひとり禮は足らざるを以て過ぎたるよりもよしとす。

禮は思ひやりを達するを程度として、簡略なるべくして繁褥なるべからず。さもあれ彼の肩を怒らし、腕、脛の醜きを露はし、人前に立ちはだかり、卑語を口にし、粗暴に振舞ふ者と、彼のわざとらしく外容を修め、言語を飾り、世に媚び、俗に阿る者と、双つながら取るべき所なし。



親子骨肉の間は磁鐵の如し、おのづから相牽く。たとへ數月間禮を缺きぬとも、自然の情合はよく之れを調和すべきが、他人に對しては、惡意なきことを知らするの具として、半日も禮なかるべからざるなり。『近思錄』に曰はく「人の家に處する、骨肉父子の間に在りては、大むね情を以て禮に勝ち、恩を以て義を奪ふ」と。げにや親しきに過ぐれば、侮慢、狎褻に流るゝことあり。然れば骨肉の間とても、節度を踰えざらんとすれば、常に禮の用を忘るべからず。禮の用は畢竟ずるに克己忠恕の型たるに外ならざることを悟らば、之れは習ふとの必ずしも難からざるを悟るべく、繁文褥禮の弊に陷ることをもまぬかるべし。此の理を明かにせんとて製したるが上の圖表なり。今煩しければ一々説明を加ふることをなさず。卷頭に掲げたる公德訓及び拙著『中學修身訓』一二三卷に述べたる所等を參照せられなば自ら明かなるべし。

惡德矯正法圖表

說明

一

矯弊斷惡の法に對して古來世間に多少の謬見行はる。世人動(や)もすれば當對(あひて)――卽ち被矯正者――を異にすれば其の矯治法をも異にせざるべからざるの理を忘却す。彼等は之れを譬ふれば、只一二種の藥劑を用ひてあらゆる病患を根治せんとする者の如し。かくの如き療治法も當の醫師にして耆婆、扁鵲の如き神醫ならば、或ひは可なかるべきが、庸醫にして之れを行はんは、甚だ心元なきと言はざるべからず。

被矯正者の種類は、先づ第一に年齡によりて分たざるべからず。幼と弱と壯と强と老とは同じやうに取扱ふべきにあらず。又頑冥なる生得の者と柔順なる生得の者とは同じ手心に扱ひがたく、神經の遲鈍なる者と鋭敏なる者とを同じやうに訓誡するも危し。智足りて意足らざる者と智の足らざるために意の足らざる者とを無差別に扱ふも心得ちがひなり。倫理觀念不明確なるがために非行をなす者と兎も角も正邪善惡の知識ありて敢て非行をなす者とは、其の矯正の手段方法に於ても著し

き相違あるべき筈なり。或ひは、言葉を換へて言へば、十分に世故人情を解したる上にての罪業者（シンナー）と本能（インスチンクト）又は生欲（インパルス）に驅られて、言はゞ殆ど盲目的に惡をなす者との間には、總體に手心の差別無かるべからず。應病與藥といふは是れなり。

要するに、學校に於ける德育と社會矯弊の方法とは、其の方法殆ど全く別なりと評して可なり。德育家と宗教家と其の手心を異にするも此の道理より起ることなり。

屢〻說きし如く、時勢の移り變る時節は季候の激變などに比すべきものにて、あちにもこちにも惡疫瀰漫の氣味あり。社會にも家庭にも道德上のバチルス散布したれば、今日の少年にして多少これに傳染せざるはなし。明言すれば、今日小、中學に入り來る生徒にして道德的に健全なる者は多からず。彼等は父母の遺傳、感化又は社會の惡感化其の他によりて學校に來る以前既に多少の惡癖に染まりゐるなり。既に病ひの種子を有す。白絲の如く白紙の如き少年は稀なり。故に今日の德育は第一に矯治を以て始めざるを得ざる場合尠からず。然るに教育當事者にして此の邊の用意十分ならざる者尠からざる如し。

二

學校德育の當對は常に年少者なり。よしや多少の惡癖に染まりをるにもせよ、未だ世故にも人情

にも通ぜずして、言はゞ半無意識的に惡をなす輩（ともがら）なり。然るに社會改良家又は宗教家などが當對となす所の者は主として壯、强、老すなはち丁年以上の徒なり。彼等はともかくも道德的行爲の三條件を具備して言動せる者なり。曰く善惡の意識、曰く善惡の判別、曰く取捨選擇し得る意志力。中には拔くべからざる遺傳によりて意志の自由を失ひ、譬へば痼疾の膏肓に入れる如き者もあると同時に、多年疾病の痛癢をも經驗し、健康の愉快をも閲歷し、惡の厭ふべき善の愛すべきを知れる者も多數を占む。夫婦の情、親子の情、男女の情、相助相養の利便、孤立寡居のさびしさ、要するに浮世の辛酸甘苦を幾分か嘗め試みたる輩なり。彼の年少者の如何なる意味に於ても眞の愛を解し得ず、社會生活といふことの何たるを味ひ得ず、隨つて「汝の隣人を愛せよ」といふも殆ど何の義とも會得し得ざるが如きと同一視すべくもあらず。

もとより彼等の痼疾となれるは——卽ち多年の惡習癖の凝結して、頑冥不靈となれる者は——釋迦、基督の力を以ても如何ともしがたからん。所謂無緣の衆生なり。併しながら流石に人情を解する素養あるだけに、教化の法宜しきを得る時は、若しくは機緣熱する時は、彼等をして翻然悔悟せしめがたきにもあらず。但しそは外より强ひて貼附もしくは注入するたぐひの藥劑の力にては奏功しがたし。此の點が幼弱者の場合——所謂德育——と最も著しく異なれり。

德育は半以上（なかば）注入的、貼附的、强制的にして而も多少の效を成す。

行儀作法の幼年者の德育上に於ける效力の存外輕視すべからざるは此の理に因る。先づ自制——忍苦節慾——の習練(ドレッシング)を以てはじむる所以は此にあり。德育は勢ひ *don't*（勿れ）に發端せざるべからざるの理も此にあり。宗教家は積極的に命じ、德育家は往々先づ消極的に命ずるの理も此にあり。基督と孔子とが旨を同じくして其の語脈同じからざるの理も恐らく此の理に基けるならん。

三

德育は自制の必要を解せしむると同時に、儒家の語を借りて言へば「克己復禮」を實行せしむることを以て始まる。之れをなすには「勿れ」のみにては足らず、何が善なるかを、幼者の腦力に適する度合に於て、明かに具體的に說明し、如何にして善を選び且つ之れを實地に行ふべきかを誨へ、一旦善を手に入れたらば如何にして之れを持ち續くべきかを誨ふるとが最も必要なり。併しながら薄志弱行が人間に伴ふ根本的惡德たる以上は、又「習癖卽ち人格(ハビット　キャラクター)」の理より推して、善習癖は取りも直さず美德を成し、惡習癖はやがて惡德を構成するの理の否みがたきを思ふ以上は、先づ第一に惡しき癖を幼者に附けぬやうにするが德育の根本要義なるべし。時おくれにならぬうちに矯正すれば大概の惡癖は矯治し得べけれど、丁年近くまで長ぜしめたる惡癖は往々にして絕望に近し。例へば笑ふ癖、泣く癖、怒る癖の如き、中年以後まで癖となりては殆ど改むるを難(かた)んずれど、それさへ

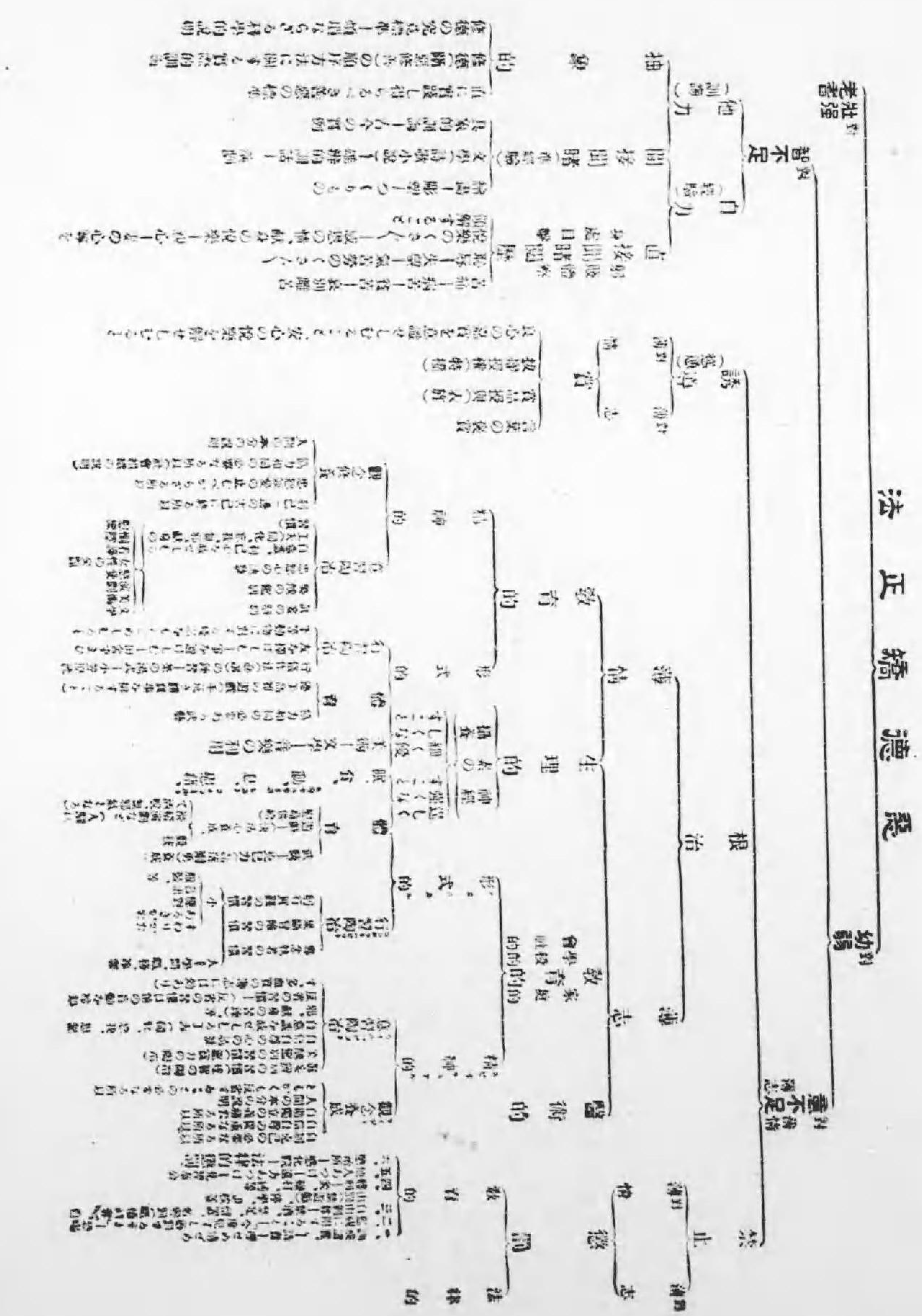
自ら奮つて改めんとすれば改めがたきにあらず。力めて堪へ忍ぶ癖を附くれば、所謂「英雄涙無きにあらず離別の間に灑がず」といふやうにもなるなり。天眞爛漫はあしきことにはあらねど、妄りに西洋風の感情流露を學ぶもいかゞ。輕々しく喜怒哀樂する習慣を養ふときはやがて始末にゆかぬことも起るべし。未開人の酋長などには、六尺の大男にありながら、外套を失ひたりとて大聲を揚げて慟哭するものもありとか。自制の習練なきときはかゝることも不思議ならず。

四

併しながら自制力の强弱は主として當の人間の體質 *temperament* 如何によることなれば、德育者は場合によりては醫師と相談し、先づ徐ろに體質の療治に着手せねばならぬとあるべし。體質の事は、嘗て一の細表を製し試みたれど、未定稿のまゝにて中絕したれば、今こゝに揭ぐる能はず。それはともあれ、彼の古代の希臘人が常に體育に重きを置て、或ひは疲憊に堪ふる習慣或ひは風雨霜雪に堪ふる習慣、或ひは如何なる病患にも負けざる習慣などを養はんと試み、更に興味を以て行ふべき種々の競技乃至舞踊等によりて之れを補ひ、尙ほ種々の學藝、哲學、文學、音樂、演劇、演說、政治等によりて精神敎育を行ひし用意の周到は感ずるに堪へたりと評すべし。

五

下に掲ぐる惡德矯正法圖表は專ら中學程度以下の學校德育の參考用として製したるものなり。丁年以上の者に對しては更に別に工夫する所なかるべからず。學校德育の法とても、こゝには主として當事者のために、解剖的、分析的に掲げたり。これを實際に活用するに當りては、總合的なるべく、機械的なるべからざること勿論なり。又之れを用ふる當事者自身の人格的感化に重きを置くべきこと言ふを俟たず。



刺客論

（明治廿四年講話、星亨横死事件の際）

其の上

我々共が目前に、道德、就中公德上に重大な關係を有する事件が出來した時分に、其の事件を倫理上より見て是非曲直果して如何であるかと云ふ事を審かに研究して置くことは、我々一身の心得の爲に必要であるのみならず、直接もしくは間接に敎育に從事すべき人々に取つては、社會、國家に對する心得の參考として、甚だ必要な事であると思ふ。然る所、ッイ此の間、諸君が熟知の一珍事が出來した。之れに關しては、世間でも、新聞紙でも、紛々として色々の批評があるが、諸君は其れに對して、どういふ判斷をお下しなされたとであるか、また如何やうなる判斷を下すが最も正當であるとお思ひなされる？　或ひは又此の事に關しては是非いづれとも批評を下さいで居る人があるかも知れぬが、之れは是非一應決定して置かなければならぬ事だと思ふ。併し乍ら此間殺された其の人もしくは殺した其の人に就いて、人に拘泥して批評をせんとすると、人間の弱點として愛憎の念がまじり、彼れに贔屓したくなり、之れを辯護したくなつて、爲に或ひは其の正鵠を誤り易い習ひであるから、私はさう云ふ弊なからん爲に、今日は敢て此の間の事件には拘泥せず、むしろ

少しも關係なしに暗殺と云ふ事、卽ち私の言葉で謂へば私殺と云ふ事が、倫理上より見て、善惡邪正如何と、全く抽象的に研究して見ようと思ふから、どうか其の積りで聞いて下さい。

さて、此の研究を始むるに當つて、先づ第一着に廣き意味にて謂ふ殺人と云ふ事は、一體倫理上善であるか、惡であるかと問うて見る必要がある。或ひは常識一偏の人達は、それは言ふ迄もなく惡だ、人殺しは無論惡だと言はれるかも知れぬが、强ちさう手輕にも申されない。元より佛敎道德の上などから言へば、佛敎の一種特別の哲學的見解よりして、殺生と云ふ事をばあらゆる意味に於て惡と見ることも出來る。又必ずしも佛敎に據らずとも、今日の進步した倫理上の見解に依れば、人を殺すと云ふ事は、絕對的に惡と立てるが當然らしくもなる。さればこそ死刑廢止を唱へる人々も輩出し又現に行つた國さへもある。併し乍ら現人間社會の今日の不完全な有樣から言へば、道理上はともかくも實際から言へば、まだ人殺しと云ふ事を絕對的に惡と立てる事は殘念乍ら出來ぬ。哲學上では立つだらうけれども、實際上では立ち難い。例へば、情けない事乍らも、或程度までは戰爭を是認しなければならぬ、而して戰爭を是認した以上は、戰爭中に人を殺す事は無論是認しなければならぬ。よしや刑法の方では死刑を廢するとなつても、戰爭では數多の人を殺す事を是認しなければならぬ。又刑法の方でも、今日の不完全な社會の程度では、色々な理由があつてまだ全く死刑を廢すると云ふ譯には參りかねる。卽ち道理上殺人を是認して居るのではないが、實際上止む

を得ず是認しなければならぬのである。社會、國家の公衆の爲には止むを得ず或程度迄は戰爭で人を殺す事を是認し、刑法上人を殺すことを是認し、乃至正當防禦上また人を殺す事を是認しなければならぬ。

さういふ譯だから、私は殺人と云ふ事を二種に分つて、一を、公殺一を私殺と名づけるが、研究上便利だと思ふ。公殺とは何ぞや？ 公議輿論が是認して居る殺人、戰爭上の殺人、刑罰上の殺人、正當防禦上の殺人、之れを名づけて公殺と云ふのである。然らば私殺とは何ぞや？ 私殺とは所謂自分一個の考へて、いはゞ其の時の出來心で、フイと殺さうと思つて人を殺す場合、若しくは一個人の考へてはなくとも、少數の團體イヤ或ひは多數の團體でもさしつかへない、公議輿論が是認せず、いまだ天下全體の公論が是認せぬに拘らず、其の一派だけの判斷で殺さうと思つて殺す如き場合、之れを假りに名づけて私殺と云ふ。蓋し、今日法律で禁じて居る人殺しは、此の意味の殺人に外ならぬのであらう。彼の英國語に謂ふマルダアは私殺の義である。此度我々の目前に起つた事件も、要するに此の私殺の一種に外ならぬ。仍て此の私殺と云ふ事は、倫理上善惡如何、是認すべきものか、非認すべきものかと云ふ事を決定したならば、自から所謂暗殺と云ふ事が、是認すべきか、將た非認すべきか、分明になるでありませう。

さて私殺と云ふことも、絕對的に惡とは言はれぬらしい。常識に尋ねて見ても、或場合にはたし

かに私殺を是認して居る傾きがある。さすれば、私殺は是か非かと云ふ事を論ずる前に、少なくとも五ヶ條程の標準に照して、豫め鑑定をしなければならぬ。是れは啻に私殺の場合ばかりでなく、凡そ公共の上に利害を及ぼすやうな人間の行爲の善惡を判斷せんとする時には、是非必要な段取と思ふ。卽ちこれから語らんとする五ヶ條の標準なるものは、啻に人殺しの場合のみならず、あらゆる人間行爲の重大なるものゝ善惡を論ぜんとするには、是非採用しなければならぬ標準である。それ故に少々念を入れて件の五ヶ條を說明してゆきますから、どうぞよく含味して貰ひたい。なぜならば、此の後諸君が何か大切な事件に遭遇して、其の是非を判斷する時分に、矢張り用に立つ一種の「フォーミュラ」卽ち倫理上の形式となるべきものと思ふから、是非會得して置いて貰はねばならぬ。

所謂五ヶ條の標準とは如何？ 第一は所由、卽ちモーチヴ、換言すれば如何なる意志に基きて其の事を爲したるぞと云ふ疑問がそれで。二には當對、オブヂェクト、卽ち誰の爲にしたとかと云ふ疑問で。三には目的、エンド、卽ち如何なる結果を生ぜんが爲にかと云ふ疑問。四には場合、サアカムスタンス、卽ち如何なる事情、境遇の下にてかといふ問ひ。五には影響、インフルーエンス、卽ち其の當代及び後世に及ぼす感化、影響如何といふことが一ヶ條。

此の五ヶ條は、何時でも人間行爲の是非曲直を判別する爲の用に立つ標準となるもので、例へば、

爰に一人の男あつて、その男が泥坊をしたと云ふ事實があつたとした時分に、何と諸君、其の行ひの是非を判斷しようとする時に、只其の泥坊をしたと云ふ事實だけに依つて、惡とか善とか確定する事が出來ようか？ 多分出來まい。其のした所を見たゞけてはたしかな判定は附かぬ。どう云ふ志し（モーチヴ）でしたか、其の由る所を調べた上でなければ、輕々しく是非し難い。或ひは親の爲に盜んだのかも知れぬ、或ひは君の爲に盜んだのかも知れない。親の爲、君の爲に盜んだからといつて、善と云へぬかも知れぬが、情狀は大いに酌量すべき譯になる。又爰に一人の者があつて貧民に金を惠むこと數千圓に及んだ。さて是れだけの所業を聞けば、輕卒な人は直に其の人を慈善家すなはち善人であると斯う判ずるかも知れぬが、之れもゝう少し調べて見なければ分らぬ。どう云ふ志しで錢を散じたか、或ひは慈善家と言はれう爲に、名聞心、功名心で錢を散じたのかも知れぬ。よしやさうとしたところで、流石に惡ではないかも知れぬが、尙ほ其の善行たるの價値は半以上減ずると言はなければならぬ。

かやうな譯で、凡そ人の行爲の善惡を判定せんと欲するに當つて、先づ第一に着目すべきは所由である。故に或種類の道德論者の中には只其の所由ばかりに因つて正邪を論ずる人もある。どんな所行をしても、其の行ひがどんなに惡くつても、志しさへ善ければ其の行を恕すべしと云ふ風に論ずる人がある。所謂動機論者で、是れは實に大まかな倫理論で、迚もこんな大まかな議論で以て、

人間の行爲は是非し盡されるものでない。併しそれはそれとして、所由といふものは、とにかく標準中の一ヶ條には入るのだから、先づ此の所由から調べはじめて往くのが順當であらう。なぜと云ふに、爰に一人の人殺しがあつたとする。所がそれは氣が狂つて居ると云ふ事が原因で人を殺したのであつたなら、それは決して罪にはならぬ道理。或ひは殺す積りでなく殺したと云ふ時には、法律でも之れは無罪放免とする。斯う考へた時分には、其の人は眞に殺さうと云ふ意志があつて殺したか、どうかと云ふ問題すなはち殺人の意志が果して確實であつたか、不確實であつたかと云ふ事が着目すべき要點となる。意志不確實と云ふは、他の言葉で言へば、我れ知らずとか、半無意識とか云ふやうな類、例へば事のはずみで、誤つて手が狂つて殺した、過誤の殺人、精神錯亂に原因する殺人、瘋癲白痴が爲す人殺し。此の三種類は、當人少しも殺す氣ではない。瘋癲、白痴の如きは刃が人を殺すと云ふ事さへ善くは知らない、只何の氣もなくヨイトコショと云ふ調子で殺して仕舞ふ。精神錯亂又之れに類する、カッと逆上せて來て、前後忘却してやつて仕舞ふので、之れは法律でも罪とはしない、無罪放免せられるのである。さすれば是れは我々が倫理上で是非すべき限りでない。殺さうと云ふ意志なくして殺したと云ふは倫理上の問題ではない。否、意志確實すなはち殺さうと思ふ意志があつて、私慾的に卽ち自分勝手に人を殺した場合こそ今日諸君と共に研究を要するのである。

併し此の意志確實と云ふ中にも、自ら二種あつて、私情に基く意志もあれば、公情と假りに名づくべきものに基く意志もありませう。私情といへば、私の憤怨、若しくは私の名譽心に據つて人を殺す、それは幾らもある、私怨、私憤の爲に人を殺す例は古今幾らもある。又自分の一時の虛譽名聞よりして人を殺す場合も幾らもある。現に西洋の無政府黨の如きは非常に名聞心に富んだものである、國家、人類の爲に帝王を殺したと云ふことで其の名を萬世に傳へようと云ふ氣が滿々として居る輩が多い。是れは私が臆測で言ふのではなく、ツイ昨日讀んだプロール *Proal* と云ふ人が著した『ポリチカル・クライム』と云ふ本のうちにも同樣のことが述べてある。さう言ふと諸君は、ナニそんな事はあるまい、命を棄てゝ名聞を圖る奴があるものか、と言はれるかも知れぬが、決してさうでない、芳名を萬世に傳へる事が出來なければ、せめて臭名でも竹帛に垂れようと云ふ手合がどうかするとあるものだ。これは心理上より考へると別段不思議でも何でもない。

併し乍らそれらは皆私情の沙汰で、そんな私情一偏から出て人を殺すと云ふ事は、無論常識でも惡と認める。これは研究を要しますまい。殊に諸君の如き學識ある人々に取つては忽ち分る事で、之れは論ずる必要もない。

然らば公情の爲に人を殺すのはどうか？　さて此の公情と云ふものも分類し始めたら限りもなかならうが、先づ便宜の爲に之れを三段に分つ。一は廉恥心、二は報恩心、三は公共心すなはち愛國心、

卽ち博愛仁義の心、此の三つに分つ。廉恥心とは名譽心に似て異なるもので、例へば、「あのやうに卑劣な奴、あのやうな奸賊を横行させて置いては武士たる者の面目が立たぬ。あのやうな奴を此の儘に生け置いては、武士として濟まぬ事である」と云ふやうな心から來るのであるから、これは名譽心の如くであるけれども、少し違ふ。若しくは父母の敵、君の敵、俱に天を戴かず、海よりも深き山よりも高き恩を受けたる所の大恩人を殺した憎き奴、あいつを生けて置いては心が濟まぬ。卽ち恩に報ゆる心が主となつて、人を殺すと云ふ場合もありませう。或ひは又公共の爲に人を殺す、國の爲に其の身を殺して仁をなすと云ふ心からして人を殺す場合、是等は公情に基く殺人であると言ふべきである。かゝる場合は如何か？　是れは少々問題であらう。

併し乍ら、總じて人間と云ふ者は、口に仁義を說いても、心は存外さうでない事がある。人を欺くのみならず、己れ自から欺いて居る場合がある。それゆゑ其の人の言ふ事、其人の主唱する所のみを聞いて、直ちに其の善惡正邪を判定する事は出來ぬ。さればこそ、孔子も其の人の爲す所を視、其の由る所をも觀て、尙ほ其の人の平素安んずる所をも察せよ、と申された。平素どう云ふ理想を持つて居るか、平素どう云ふ信仰に安んじて居るか、其の平素の安立する所、すなはち心の本源までも察すれば、人焉んぞ瘦さんや、人焉んぞ瘦さんや、といはれた。　成程、そこまで調べて見なければ本當の事は分るものでない。口に愛國の爲、公共の爲と言つて居つたと云ふだけで、其の人

を善人と言ふものあらば、それは輕卒の判斷であらう。故に更に進んで第二の問題に移らんければならぬ。彼れ口には國家の爲、人類の爲と言ふと雖も、果して然るか、口では人のためと言つても、實際は自分の爲ではないか、果して他人のためか？　爲我的か、爲他的か？　口には他人の爲と言つて居ても、其の實、自分の爲にして居るのならば、それを名づけて私怨、私憤と云ふ。私怨、私憤の爲に人を殺す、誰れが之れを許さう？　之れを許した時には、天下の倫道は悉く亂れて仕舞ふ。何となれば私憤の人殺しは古往今來幾らと云ふ數を知らぬ、今尙ほ絕ゆる時がない。遠くはマセドンのフィリップも、私憤の刃に斃れた。若しくは亞米利加のガーフィールドも私怨の爲に命を落した。初代團十郎も舞臺の上で杉山半之丞の私憤の刃に落命した。其の他四人斬、十人斬、「己れ、よくも人を馬鹿にしたな！」、「日頃の怨み思ひ知つたか？」、「此の畜生！」バタリ、ドタリ。かう云ふ例は、新聞紙の第三面に連日絕える時がない。實に情けない次第だが、これらは論ずべき限りでない。いづれも皆爲我的殺人であつて、是れは常識も惡いと云ふ事を知つて居る、これは倫理上の問題にはならぬ。が、爰に疑問は、他人の爲に人を殺す場合である。私怨、私憤でなく、全く他人の爲に身を殺して殺人を行ふ場合はどうか、といふのが疑問である。漢學者一流の頭腦で言へば、直ちに之れを善いと言ふかも知れぬが、併しさういふ文章軌範的の大まかな判斷が一番險呑な弊の多いものである。言はんと欲する主意の爲に文を作るにあらずして、文の爲に言はんと欲する事を

延したり縮めたりして居る、惡く言へば似て非なる韓退之流、蘇東坡流、あゝ云ふ修辭的の論文は成程、文章としては讀んで面白いに相違ないが、迚も重大な是非を論斷する時の定木にはならぬ。あゝ云ふ大まかな論では倫理上の判斷は立て難い。

蓋し、他人の爲といふにも色々ある。個人も他人なら、團體も他人だ。個人の爲か、團體の爲か、それ次第で大變違ふであらう。又個人と云ふにも自から別があつて、我れよりも目下の個人の爲か、目上の個人の爲か？ 斯う云ふ疑問が起らざるを得ない？ 目下とは何ぞや？ 我が妻である、我が子である、我が朋友、我が家來、我が子分であるとか、辱めを受けたとか、或ひは殺されたとか云ふ時分に、其の怨みを報いんとして人を殺すと云ふは、許すべきか、否か？ これが先づ問題となる。夫れ妻は自分の半身とも云ふ、朋友は第二の我れとも云ふ、妻や朋友は、詰り其の價値は我れに均しき者と思はんければならぬ。又子分といへば、自分の手足のやうなもの、我が子といへば、我が血肉を分けたのであるから、矢張り我が一部分のやうな者である。我が一部分の爲に他人を殺し、我が半身の爲に他人を殺すと云ふ事を許すべくんば、我が全身の爲に他人を殺すと云ふ事も許さねば理が通らぬことゝなる。而して之れを許せば私怨、私憤の殺人をも善としなければならぬやうになる。要するに目下の爲に人を殺すと云ふは準私憤である。惡と言はなければならぬ。

然らば目上の爲の殺人は諒とすべきか？ 目上とは何ぞや？ 一言以て之れを言へば恩人と云ふ

やうなものをいふのである。親とか、君とか、主人であるとか、夫とか、兄とか、姉とか、云ふやうな者の爲に人を殺すのは如何であらうか？ 封建時代に於ては之れを寧ろ美德として居つた。所謂敵討、曾我兄弟の稱揚せられたのも此の意味、石井兄弟、晉の豫讓、上總忠光、岩見重太郎、宮城野姉妹、赤穗の四十七士、皆此の精神を代表して居るので、義士だ、孝子だと褒められたのである。これはどうであらうか？

夫れ封建時代は家族制度、階級制度の時代である。其の時代に親といへば一家の長である、君といへば小なるも一地方、一州の長である。階級を重んずる制度、主義の必要上より、長上者を重んずる事は第一の美德と立てゝあつた。凡て長上者を尊敬し崇拜すると云ふ事が美德となつて居る以上は、其の長上者が他人の爲に殺された時に茫然として其れを觀過して居る者は甚だ不道德の人間と見做さるべき筈となるのである。君父の仇は俱に天を戴かずと云ふ事が自然と論理上に結びいださるゝ次第である。蓋し、親の爲には身を棄てゝ仇を討つ、君の爲には身を殺して仇を報ずと云ふ者が輩出すれば、隱然と封建制度的大義名分を明かにし、兼ねて其の國の士氣を鼓舞する道理、大いに義烈の心を誘致奬勵する所以となるであらうから、封建時代に於ては何れの國でも、或程度までは斯う云ふ主意の仇討、すなはち恩人の爲に人を殺すと云ふ精神で成立つた仇討は許したものである。併し乍らそれは封建時代の事で今日の如き寧ろ個人を單位（ユニット）として、社會を組織

して居る時代に於てかゝるとを是認したならば、それこそ國家の秩序を壞亂する事になる。且つ又復讐と云ふ事が隱然刑法の精神となつて居つた時分ならば、其の方からも幾分か斯る制裁を許すことが出來たであらうが、今日では何處の文明國でも法律の精神が一變し、私の復讐はいふまでもなく禁じて居る。我が國でも法律でそれを禁じて以來既に久しい。而して今日に至る迄それに對して異論を唱へる者のないのを見ても之れは今日論ずるには及ぶまい。今の人は復讐が何故に禁ぜられたかと不審に思つては居ない、如何にも禁じた方が當然であると思つて居るのであるらしいから之れも今日の問題外である。いひかへれば目上の爲の私殺も今日では準私憤の殺人として非認せらるべきものである。

私が諸君と共に今日研究しようと云ふのはそれではない。專ら團體の爲と云ふ名義の下に行ふ私の殺人、それは倫理上如何判定すべきかと云ふ事である。之れをも便宜の爲、四つに分つて見ませう。必ずしも四つには限らぬが、ほゞ四つで蔽へようと思ふ。曰はく、一門族の爲、曰はく一黨派の爲、曰はく一國家の爲、曰はく、人類全體の爲、斯う四つに分ける。其のうち一門族の爲と云ふのは、平家の爲とか、源氏の爲とか、德川氏の爲とか、豐臣氏の爲とか云ふ名義の下に勝手に殺人を行ふ場合で、是れは古往今來東西の歷史に其の例が夥しい。封建時代には常にあつた事である。晉の豫讓も或意味に於ては或一門族の爲に復讐をしようとしたのである。上總介忠光が姿を變へて賴朝に近附いたのも矢張り其の精神である。かゝるたくひは今日是認せらるべきであらうか？封建時代に於ては、彼の復讐を許したと同じ道理で、君の爲と云ふ意味で、是認どころか美事とした次第であつたが、今日は最早家族制度の時代ではない、然るに尙ほ或一階級、一門族の爲ならば殺人をしても構はぬと云ふ事を是認したならば、其の弊や延いて果しなきに到るであらうと思ふ。

皷際家亡びて蛙畑家榮える、皷際家の子孫が蛙畑家の當主を覘ふと云ふやうな事を、あつちでもこつちでもやり始めた時分には、いゝたちごつこで、殆んど際限がなからう。併し若し其れが家康とか賴朝とか云ふ男が果して實に惡人であつて、平家又は豐臣家の敵であるのみならず眞に國家の敵である、人類の賊である、それゆゑ公道のため之れを殺すのだといへば、それはおのづから別問題である。彼の芝居でやる惡七兵衞景淸などは賴朝を覘つたものゝ必ずしも賴朝を大惡人と思つて居たのではないらしい。彼れは中々豪傑である、大政治家である、と內心では心得てゐるが、只その平家の仇敵であるゆゑに、義として之れを討たざるを得ない、と思ひ込むのであるらしい。とにかく芝居などではさう云ふ風に公言させて居る。それがまた實際武士的道德の理想で、敵手の善惡正邪には構はず、只一門の怨みを晴らさん爲に、平家の西海の波間に沈んだ其の怨みを報いん爲に、賴朝を殺さんとする、それが美德とせられてゐたのだ。併しさう云ふ精神であると、それは詰り私怨私憤の類で準私憤とも云ふべきものになつて仕舞ふ。決して今日では公憤とは見做されない。

だから此の一門族の爲にすると云ふ殺人は、今日では是認しがたい。諸君も之れは是認せられまいと思ふ。

然らば黨派の爲にする殺人は如何であらうか？　是れもまた其の例は夥しい。保守黨と改進黨との如き、若しくは專制黨と自由黨とが衝突した場合、乃至は民權黨と王權黨との爭ひの如き、黨派軋轢の餘波として、ともすれば敵黨の首領を暗殺する事がある。現に我が國の維新の際の如き、勤王攘夷黨とか開國佐幕黨とか云ふ黨派が互ひに軋轢した結果、公知卿暗殺せられ、佐久間象山も爲に仆れ、櫻田の事變も是れが爲に起つた。又大久保が殺され、岩倉公が襲はれたのも、畢竟征韓論のとばつちりである。矢張り黨派爭ひの結果だ。亞米利加のリンコンのやられたのも、一面は南北戰爭の餘波、佛蘭西のカルノーが殺され、伊太利の皇帝ウンベルト乃至墺太利の皇后が命を落されたも是れ皆無政府黨の所爲である。若しくは露國の皇帝アレキサンドル二世が爆裂彈の爲に落命せられた如き、遠くは羅馬のシーザーが大神殿に於て、カシヤスの爲に仆れた。こんな例は一々擧げたら限り知られない。かゝる殺人は一體是認すべきことであるかどうか？　社會黨、虛無黨の輩は無論是認すべきものと言つて居るであらうが、實際如何であるか？

併し爰に注意すべきは、どの黨派も〳〵、未だ曾て自分の黨派を不義の黨派、不正の黨派と名宣つた事のないといふ事で、いづれも皆我が黨は正義の黨派なりと言つて居る。そも〳〵此の正義の

黨派と云ふ意味は如何なる意味であるか？　按ふに我が黨の主意にして貫かれなば、小にしては國家の利福たるべく、大にしては人類全體の大利福となるべしといふ主意らしい。正義の意義は此の外にはある筈がない。虛無黨や無政府黨とても其の暗殺を行ふに當つては、皆正義の爲すなはち國家の爲、人類の爲と云ふ意味を以てやつて居ると思はれる。果して然らば黨派の爲と云ふのはほんの表看板で、奥へ這入つて見ると一國の爲といふ意、もつと奥へ這入つて見れば人類の爲となつて居る。そこで此の一國の爲乃至人類の爲にする殺人ならよいかどうかと云ふ事は又更に調べて見ねば分らぬが、とにかく黨派の爲といふだけでする人殺しの是認出來ぬ事は黨人自身の自白で明かであらうと思ふ。

然らば一國乃至人類全體のためと言ふのならば善いか？　段々詮じ詰めて來た。さて此の一國の爲とか人類の爲とか云ふ名義の下に暗殺を行つた例、是れもまた夥しい、數へ切れない程澤山ある。幸ひに今紹介したプロールと云ふ人の『ポリチカル・クライム』と云ふ本にも、古今の例が載つて居るから、詳しくはそれを見て貰ひたい。それとは別に、手近い例をいへば、維新前後にあまたある。井伊直弼が殺されたのも矢張り此の國の爲と云ふ名義の下である。横井小楠の暗殺せられたのも矢張りそれ、板垣伯は共和政體を日本に布かんとする逆臣と思ひ違へられて相原の爲にきずつけられ、大隈伯は其の條約改正の方案が日本の國辱を釀すものと誤解せられて既に危く、或ひは露國

皇太子、今の皇帝を近江の湖水の邊りに於て傷けた津田三藏、或ひは李鴻章を狙撃した小山六之助、いづれも皆國の爲と云ふ名義で行つたのであつた。又は佛蘭西革命の際、革命黨の首領の一人マーラーを刺したシャーロット・コルデー、乃至羅馬共和國の爲にならぬと言つて、我が信友を刺したブルータスの如き、皆是れ國家の爲と云ふ大義を主唱して行つたのである。併し乍ら一國の爲ならば私殺をするも構はぬと言へようか？　一國の爲といふも一家の爲といふも一身の爲といふも宇宙の大局よりいへば、共に是れ利己的ではないか？　一國の爲になら可いといへば一門族の爲にも可いといはれさうではないか？　たしかにさういふ恐れがある。さればこそ凡そ我が國の爲にすると唱ふる者は、常に我が國は一番善い國である、宇宙最上の國である、中華である、言換へれば我が國は人類の精粹を代表して居る國である、外國は皆蠻夷である、すなはち我が國の爲を圖るのは、取りも直さず、眞に人類の爲を圖るのである、と斯う唱へる。所謂帝國主義、再譯すれば君臨主義なるものは、此の主意で公々然と主張せられるのである。さてかく解すれば國の爲にする殺人は、畢竟は、人類の爲の殺人であるといふことになつて、これこそは眞の公憤と名づくべきものだといふ結論が生じさうになる。既に公けの爲に憤を發し、一人、一家、一國の私を離れて、人類全體の永遠の利益の爲にと云ふ事を標榜して、たしかに奸賊と見定めた者を殺すのであるとしたならば、是れは無論、公議輿論の是認すべき事で、形は私殺であつても、其の精神は取りも直さず公殺である。

かゝる種類の暗殺を、或ひは名づけて天誅といふは全く此の精神を是認したからの結果であらう。さてこれはいかに判定すべきか？　是れ卽ち私が今日諸君と共に研究しようと申しいだした所の本問題である。一寸一息して研究をつゞけませう。

其の下

さて人類全體の爲に人を殺すといへば、それは取りも直さず公殺であるから、是認すべきであるかと申すに、其の終局の目的が果して如何樣であるかと云ふ事を明かにせぬうちは輕々しく斷じがたい。何の爲に、すなはち如何なる結果を生ぜんが爲に、人を殺すかと云ふ所まで取調べた上でなければ決しがたい。只公憤であるから私に人を殺しても可いと云ふ譯にはいかない。之れを譬へて言ふならば、爰に或醫師が來て、諸君に向つて、之れは確かに人體に有益な藥である、召上れと言つて出したらば、諸君は直ちに口を開いて其れを飲むか？　只藥であると言つたばかりで、其れを直に飲みますか？　飲めば諸君は甚だ輕卒な人と言はなければならぬ。私なら聞き直す、藥なら頂戴致したいと思ふが、抑何に利く藥でありますか、胃病に利くか、肺病に利くか、若しくは虎列刺か、ペストか？　ペストの藥なら只今入用を感ぜぬ、御免を蒙むる、イヤ虎列刺の藥でも御免を蒙むる、と多分其れを排斥するであらう。何に利く妙藥であるか？　肺病の藥なら、肺病患者でない

者は飲むには及ばぬ。殊に肺病の藥などは危險なものだ、無暗に飲むと胃を惡くし腸を惡くする。けれども肺病患者なら止むを得ない、さうと知り乍ら飲むのである。其の邊の理は肺病其の他の經驗のある人は善く知つて居る事と思ふ。マアさう云ふやうな譯で、人類全體の爲、公けの爲と唱へたとて、其ればかりで直に宜しいと云ふ譯にはいかない。其の人を殺して如何なる結果を生ぜんとするか、要するに、其の目的は何ぞ、如何なる終局に達せんが爲になしたるぞと言ふ事を尋ねて見た上でなければならぬ。

更に進んで其の調べに取掛つて見ませうが、凡そ目的は消極と積極と斯う二つに大別してよいと思ふ。消極の目的と云ふは、譬へて言へば、或邪魔物を除くとか、或不平を散ずるとか云ふ、是等は只ホンの純乎たる破壞に止まる、是れが卽ち消極である。其れに反して、今此の人を殺せば、必ず云々の好い結果が其處へ現はれ來ると云ふ見込があつてやるのを積極と云ふ。目的の本領は實際これでなくてはならぬ。

さて、公憤的殺人の場合に於ては、其の目的の種類を積極、消極の二種を併せて數へあげて見ますに、私の推理力の及ぶ限り、想像に浮んだ限りでは凡そ七ヶ條ある。尤も七ヶ條には限るまいが、大抵は是れだけで蔽へようと思ふ。

a 遣憤

b 返報

c 豫防

d 威嚇

e 面目を立つる事

f 士氣鼓吹

g 當面の障害を除いて或事業、ト畫を進捗せしむる事

此の七ヶ條である。此の中*c*の豫防と*d*の威嚇とは積極と消極との兩方の性質を分取して居る。譬へを以ていひませうが、諸君がどうかすると、癇癪を起す事があるだらう、其の癇癪を起した時に、運わるく傍に玻璃の罎か何かゞあると、何の罪もないのに、其れを引掴んで石へ叩き付けると云ふやうな事があらう。其れは抑〻何の役に立つことだと尋ねると、罎を壞せばともかくも胸がすいて癇が治まると言ふ。これらを名づけて遣憤といふ。さてそのやうな主意で人を殺すのが幾らもある。淺野内匠頭が殿中に於て吉良上野介を斬らんとしたのは是れ、又彼の田沼を刺した佐野善左衞門も先づは此の遣憤主義であつた。別に意味があつた譯ではない、口惜しくつて堪らない、此の畜生と云ふのが主眼であつたであらう。是れも成程人情の上からは忍び難いこともあらう、又多少の效能もあるであらう。隨分是れも、時としては彼の佐野善左衞門の場合のやうに天下の人心を快

うする效能があるかも知れぬ。併し、要するに只物を毀ふに過ぎないのであつて、ガラス位ゐの物を毀ふなら構はぬとしても、人を毀ふに至つては、只遺憤といふだけの消極的の效能では滿足が出來かねる。天下の人意を快うすると云ふだけの理由、目的で、ほしいまゝに人を殺すことを是認する事は出來ませぬ。偏へに遺憤と云ふだけの趣意で以て、人を殺すことは、よしや人類全體の爲としても是認する事は出來ない。尙ほ其の以外又は以上に料簡があり、外に目的があらばともかくも只遺憤だけでは是認が出來ない。

然らば返報の趣意で、人を殺したのは如何であるか？　さて是れも分ければ二つになる。私の返報もあれば公けの返報もある。私の返報を名づけて復讐と云ふ、之れは前申した理由で今日では是認することは出來ぬ。要するに暴を以て暴に易へるに外ならぬ。成程、彼奴は乃公の父を殺した奴であるといつて、其の者の命を取つたら、其れで怨みは晴れませう、卽ち返報にはならうが併しあくまでも消極だ。なぜならば幾ら敵を殺したつて、死んだ父が蘇生する筈はないから、あくまでも消極的で、"measure for measure." "tit for tat." 一人の命を奪はれた返報に更に一人の命を奪ひ、場合によつては我れもまた殺されて命を失ふ。どこまでも消極的である。然らば公けの返報はどうであるか？　そも〳〵公けの返報とはどう云ふのであるか？　譬へば法律が十分勵行せられず、輿論の勢力が微々として功をなさぬといふ場合に、或奸佞横暴の輩が跋扈して私慾を擅まにし、甚しきに

至つては殘忍狂暴の振舞をする、天下の義人、烈士は之れを見聞して到底忍ぶ事が出來ぬ。斷つて一方を見れば、其の暴横者の爲に惱まされて、塗炭の苦患に沈んで居る者も澤山あるが、之れを如何ともする事が出來ないといふ際に、今はもう亂れた社會の制裁は賴まないで、我れ自から正義（チャスチス）の處分者（チスペンサー）となつて被壓制者（オップレッスト）の復讐者（アヴェンジャー）となつて、天に代つて誅戮を行はう、成らうとなら法律に一任したい、輿論に一任して置きたいけれども、今は萬止むを得ないから我れ奮つて彼れに天誅を加へるのである、と詰り、斯う云ふ心で、彼の維新の際の浪士などは暗殺をやつたのであらう。井伊直弼を倒したのも先づは其の精神であらう。天下の正義の士を無暗に牢へ打込んだり、死刑に處したりする、餘り酷い、堪へられない、大義、公道の爲に其の返報をしてくれよう、世間の虐遇せられた人々の爲に仕返しをしてくれよう、私憤の爲にするのではない、と斯う主張してゐたのである。

さて斯うなつたらどうであらうか？

是れは餘程問題だ。成程、虐遇せられた人々の爲に仕返しをすると云ふ事は正義らしくもある、よい事でありさうだが、併し其の仕返しの方法は唯殺すといふ事より外にはないか？　命を取らずとも、何か道德的制裁などによつて、其の者を天地容れざる刑餘の人として精神的に刑戮する途がありはせぬか？　換言すれば、他に絕對的に制裁の法がないのか？　無ければ仕方がない、若しあつた時分には、擅まに私の制裁を行ふと云ふ事は、文明の世、法律の世の中に於ては到底是認の出來ぬ

次第である。のみならず、只の返報には、ならうけれども、結果が返報切りであるならば所謂破壞に止る譯で、何も苛しく裨益する所がない。目指された當人が一人亡くなつた上に、殺した當人も國家の罪人となつて死刑に處せられる。而して殺される程の者ならば惡人ながらも必ずや一豪傑であらう、又殺す程のものなら心も餘程確固して居て之れもまた尋常人ではなからう。すれば取りも直さず二人の生命を其處で破壞して仕舞ふ譯、而して別に實質的の益はない、只返報をしたと云ふだけで、消極的である。幸ひにして其の外に何か他の結果が附いて來れば、其れは又別問題であるけれども、何も附いて來ない時分には只破壞たるに止まる。ガラスの壜を叩きわつたやうなものだ。さう云ふ殺人ではどうも是認が出來ぬのみならず、外に制裁の法があるかも知れぬので、第二に不滿足、第三には其の殺された當人が果して其の殺した者が思つた通りの奸物であつたか、若し誤解ではなかつたか、臆測ではなかつたかと云ふやうな疑問も殘つて居るし、それこれ甚だ以て不完全である故に、是れだけの理由では公共のためにしたと言つても是認は出來ぬ。其の外に或好結果が添ふか否かゞ問題だ。

然らば何か弊害の豫防になるといふやうなことがありはしないか？　例へば、黨派の爭ひの場合で言つたならば、確かに其の一人を除いたならば、反對黨の勢力を沮喪せしめて其の黨勢を殺ぐことが出來ると云ふやうな功能がありはせぬか？　併し、さういふのは、時に依ると間、私怨、私憤に類

して來る氣味がある、なかば復讐的の氣味を混じて來るから、餘程注意せねばならぬ。其の黨派が果して善良の黨なりや否やなどゝ云ふ事もよく調べた上でなければ、是認する事は出來ぬから、どうか反對黨防害といふ意味のではなく弊害豫防、卽ち此の豫防と云ふのに力を入れて考へて貰ひたい。例へば、今日德教の地に落ちたのは、全く先導者たる資格の者が責任を重んぜぬからである、破廉恥の振舞をしたり、或ひは暴橫の振舞をするからであると頻りに唱へる人も多い。如何樣さうも申されよう。それにしても、誰れだらう、其の一番酷い奴は、世の風紀を壞亂する奴は、と斯う研究した結果、正に彼れなり、とマア觀察したと假定しよう。災ひの根は彼れにあり、彼れを刈れば他は棄てゝ置いても差支ないとかう考へたとする。詰り、ブルータスがシーザーを殺したのも其の主意であつた。ブルータスは思つた、シーザーは災ひの根である、彼れさへ倒せば他は棄てゝ置いても崩れるだらうと。此の時カシヤスは諫めた、シーザーを一人殺しても、彼れの他に尙ほ其の股肱たる所のアントニーがある、彼れある內は安心は出來ぬ。彼奴も同時にやつてお仕舞ひなさい。イヤ〳〵我れは好んで人を殺すのではない、涙を揮つてシーザーと云ふ親友を禍根なればこそ倒すのである、彼れさへ倒せばアントニーの如きは赤兒も同樣、何畏るゝに足らんや、と言つて、カシヤスの諫めを用ひなかつたが、遂に其のアントニーの爲に敗られて仕舞つた。それは兎に角、其のブルータスと同じやうな心持で、彼れ一人を倒せば消極的ながら國家の大害を未だ甚しからざるに

豫防するに足るといふ考へてやつたとしたならば、それは如何なものであらうか？　之れを病氣に譬へて言ふなら、是れが病氣の根だ、ペスト將さに流行せんとするの徴あり、警戒せざる可からず、處にもよれ中央首府の而も大學の醫學部といふ所でペスト菌のある鼠を發見した。是れは大變だ、一度ならず二度も出た、病毒は此所にあるに相違ない。確かに大學の外にはない、と斯う判然見極めを附けて、さて遂に大學の一部を燒拂ふことゝなつた。ほゞ五千圓ばかりのものを火を放けて燒いて仕舞つた。恰も其れと同じではないか？　彼奴が腐敗の元兇だ、此の元兇さへ除いたならば、他は風を聞いて改まるであらうと兎も角も當人はさう考へてやつたとしたなら、さうしたらどうであらうか？　世間の新聞紙が陽には暗殺を批難し乍ら、陰には幾らか賞揚もすまいが是認するやうな影の見ゆるは、蓋し此の主意を諒とするからではあるまいか？　何と是れは道理が立つか、どうか？

今大學のペストに比較したが、是れは鳥渡俗人の心に分り易い比較かと思ふゆゑ、之れにすがつて論じようが、大學のペスト……是れは決して臆測でなく、想像でもなく、醫學專門の博士など云ふ人々が、其れ〳〵顯微鏡的に、科學的に取調べた結果、ペスト菌に相違ないと斷定し、且つ其れも一度ならず二度までも明かに鑑定した上で、此處をさへ燒き拂へば大丈夫である、外には決してない、どう調べて見ても外にない、と取定めた上で、五千圓ほどの公財を燒き棄よう、天下の公財であるが止むを得ぬ、燒いて仕舞はう、病毒を絶やす爲に五六千圓の犧牲は是非に及ばぬと、さて

周圍に亞鉛の板を張つて、鼠の半疋も出ぬやうにして、外に燃え移る虞れのないやうな準備もして、さて、燒くといふのであるから、誰れも安心して是認する。併し暗殺の場合を其れと同じ事だと言へようか？　爰に何の某といふ男があるとする、其の男は豪傑だか、奸物だか、俗物には分らぬ。世間の評判では色々な惡名を與へられて居る。併し世間の評判位ゐ當てにならぬものはない。よし其の人の行ひが惡いと極つても、新聞紙の言ふ通りではないかも知れぬ。拙者は奸物と信じたと言つたとても、其の人が人情博士でない以上は、直覺的心理學者でない以上は、誤解と云ふ事もあらう、謬見を抱く事もあらう、殊に交際しあふ中で無い人の鑑定などは當になつたものでは無い。之れに比ぶれば、彼のペスト菌は有形的のものであるから、之れを調べるのも容易だが、無形の人の性質は甚だ以て見分けにくいものだ。ブルータスがシーザーに交際したのは尠くも十數年であつたらう、然るに全然シーザーを奸雄と見拔いたのは餘程末であつたのである。分らぬものと見える。斯う思へば平素交際して居ない人間が、餘所から觀察したとてどうして眞相が分るものではない。よしたしかに殺すべき價値のある奸雄であつたとしても、其れを殺したならば必ず弊源を絶つ、世の病毒の療治が出來ると云ふ保證が出來ようか？　一體人世に奸雄が現はれたり、破廉恥な奴が勢力を得ると云ふ事は偶然であらうか、必然であらうか？　是れはそも〳〵如何なる原因より生ずるものであるか？　譬へて言ふなら、爰に一人の梅毒患者がある、見ると如何にも不體裁だ、場所もあらうに頻ぺ

たに腫物が出來て居る、見ともない。乃公の親類にあんな者が居つては外聞が惡いといつて直に出掛けて往つて其れを外科的に療治してやる、幸ひに奇麗になつた、餘程體裁が好くなつた。有難う、お蔭で奇麗になりました。斯う言つて居ると、二日ばかり經つて又出來た、そこで又外科的に取つて仕舞ふ。すると又出來た。これは幾らでも出來る譯だ。なぜと云ふに、其の根本がいけない。根底が腐つて居るから其處からドシ〳〵出るのである。さういふ譯で、世の中に奸雄なり卑劣漢なりが勢力を得て居るといふのは、畢竟は其の社會が腐敗して引出した所の揚梅瘡に外ならぬとが多い。然るを偏へに揚梅瘡さへ取除けば、其れですつかり療治が出來ると思ふのは、餘り大まかな考へではあるまいか？　外に療治法はないか？　いくらもあらう、煎藥を用ふる事もあらう、丸藥、水藥、草根木皮、色々ある。其れらの方法を聊かも講ぜずして偏へに外科の荒療治をやつて、それで利くと思つて居るは未開時代的ではあるまいか？　成程ペストの豫防と云ふ事は大きに必要である、併し其の豫防法も偏へに燒拂ふに限るか？　燒拂ふのは今度日本では始めてやつた事で、其れは、畢竟確かに爰より外にはない、と大學の博士等が認めたから斷行したのである。抑〻家を燒拂ふと云ふは非常手段である、非常手段を取るには餘程確かな見極めがなければならぬ。彼の奸物を除くと云ふことも矢張り此の理で、患者が社會といふ大きなズウタイの患者であるだけに療治法は幾段も綿密周到でなければならぬに、只吹出した一の揚梅瘡を取除きさへすれば其れで可いと思ふなぞは、餘り

に甚しい田舍療法であらう。本元を治めざる以上は其れが再び發するのを防ぐ事は出來ない。

其れなら次ぎの威嚇を目的としたのはどうか？　社會の風紀が紊れ、德敎が萎靡して了つたと云ふ場合には何等かの非常手段を以て風紀を刷新しなければならぬ。どうも酷い事をする奴が公然として白晝に社會を濶歩して居る、あれをどうかしなければならぬ、いつまでも彼奴を跋扈させて置くと人類は益〻墮落して仕舞ふ、あゝ云ふ奴には天誅を畏れしむるがよい、天網恢々疎にして洩さず、たとへ法律は之れを罰せずとも、早晩天罰が來るぞといふことを感ぜしめ謹愼する所あらしめようといふ下心、之れを威嚇 *terrorization* とでも名づけよう。佛蘭西革命或ひは我が維新の革命、其の他總て革命時代に於て、此の威嚇と云ふとが流行る。是れには二つの意味がある。一は風紀を振肅すると云ふ事、もう一つは反對黨の意氣を挫折せしむると云ふ事。彼の佛蘭西革命黨中の最も激烈なるジャコビン黨一輩が盛んに行つた方法はすなはち暗殺であつた。一例を言へば、反對黨數十人を牢屋に連れて往く途で、暴徒が起つて其の三十人を無慚にも叩き殺して仕舞つた。此の人達はいまだ明かに死刑に處すべき程の人でなかつた、すなはち死刑に處すべき名分が立たないから、マーラーの徒が暴徒を敎唆して途中で虐殺せしめたのであらう。所謂私殺だ。又彼の虛無黨とか無政府黨とか云ふ輩のやるのも其れだ。只威嚇すると云ふのが目的である、各國の帝王とか大地主、大資本家と云ふものをドシ〳〵暗殺しよう、さうすれば畏れるだらう。成程、是れは恐れるに相違ない。さ

うしたら大資本私有を廢して國民一般に分配するてもあらう、權力をも分つであらうといふ見込だといふが、それならば實に空な話で、そんな理由で殺しはじめた日には、殺すべき人はどの位ゐあるか知れない、迚も殺し盡さるゝ事では無からう。成程、さう云ふ事をすれば國王や大資本家がアヂ畏ろしいと思ふてあらう、併し畏ろしいと思ふ奴は、眞に後悔したのであらうか？　いや、頗る疑はしい。それに爰に一大弊害が伴生する恐れがある、外でもない、溫和な中立黨が矢張り其の仲間へ引込まれるといふ弊が生ずる。蓋し中立黨と云ふものは由來反對黨と間違へられ易いもので、特に革命の際などには此の中立黨が禍を蒙る、其の最も著しき例は佛蘭西革命の場合の如きで、あの時佛蘭西の改革黨中にはヂロンヂスト黨とジャコビン黨と兩派があつて、それが合同して王政を仆して共和政府を建てたのであつたが、然るに愈〻ルイ十六世を死刑に處すべきか、どうかと云ふ事になると、說が合はぬ。ヂロンヂスト黨は溫和な黨派であるから、是れは殺さぬが可いと言ひ、ジャコビン黨は極く激烈な黨派だから、殺して仕舞へと言つて段々激論があつた末、ジャコビン黨の方では是れはどうしても先きへヂロンヂスト黨からやつて仕舞はなければならぬ、改革黨に似てゐて反對するだけ邪魔になると云ふので、ジャコビン黨の首領、ロベスピール、ダントン、マーラー、何れも酷い激烈な輩だ。此の三人がしきりに協議して反對黨を虐殺する方法を取つた。暗殺は頻りに行はれた。人心恟々として片時も安んじかたい。すると、中立黨の思慮ある者は止むを得ず假面を裝ひ

始めた、今爰で犬死したつて仕方がないから、暫らく激烈黨の方へ味方をするやうな顏をして居て時機の來るを待たうといふので、心ならずも是れに身方をしたので、とう〳〵多數決でルイ十六世の首は飛んで了ひ、改革運動はいよ〳〵以て狂暴を極めることゝなつた。ジャコビン黨は多數を賴んでいよ〳〵酷い事をやつた。中立黨も乘掛つた船で、今更跡へは引かれない、心ならずも身方をしたものゝ、中ごろ又反對して爭鬪動亂止む時なかつた。是れは所謂威嚇と云ふことがとんでもない方へトバチリを生じて害あつて益の無かつた一例である。肝腎要の惡い奴が寒心してくれゝば可いけれども、どう云ふのが黑か白か、正邪の分らぬ時代にはごつちやにされるから、玉石混淆の虞れがあつて、威嚇の眞目的は遂げられぬ。故に是れだけの理由で殺人の是非は出來ぬ。

然らば次ぎの面目を立つる爲に人を殺す事、是れはどうか？　男子の面目を立つる爲、武士の面目を立つる爲、士君子の體面、人間の本分、所謂大義名分と云ふ名義の下に人を殺す、今度の事件なども武士道の面目の爲と言つて居るやうである。これはどうか？　成程、西洋で決鬪が行はれるのも、日本で昔し女敵討といつて、女房を取られた時には必ず其の姦夫を二つにする事が行はれたのも、復讐が行はれたのも、天誅と云ふ事を盛んに浪士が行つたのも、皆是れ武士道の面目と云ふ名稱の下にやつたのであるが、其の手段は別として、其の本意、精神に就いていへば、これは強ち武士道と限らんでも可い。或ひは人道といつても、士君子道といつてもよからう、邪まな奴が暴橫を逞

うして居るに、拱手傍觀して居つて何等の制裁を加へようともしないのは、決して士君子の所爲てなく、正人、義士の面目てないから、苟くも世の士君子たらん者は、決して其れを拋棄(うつちや)つて置くべきてはない、是非共之れに制裁乃至處分を加へなければならぬとであるが、併し直に腕力を用ひて其れを罰すると云ふ事は果して士君子の面目であらうか？　邪まな奴が暴横を逞うして居るのを、只傍觀して居るは、成程、士君子の所爲てはないが、直にそれをほしいまゝに殺すと云ふ事は是認すべきであらうか？　イヤ論理上さう云ふ結論は生ぜぬ筈である。「外に制裁がなければ」と云ふ事へ矢張り戻つて來る。どう考へても外に制裁の法がないとなれば、士君子と雖も殺すかも知れぬ、何の武士を俟たうぞ？　シャーロット・コルデーのやうな女でもマーラーを殺すやうになるかも知れぬが、外の理由なしに只其れだけの理由では人を殺すと云ふ事は是認しがたい。

然らばまだ外に目的があるか？　刺客其の人は或ひは言ふてあらう、積極的に士氣を鼓吹するの功能がある、身を殺して仁を成すと云ふ氣を養ふ事が出來る、大義名分の爲に人は一身を獻ずべきものてあるぞよと云ふ事を、今の自分勝手一方、私慾一點張の手合に示して所謂報國獻身の大和魂を鼓舞せんが爲だ、これが目的だと、斯う言ふかも知れぬ。さて、是れが道理上立つとてあらうか？若し立てば、是れこそ一番重い價打が置けさうな目的のやうてあるが、併し乍ら是れは果して實際士氣を鼓吹するや否や、さう云ふ良い氣風を養成し得るや否やと云ふ事を事實問題として調べてか

らてなければ論にはならぬ。東西古來の歷史を繙いて見て、暗殺のあつた後て士氣が鼓吹されたかどうか？　士氣云々と一般にいふものゝ如何なるが所謂士氣て、其の士氣は決して客氣てはないか？士氣は果して正當の奸賊を殺すものであるか、或ひは無暗に暗殺を好むやうな士氣てはないかなどと云ふ事をも取調べた上てなければならぬから、是れは後に影響と云ふ事を論ずる時に說かうと思ふから、それまて預つて置きませう。

さて、次ぎに殘つて居るのは、當面の障害を除きて或計畫の實行に便ならしむる事、之れを目的とする場合、例へば、封建時代、戰國時代に信玄と謙信とが川中島て戰つて、或時謙信が單騎信玄の旗本へ切込んだ、若しあの時に謙信が信玄をズバリとやつたらどうであらう？　恰も堤の崩れるやうに信玄方は崩れて仕舞つたに相違ない。若しくは山崎の合戰以前に、羽柴筑前守秀吉急變を聞いて中國より引返す、四王天但馬守ひそかに途中に待受けて、あの時秀吉を難なくズバリとやつて仕舞つたらどうであつたらう？　明智光秀の天下は必ずしも三日には止まらなんだてあらう。あのやうな場合には當の敵將を殺すと身方の事業が大いに著しく進捗する。或ひは場合に由つては敵黨の首領をやッ付ける、是れも我が黨の勢力を張るには問ふ功がある。蓋し其の主意て、カシヤスはシーザーを仆したのであつた。其の主意て、クロムウエルもチャールス二世を刑場の露と消えしめたのてあらう。一應は尤らしく思はれる。

右の敵の大將を仆すと云ふ場合は封建の亂世時代のことで、四分五裂の時代であるから、これは如何さま、利益にもならう。併し敵黨の首領を仆すと云ふ事は果して我が黨派の利益になるてあらうか？　チャールス二世殺されて、其れが爲に英吉利の共和政體は安固となつたか？　否、チャールス二世を殺した爲に王權黨の方へ自然國民の同感が向つたといふが人情を穿つた評論、クロムウエルが死するや否や忽ち共和政體が壞れたはそれが重な理由だともいふ。又彼のカシヤスがシーザーを殺したのは畢竟するに羅馬の共和政治の滅亡を早めたも同然である、シーザーの次ぎには其の養子のオクタビヤス卽ちオーガスタスと云ふ政治家が出た、是れが中々豪い男で、シーザーの殺された事蹟に鑑み、愬じひに專制君主にならうと云ふやうな顏をするとズバリやられるから、死ぬまでも自分は帝と云ふ名は取らないで、飽迄人民の總代でございと云ふやうな顏をして、とう〳〵巍々乎たる羅馬大帝國を建設して仕舞つた。實に敵黨の首領さへ仆せば我が事成るべしと心得るのは鼻元思案といふものだ。若しさう云ふ事をして、それで眞に效があれば、反對黨もまた其の顰に倣ふは自然で、卽ちいたちごつこが始まる譯、敵黨の首領を殺した爲に、向うの黨派が挫折した、暗殺に限ると言つて悅ぶ内に今度は向うの者が來て自分の方の首領をズバリ、おのれ返報しやがつたな、といつて又こつちから往つてやる、おのれ又やりやがつたな、ズバリ……ズバリ……暗殺の競爭！……其の止まる所を知らぬ。尤も此の如きは必ずや別に策士があつて、敎唆する時に限る。今

度のやうな場合は、さうでない、單獨でやつた場合だから全く消極的である。敵手が死んで仕舞つたら跡はどうすると云ふ計畫あつてする場合は積極だが、其れは黨員又は策士に敎唆されて行ふ場合に限る。とにかく其れは消極的ではない、確かに目的が積極的である。

さて、以上擧げ來つた所の七ヶ條、いづれも殆ど條理が立たぬ、私に人を殺す事を是認する程の目的としての理由は立たぬと思ふ。併し、よしや其の結果は皆左程重きを置くに足らぬものであつても、本來、人間と云ふものは、さう有形な實利的結果ばかりを目安にして事をする者でもなし、又場合に依ると所謂人情として忍ぶ可からずと云ふ事もあるべきゆゑ、場合次第ではよしや是認する事が出來ぬまでも、諒恕せざるべからざる事もあらうと思ふ。換言すれば、假りに其の所謂目的も宜しきに適ひ、其の所由も宜しきを得、其の當對も甚だ正當であつたとしたら何うであるかといふに、今一つ殘る問題は其の場合如何といふことである。場合次第で非認しなければならぬかも知れず、若しくは目的は間違つて居ても是認するかも知れず、イヤ目的も所由も當對も、共に宜しきを得てゐても非認するかも知れない。之れを要するに、其れは果して殺人といふ非常手段を用ひざる可からざる場合であつたか、どうかと云ふ問題に歸著する。

按ふに所謂場合が二つある、曰はく、絕對的に外に手段なきか、曰はく萬止むを得ざるか、くはしく言へば最早片時も猶豫躊躇すべからざるか、此の二種の場合である。絕對的に他に手段なきと

云ふ意味は、法律の制裁も慥かに駄目か？　輿論の制裁も全く無效か？　或ひは本源を一洗する方が正當の制裁法ではあるまいか？　社會其の物を根柢から改良しせねばならぬのではないか？　畢竟時の道德の調子が低くなつて居るから、そんな奴が出るのである、腐れ肉にわく蛆、古びた醬油に浮ぶカビ同然、源から淨めねば何の效もない。因つて先づ時の道德の調子を高めるのが、最先の段取で、尤も生命ある方法ではあるまいか？　若しさうでなくば、なぜ昔しの賢哲が暗殺を奬勵しなかつたであらうか？　古來決して眞の聰明な人で暗殺を是認した者もなく、又行つた者もない、皆少壯血氣の輩が行つて居るのである。なぜ孔子が暗殺を奬勵しなかつたか？　なぜ基督やソクラテスや其の他苟も一宗の祖となつたやうな人が、之れを皷吹しなかつたか？　孔子の出た時代、孟子の出た時代、基督、釋迦の出た時代は如何なる時代であつたか、殺伐、殘忍、沒道德、悖倫理の世ではなかつたか？　今日ですら尙ほ暗殺を是認するならば、あの時分は尙ほの事、勿論暗殺などは正當手段として是認してよい譯になる。然るに孔子でも、孟子でも、さう云ふ事をしても何の效もないのみか、害のみ生ずると思はれたればこそ列國を周遊して、愚と笑はれ、迂濶と人に詈られながら諄々と說いて廻はられた。迚も主權者の心の据ゑかたから改めさせなければいけない、社會の道德の調子ィヤ其の土臺となる敎育を築き直してかゝらねばならぬと云ふので、あのやうに苦心せられたのであらうと思ふ。道德の調子から改めて往けば、始めて確かな制裁も行へるのであるが、一時の荒

療治をやつたとても、跡から〳〵先刻も申した如く、楊梅瘡が吹出して來れば、何にもならない。

斯う言ふと反對論者は忽ち曰ふ、其れは理窟と云ふものだ、迚も目前に看過しては居られない、一日待てば一日だけ世の中の人が損害を蒙る。二日待てば二日だけの大弊が生ずる。もう斯うなつては一時半時たりとも猶豫する事は出來ぬ、是非急に制止して仕舞はなければならぬ、もう一刻も躊躇が出來ぬと言つて暗殺を行ふに至る。果して其れが其の人の言ふ如く、果して片時も猶豫すべからざるものであるか？　よく〳〵研究して見ぬうちは危險だ。一日延べたら殺さんで濟んだのかも知れぬ。彼の露西亞のアレキサンドル二世が殺された日は如何なる日ぞ？　段々虛無黨の騷ぎが烈しくなつたので、然らば憲法を設ける事だけは認可しようと勅決した日に命を落されたのだ。大隈伯は如何なる日に狙擊を受けたか？　どうも自分の提出した條約改正案が思ふやうに通らない、とう〳〵案を撤去してしまつた、さて歸らうとする其の途中てあのやうな災難に出逢つた。翌日になつたら廢案の事が新聞に出るから、さう云ふ目には遇はんてすんだのてあらう。實否は知らぬが、星に關する一條も、其の一部分は石山買入事件とかにあつた相なが、聞く所に由ると、其の案はあの日否決になつて仕舞つたと云ふ話だ。いづれもゝう一日待つて見たら、同じ殺すものとしても、多少延ばしたかも知れない。であれば猶豫す可からざる事と、自分だけで思つたのは、餘り當てにならない。

然らば他の萬々止むを得ざる場合、人情忍ぶ可からざる場合はどうか？　これも前の片時も猶豫す

可からざる場合と似たもので、當人々々の判斷に任すとあつては、餘りアヤフヤで、漠然過ぎるによつて、大體の定義を掲げるの必要があらう。假りに今私が此邊だと思ふ所を立てゝ見ませう。曰はく「其の人は時の有權者であつて而して明かに大奸物であつて、而も暴威を振ひ、獸力を用ひて現に良民を殊に多數の良民を殺害し、若しくは更に殺害せんとすといふ事實明確にして毫も疑ふ可からざるの場合」是れである。彼の櫻田事件、佐野、有村の輩が井伊直弼を殺したのなどは、多少此の意味からいへば、諒とすべき所があるかも知れぬ。なぜと云ふと政策上止むを得なかつたといふものゝ、井伊大老のやり方が如何にも苛酷であつた。梅田雲濱であらうが、賴三樹三郎であらうが、吉田松陰であらうが、橋本左内であらうが、頻々豕の如く獄に投じて、剩へ恰も瓜を切る如くに斬に處した。所謂安政の大獄である。天下血氣の志士が之れを見て憤慨に堪へなかつたのも無理はない。それでも尙ほそれを是認するのではないが、聊か今與へた定義の場合に叶つて居る所がある。も一つ佛蘭西革命の場合を例に引きませう。彼のジャコビン黨の輩が暴威を振つて、頻りに反對黨をギロチンで刑殺する……少々佛蘭西革命の話をしなければ、歷史を知らぬ人には分るまいが、佛蘭西革命の時にジャコビン黨の首領にロベスピール、ダントン、マーラーと云ふ三人のモンスタアがあつた、就中マーラーと云ふのは實に怖ろしい男で、元は醫者の倅で、物理學者、唯物主義一點張の男だ、それで私怨私憤を時の上流に對して抱くべき仔細もあつて、早くよりして激烈な革命論

を主張して居た。其れが爲に時の政府の忌諱に觸れて捕へられんとして、倫敦へ逃げた事も二度ある。或時は一晝夜程も、巴里の下水内に潛んで居た事抔もある。下水といつても日本の下水どころではない、巴里の下水といつたら恰も我がこえだめだ、其處に潛んで一夜を明した抔いふ經歷の男で、人をも甚しく憎んで虐待を敢てした代りに人にも甚しく憎まれて、それで彌〻刻薄になり、殘忍にもなつた。然るに此の男其の部下に夥多の破落戸、暴漢を卒ゐて居た。巴里のゴロッキは大概其の配下であつたと云ふ位ゐ、其のゴロッキどもが始終亂暴狼籍をしては市民を戰慄せしめた。て世人のマーラーを恐れる事蛇蝎の如くであつたが、其のマーラーが遂に權力を得て議院の議を左右するに及んだから堪らない。イヤどうも人を殺すと數を知らぬ、反對黨を全く殺さなければ止まないといふ意氣込で、始め豫言して曰はく、我れは二十七萬人を殺さんと。はじめ學士會院の論文に落第した時分に「我が憎しと思ふ奴ばらが一固まりの爆裂彈であれば可い、然らばそれに火を點じて一遍に破裂させて仕舞はうものを」と言つた位ゐの男だから堪らない。さう云ふ男が今ジャコビン黨の首領となつて權力を得たのだから其の酷い事は言語に絕して居る。反對黨と見ると片ッ端からギルロチンへやつて仕舞ふ。さて此の時に當つてシャーロット・コルデーと云ふ女があつた。是れは佛蘭西の詩人コルネーユの孫娘に當る女で、時に年二十四五歲、容貌端麗にして、學問もあり、識見もある立派な婦人であつた。革命のはじまつたはじめには、むしろ之れを歡迎して、今日の佛蘭西は

到底大革命を行はなければ、風紀の振肅は出來ないと言つて居つた。するとジャコビン黨が志を得るに隨つて、王を殺すのみならず、ヂロンヂスト黨を殺すと暴虐を極め、毎日〳〵ギルロチンへ送られるもの、多き時は七八十人、始めは巴里の女共はギルロチンへ引かれて往く人々を見て、何れも色を失ひ、奥の間、裏座敷へ逃げ入る程であつたが、終ひには毎日の事であるから、目慣れて仕舞つて、縫物、編物をし乍ら、平氣で見送る。オヤ〳〵今日も澤山往くよ、昨日よりは今日の方が酷い男だの、立派なのと、果は色々亂暴な批評をする者さへ生ずるやうになつた。其れ程までに殘忍至極な事が續くのを聞いて、コルデーは如何にも慷慨悲憤に堪へられなくなつた。迚も此の儘には棄置かれない。一日猶豫すれば又更に二三十人の正人、義士を失ふ事となる。もう生かしては置かれぬ、併し乍らダントン、マーラー、ロベスピール三人の中、さう云ふ事をするのは主としてロベスピールかマーラー、此の二人に相違ないが、どつちを先きへやつたらよからうか？　女ではあるが中中落着いて考へた。さうして新聞に始終目を注いで見ると、或時の記事にマーラーが國會議場で公言した事が書いてあつた、曰はく憎くきヂロンヂスト、我れは今まで餘程彼等を誅したけれども、まだ中々非を改めぬ、よし〳〵、もう二十萬人は是非誅してくれると公言した、といふことが書いてあつた。傍若無人、言語道斷。確かに書いてあるから事實に相違ない。此の上はマーラーを殺さうと云ふので、短劍を懷にして、住馴れし故郷を跡にして巴里の都へ上つて來た。さてマーラーを

訪問して、お目に掛りたいと言つたが會へない。もう此の時分、マーラーは身體が餘程不健康になつて居た。以前色々な目に遇つて、下水の中に身を隱して居たりなどした其の結果、酷い病氣を起して身體が痛んで仕樣がない、始終湯に這入つて居なければ、痛みが堪へられないので、日に幾度も幾度も湯に入り、書き物をするにも湯へ這入つてすると云ふ始末。さう云ふ次第ゆゑ二度訪問したが會つてくれない。そこでコルデーは我れを疑つてゞも居るのではないかと思つたら、今度は手紙を書いて送つた。私は云々の女である。此度我が故郷に於てヂロンヂスト黨が容易ならざる企てを致して居る、それについて發見致した密事があるから竊にお知らせ申さうと思つて出て參つた、どうか逢つて戴きたい、口づからでなければ申上げる譯にはいかない、云々と、申込んだ。マーラーは其の手紙を見て大いに驚き、早速コルデーに面會を約した。其の日は丁度湯から上つた處て、近うとの事で、コルデーはマーラーの前へ往つて、しか〳〵斯樣〳〵の隱謀を企てゝ居る者があるから御用心なさい、と拵らへておいた話をすると、マーラー聞き了つて大いに怒り、「憎くき奴等だ。今に其奴等も殘らずギルロチンに掛けて仕舞はう」と言つた。其の言の終らぬうちにコルデ、は飛掛かつてマーラーをズブリと刺して、たつた一突でやつて仕舞つた。餘程落着いたものであつた。口づからギルロチンに掛けると言ふ所まで聞いてやつたといふ傳說である。其れから押へられて法廷へ引かれたが神色自若として少しも動ずる色なく、法廷に於ても滔々と其の主意を辯じた。少し

も精神は狂つて居ない、確かなものであつたといふ。序(ついで)乍ら爰に横道の話とはいへ、ヤハリ本論に關係ある話がある、卽ち此の時に一青年がコルデーの擧を聞いて感奮止まない。實に我れ男子にありながら女子に先んぜられて誠に面目ない、耻入つた次第であると言ふので、法廷へ訴へ出てた。どうか其の女は女の事でもあるから赦免してやつて貰ひたい、某が代つて死刑に處せられませう、どうぞ其の女を放免して下さい、と言ひいでると偖こそ共謀者が出て來たと云ふので、忽ち彼れは牢へ打込まれ、是れも一緒に死刑に處せられて仕舞つた。するとコルデーが刑場へ引かれて往く姿を見て大いに感奮して筆を取つて論文を書いてジャコビン黨のやり方を攻擊し、コルデーを辯護した者があつた。すると、其れも忽ちギルロチンへ掛けられて仕舞つた。何と、さう云ふ時代の有樣であつて見ると、人情或ひは忍ぶ可からずと云ふ方に近いではないか？

總理大臣の重職に在る人が、或崖際(がけぎは)を通つた時に、其の崖際に一人の赤ん坊が遊んでゐてアハヤころげ陷んとして居る、それを見て、思はず驅け寄つて助けようとすると同時に足を踏滑らして崖から落ちて死んだとする。此の場合はどうであらう？　一國の運命を司る大任を帶びて居る總理大臣が一小兒の爲に命を棄てるとは何事ぞ、餘り輕卒な振舞ではないか？　斯う云ふ議論が出るに違ひない。成程、國家に於ける影響の上から言へば無謀だ。一國の大任を負うて居て、全國の利福を代表する身が、そんな輕々しい事をすべきではないが、人情から言へばどうか？　忍ばれないではないか、利害の問題以外ではないか？　コルデーの場合の如きも、詰り其れではあるまいか？　尤も、獸力を以て人を殺す者必ずしも奸物とは極(きま)らぬ。マーラーの如きは別問題とするも、他は其の當人に會つて問答した上でなくば覺束ない。今まで奸物と思つて居た者も、會つて話をして見たら、意外にさうでもなかつた例は幾らもあらう。維新の際などには屢〻あつた。會つて見ないでやるは危險である。會つて見ても一度や二度では分らぬ位ゐであらう。

要するに、畢竟は國家や社會や人類に於ける利害如何といふ問題に成るのだから、トヽのつまりは其の事が社會に及ぼす影響すなはち當代及び後世の人心に於ける感化までも調べてからでなければ、如何共判斷は下しがたい次第である。さて所謂影響にも善き影響と惡しき影響と二つある。一寸お斷して置くが善影響と云ふは、たとへ只一時だけでも、其の人が奸物であつたと信ぜられ、其の人が殺されたのは正當の罰であるといふやうな感じを世間多數の人が抱いてゐる場合のみに起ることで、さういふ感じの所在せぬ場合には善影響は聊かも無いと思はねばならぬ。さて、其の善影響を三段に分つ。第一は、成程、天網は恢々として疎なれども洩らさず、アヽ畏(こは)いものだ、怖るべきものだと云ふ感じを起させること、殊に其の人が眞に惡人であつた時分には、確かに世人の心に此の感じを起させる。併し其れは惡人であつた場合に限る、萬一惡人でなかつた場合には甚だ惡しき影響を生ずる。ヤレ〳〵善人でも餘り强硬の態度を取ると憎まれて殺される、八方美人に限ると

と云ふやうな感じが起らぬともいはれぬ。第二には青年多感の徒を多少激勵奮發せしむる力があらう。コルデーの場合が其の例證である。第三にはとにかく一時風紀を振肅する力があらう。併し其れはホンの一時間の事、丁度少年に煙草を禁ずる令を政府が布いたやうなもので其の當時に罰せられるのが怖い爲に暫くは謹んで居ようけれども、本來煙草の害あるを會得せず、又內心自制の心なき手合がいつまで謹愼してゐようぞ？　直に又始める。好い證據だ。やめようと云ふ氣が當人の內心に起らない內は、幾ら脅しても謹むは只一時の事で、必ず蔭でやつて居る。何にもならない。さうして見れば此の善影響は極く漠然たるもの、誠に微弱なものと言はなければならぬ。

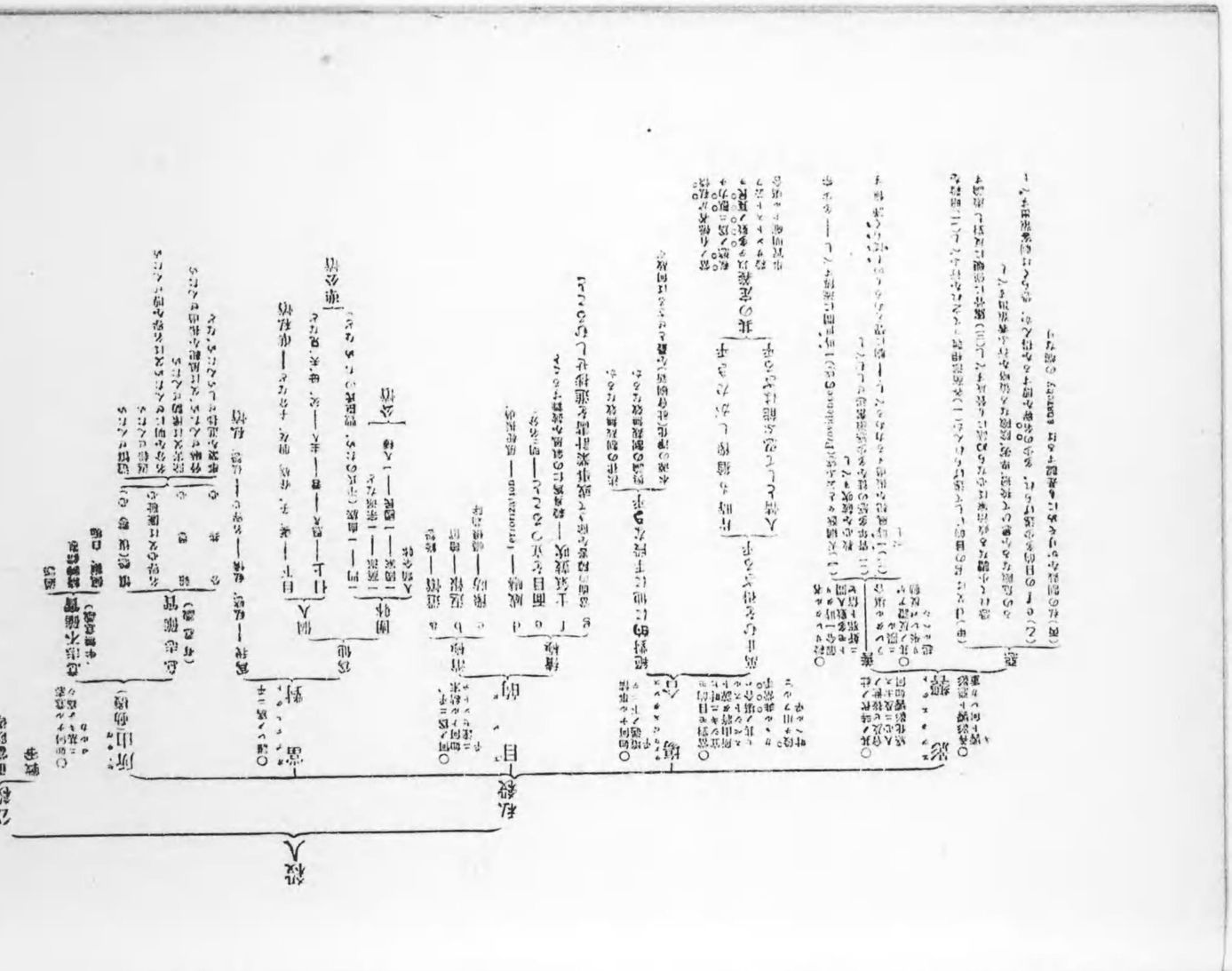
さて此の微弱なる善影響に對する惡影響の方はどうであるか？　惡影響も之れを三段に分つ……追々時間がたつて長びくから、これから後の分は覺え書にある筋書のまゝを讀みませうから聽き取つて下さい。

（甲）威嚇の目的にして遂げられんか、各黨互ひに競つて之れを行ふべし——暗殺流行止む時なからん——所謂天誅を怖れて、尋常の政客は心ならぬ議にも贊成すべし——溫和黨が激烈黨となる悔あり——佛蘭西革命期の實例——露骨强硬に反對し激論するの危險なるを思ひて、狡獪、卑劣、陰險なる政畧を行ふ奸物輩出すべし——シーザーの後にオーガスタス——時政の後に義時。

（乙）當面の障害を除くといふ目的多少遂げられ、且つ其の人の面目立ち、多少の名譽を博するを得んか、暗殺恐らく流行すべし——暗殺は蓋し一種の傳染病なり——維新の際の實例——人は間〻虛譽（ヴニテー）の爲に命を輕んず——反對の眼には正も邪と映ず——公論を顧みず、狂と呼び痴と呼ぶ人の評するに任すなど云ふ事を詩に歌に公言するは、其の實、同感を求め譽れに渴しつゝある證とも見るべし——所謂大義名分の定義明かならずして、只自己が大奸物と認めたる者を刺殺するを大義となすは最も過誤を生じ易き弊源なり。

（丙）私の制裁を苟且にも是認するは、無政府（アナーキー）を招致するの端なり——其れも下の二ヶ條の伴ふ虞れなければ或ひは是認すべきなれども——曰はく反對黨の中傷讒評——曰はく新聞紙の舞文曲筆——自己の謬見誤解——自己及び世間の黨派心。

終りに臨んで一言して置くことがある。今日迄は一門の爲とか、一黨派の爲とか、一國の爲とか言ふのが普通であつたから、まだ其の土臺が小さいから色々な議論も起つたのであるが、彼の無政府黨、虛無黨の如きは人類全體の爲と云ふ事は無論是認する譯になつて來て、終（しま）ひにはそれが流行する虞れがないとも言はれぬ。今日は唯抽象的に論じたのみであつて、星亭其人の人物に照し合しての評論、又伊庭想太郎其人の性行に照しての評論もあらうが、其れは自から別問題、之れはむしろ諸君に一任して置いた方がよからうと思ふ。又敎場ではさう云ふ個人に關した評論は却つてしな



方が
よかろうと思ふから、
之れは悉く省くことにしました。

獄舟丈より觀たる文藝

文學藝術の三作用

（明治四十一年某地方新聞の爲に）

文學、藝術の究竟目的の何たるかといふことは、今は之れを決すると難し。人生一日も缺くべからざる倫理の標準すらも、嚴密に學理上より論ずる時は、人々思ひ〳〵なりと評せざるを得ざる今日に在りては、比較的閑問題たる藝術論の如きは、到底一定不拔なるものを立し得べき望みあらず。ハルトマンらの審美論が金科玉條として、我が文壇に歡迎せられしは、僅に十數年の過去なりしを想起すれば、其の變移の急速なる、寔に驚くべからずや。然れども斯くの如きは獨り我が文藝壇の情態たるのみにはあらず、世界を擧げてほゞ同調子なりと評して可なり。國の內外を問はず、今なほ文學、藝術は專ら其れみづからの爲にのみ作らるべきものにして、國家、社會に於ける利害得失の如きは元より顧るに及ばずと主張する者もあれば、文藝家の本領は主として社會の風敎に裨補するにありと唱ふる者もあり。冷熱、深淺の差こそあれ、本能滿足の爲に個性を發揮するに外ならずと言ふもあり、自然、人生の眞相、眞趣を活寫して人をして眞智見を證ぜしむるが本領なりと唱ふるもあり。或ひはまた自らも娛み他をも娛しましむる、言はゞ一種の娛樂機關を製作する是れ文藝の眞意と說くもあり。或ひは又彼のトルストイの如く、同じく風敎裨補といふ點に着眼しながらも、

普通唱へらるゝよりも遙かに嚴格に、あくまでも眞面目に、又頗る窮屈に、あらゆる文學、藝術を純然たる宗教的機關たらしめんと主張するも無きにあらず。要するに文藝の目的に關する主張は其の人々の面の如くに千差萬別なり。予は今の時に於て文藝の目的論を一定せんと試みるが如きは甚しき徒勞なるべきを思ふ。故に爰には目的論に涉るとを避けて單に其の作用のみを論ぜんと欲す。

夫れ目的と作用とは同じからず。目的は歸着なり、作用は中途なり。例へば之れを小刀に見よ。之れを殺人に用ふると自殺に用ふると外科に用ふると紙を剪るに用ふると、各〻全く其の目的を異にす、而も其の能く切るの用は一なり。目的は人によりて移ると雖も、其の作用は常住なり。文學藝術の作用將た之れに異なるとなし。先づよく作用を解するは能く之れを利用する所以ならん。

凡そ人の其の趣味性に適合せる文學もしくは藝術に接するや、少くとも其の當座暫くは心陶然として醉へるが如きを覺ゆ。之れを刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、上手の音樂を聽き、又は面白き演劇を觀、乃至面白き小說を讀める瞬間の感じは卽ち是れなり。

或ひは未だ曾て斯の如き經驗無しといふ者も無きにあらざらん。しかるは其の生來の趣味性の極めて鈍きか然らざれば其の鑑賞上の修養の尙ほ甚だ不足なるが爲なるべし。藝術品の高尙に過ぎたる爲に趣味を感ぜしめざる場合はあり、若しくは見馴れ聞き馴れざるが爲に聯想起らず、隨つて深き味ひを解せず、それが爲に、興を覺えざる例はあれども、如何なる藝術品に對しても未だ曾て何

等の面白味を感ぜずといふが如きは人の性の自然にあらず。又畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌、小說にもせよ、其の他の藝術品にもせよ、未だ曾て如何なる種類の人間をも、婦人小兒をだに未だ曾て恍惚たらしめしとなしといふが如きものあらば、そは名のみの藝術品ならん。苟も文學もしくは藝術と稱する限りは、少くとも忘我作用程は具へざるべからざるの理なり。知識の上流に位ゐする者の賤み斥くる類ひと雖も、社會の或階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論、それ以上の效力をすらも有する例多し。彼の浪花節、薩摩琵琶のたぐひが廣く世に歡迎せらるゝの理を思ふべし。

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞する其の刹那、其の瞬間のみ心恍惚たるに止まらず、譬へば彼の碁將棋を好める者の輸贏に我れを忘るゝが如くに、其の當座幾十分時、時としては其後二三時間、長き時は其の夜一夜、甚しきは三日又四日、さながら夢みつゝあるが如く惘々然たるをいふ。「能の後三日」とは斯くの如き經驗をいへるなり。「三月肉の味ひを知らず」と言へる、將た此種心境を指せるにはあらずや。蓋し藝術の供する感興の筏に乘りて、我知らず情の海に浮び出でゝ心を別天地に遊ばしむるを言ふなり。屑々營々たる現實界を離れて一種理想的なる空なる世界にさまよふを言ふなり。かゝる心境に遊ばしむるを文學、藝術の微妙なる作用と做す。すなはち忘我作用に止まれるは其の尙ほ甚だ低級なるを證す。

併しながら藝術の眞作用は同化に至りて極まる。作用の遊神に止まれる間は、譬へば彼の安住の

地を悟得せざる者と一般、一たびは現實を離れたりと雖もいつ再び現實へ復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は夢裡の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は心暫く自我を脱して、或る飄逸なる、或ひは高遠なる、或ひは美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れども然るは其の夢の穩かなる間のみ。一たび穢き騒々しき現實界の聲に叩き起さるゝや、美しき夢裡の幻影は忽然として消え、生中の夢の美しかりしだけに、更に彌〻現實の醜惡なるを覺ゆること無きにあらず。

思ふに世人大概の經驗せる所ならんが、凡そ幼少の時代に在りては、如何なる奇怪なる夢と雖も、少くとも之れを夢見つゝある間には、夢と心附くこと稀なるを例とす。然るにおひ〳〵成長し、自意識の發達するや、日夜に心を勞することの多きため、夢もまた聞かなる能はず、隨つて其の夢見つゝある最中にだに「こは夢なり」と心附くこと次第に多し。是れ其の夢の破れ易き所以なり。恰もそれと同じき道理によりて人皆の自意識の著しく鋭敏と成り來れる廿世紀の今日に於ては、彼の忘我遊神を最上の作用と做し、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て能事了れりと做すが如き文學或ひは藝術は、最早人心を魅するに足らず、隨つて假令刹那の忘我には用立つとも長き遊神には用立たざるものゝ如し。現代人の多慾なるや、「こは夢にはあらず、現なり」、「こは虚にあらず、實なり」、「こは假にあらず、眞なり」とまで深く切に同感し得んことを欲す。藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心醉し且つ同化せんことを欲するなり。彼の偏へに技巧に

依り、空想に頼る文學、藝術の、今は昔時の如く歡迎せられざらんとするは、主として此の理にもとづくなり。

現實を有りのまゝに寫すといふ自然派の作品の近來大に持囃さるゝは、もとより他にも由來あれど、其の一面の理由は同じく一種の夢にはあれども、成るべく現實に似寄りたる夢を見せて、暫く其の夢たるとを忘れしめ、以て遊神の作用を持續せしめんの意の作家の内心に潜めるに在るならん。否、作者の心には此の意存せざることもあらん、讀者に此の底意あるや爭ふべからず。之れを惡しく解すれば、人心の次第にせゝこましくなり、世智辛くなりて、夢を夢として樂むと能はざるに因るとなるが、之れを善く解すれば、人の鑑賞力の著しく進みたると其の慾望の大きく高くなれるとの爲に、忽ちにして妄誕不稽なるを看破し得らるべきが如き作品を玩賞せざるやうになれる爲なり。それは何れにもあれ、藝術にもせよ、文學にもせよ、其の效用の尚ほ單に遊神に止まれる間は、其の果して六尺の鬚眉男子が畢生の事業と爲すに足るべしや否や頗る疑惑なき能はず。人生は短し、藝術は壽しと西諺には言へり。然れどもこは果して古今東西幾何の藝術、文學にか適用せらるべき。英雄豪傑の偉業は槿花一朝の榮にして多くの星霜を經たる後には空しく山岳と化し了す、ひとり文學者、藝術家の大作品は彼の屈平らの詩賦と共に長へに日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今東西の名篇傑作にして今尚ほ眞に人心を皷吹し得る程のものゝ果して多く世に存ぜりや、

否や。げにや長く世に玩賞せられて一時の忘我用もしくは遊神用に供せらるゝ程度のものは東西ともに決して少からぬとならんが、單にさばかりの效用とすれば、そは果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を四十年、三十年に縮めて以て刻苦經營すべき底の一大事なるべきか否か甚だ疑はしと言はざるべからず。宗教か育英か社會の改善か政治か實業かにたづさはりて、少くとも一國一代の爲に身を獻ぜんかた、或ひは一段立派なる事業にはあらざるか、一段生れ甲斐ある仕事にはあらざるか。予はかくはいへど、文學、藝術は必ずしも毎に教化を目的とせざるべからずといふにはあらず、況んや其の實用的ならんとをや。畢竟こゝには文學、藝術の目的を論ぜんと欲するに非ず、只其の作用に於て忘我遊神以上に幾段を進めて他を同化せしむる底の魔力を具へざる間は、未だ之れを以て眞の藝術的作用と做すべからざるを言ふのみ。

若し夫れ同化作用を有する藝術に接するや、人は其の刹那に於て先づ悉く自我を忘じ去る、否、只それのみにはあらず、其の當座幾何時かは全く現實を超脱して、さながら別天地に遊行し去る感あり。加之、其の感の漸く薄らぎて自我に復歸せる後と雖も、多少我が好尚もしくは性癖の一變したる如き思ひあるを例とす。譬へば催眠術によりて精神療法を行はれたる不良少年などの場合に似たる心的現象を生ず。すなはち穢かりし心も自然に美しく、荒々しかりし心も自然に優しく、めいりたりし心も引立ち、快活となり、嚴肅ともなる。一言以て評すれば、當の藝術品の内容と自家の心

とが相融會して一となるなり。狹隘なる現實界以外に若しくは以上にいつしか一の常住界、安住の別天地の成立てるを意識して何となく心に餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く體胖かなる心狀態是れなり。之れを藝術の同化作用と做す。さてかくの如くにして時を經る間に自然の勢ひとして此の心狀態を自家以外に推し及ぼさんと希ふの心を生ず。こゝに至りては逆まに現實界を擧げて件の藝術界にて經驗すると全然同意味のものとなさゞれば止まざらんとす。こゝに至りては藝術家の態度は頗る宗教家の態度に似たるものとなり、强ひて勸化門を開きても世を擧りて同一味は化せしめんと欲するに至る。

しかしながら所謂同化作用は或ひは高く或ひは卑く、何れの方面にも向ふ。善化の用をもなせば惡化の用をもなす。藝術の力は能く風を移し俗を易ふ。彼の健全ならざる藝術の風俗を壞ることあるの理も之れを推して考ふればおのづから明白なり。古の賢君明主は言ひ合せたるが如くに、樂の正雅を貴び淫哇を惡みき。音樂の人心を動すことは最も廣く且つ深ければならん。其の理は移して以てあらゆる藝術の上に適用するを得べし。

酒と藝術

（明治四十三年八月）

李白の詩に「三杯大道に通じ、一斗自然に合す」といふ句がある。醉中の消息が俗離れがして面白い。只の俗人が醉つたのでは、かうはゆくまい。もつとも、幾分かは例の白髮三千丈式でもあらうが、假りに字の通りに見ると、三杯と一斗では大部醉ひ心地がちがつたと見えるから、酒がわるかつたら、無論、また結果がちがつたらう。之れによつて考へて見ると、同じく酒ながら、飲む人の人格により、又其の量により、また其の質によつて、其の心持に於ける效果は大きに違ふものと見ねばならぬ。

現に女子供は雛祭の白酒一杯にも酩酊する。五勺飲んで由良之助もあるが、ほゞ夢心地になるまでには一升を要するものもある。或ひはいつまでも夢心地にはならんで、いつまでもタカゞ生醉で、それで絶えず口小言や七むづかしい理窟を弁べて、如何にも不愉快らしく、不平らしく、而も尙ほ其の間に一種の快樂を覺えてゐるのもある。所謂ねぢ上戸のたぐひ。かと思へば、或ひは、酒はほろ醉に限るといふ。或ひは、醉ふと必ず前後を忘却する。或ひは、醉ふとむしやうに物ごとが悲しくなり、世の中の暗黑方面ばかりが目に着くと見えて、怨む、泣く、愚癡のありたけを竝べる。その反對

に譯もなく嬉しくなるか、喪式の場所でも何でもかまはず馬鹿笑ひをする機嫌上戸もある。或ひはブランデーか燒酎でなくては飲んだ氣がせぬといふ中毒上戸もある。これは病的なのであらう。或ひはビールの小壜で浮かれる。或ひは手づくりの村醪（ぶどうろく）で陶然としてしまふ。之れを赤切符式有限極樂往生と名づけてもよい。それから又飲み癖からいふと、これもいろ〳〵で、日本在來の氣短かな、手輕な、燒するめに茹玉子式の、瓢簞で猪口のぐい飲みといふのもある。それに對して食前方丈の支那宴會、バリー式の暢飲（オルジー）。三合入の大コップで半時間もかゝつて氣長くチビリ〳〵飲む獨逸傳來の念入上戸もある。その同じ血統で、更に一段功勞を經た楷子上戸といふのもある。前夜の印象が翌朝までも殘つて頭痛岑々たらしむる二日醉といふ現象もある。到底酒に關する特徴や變態は中々以てこんなとでは盡きんが、こゝでは比喩に借りるまでだから此の以上には必要がない。

文學藝術は酒に似てゐると思ふ。東西とも昔から偉い詩人や藝術家に大酒家があるのは存外深い意味のあるとではなからうかと思ふ。エマルソンなぞは、酒や阿片は膿ひの神（インスピレーション）興を呼ぶ小道具だと卑しめたが、必ずしもさうではないかも知れぬ。「三杯通ゝ大道、一斗合ゝ自然」――文學藝術の極致がこゝに盡きたとは勿論言はんが、大概の文藝家がそれより以上に浮び出ないことは事實である。それはともあれ、酒を褒めて「愁を掃ふ玉箒」といふが、文學藝術も、或少數のすゝぬ者を除いて見れば、大多數の人間に取つては主として慰鬱排悶の具、消閑の料、憂世（うきよ）の憂さを暫し忘れさせる道

具たるに外ならぬのである。名畫の前に立つて見惚れる刹那、詩歌なり小說なりを反覆玩味する瞬間、上手の奏する音樂に聽入り、名人の演藝に見入る當座は、心が暫く現（うつ）を離れて陶然として醉つたやうな氣になる。酒を飲めば心が春めいて、借金取りも鶯の聲と狂歌師が詠んだのと似た境涯、これが藝術の普通の人心に及ぼす效果であると思ふ。

勿論、前にいつた通り、酒が人を醉はしめる程度及び醉はしめた上の效果が一樣でない如く、或藝術はほんの其の當座、只一時、人を慰藉し娛樂せしめるに止まるが、他はそれに止まらない。時としては、或智能、或趣味性の人々に對しては、一種宗教的な作用をもして、酒の李太白に於けるが如く、其の半（なかば）にしては大道に通ぜしめ、其の三味に入るに及んでは悠然として自然に合せしめるといふ如き效果を生ずる。尙ほ可能性（ポッシビリチー）の上からいへば、更にそれ以上の働きをもなしかねないと言へる。トルストイなどは是非さうなくては藝術でない、普通もてはやされる文學、藝術、とりわけ近頃行はるゝのなどは大概皆墮落した藝術だといふ。或ひは又それよりは遙か卑近な意味に於て、譬へば彼の藥用葡萄酒や其の他の藥酒の如く、何か當面の病患を幾らか療治するといふ實用をも兼ねて又は兼ねようと企てるのもある。彼の勸善懲惡を標榜した馬琴一流の小說や『月世界旅行』などのやうに科學的新知識を寓し、又は近時の或小說のやうに心理的眞相を寫し以て一面に啓蒙的效果を擧げんと企てる作や、或ひは又彼の社會主義的小說のやうに社會革命の新福音と著者が信ずる又

は空想する所のものを具象的にして世に弘布せんとする作などがそれである。或ひは又それとは反對に、誰れがどう辯護しても、大體の傾向上から見て、誨淫導慾の媒介としか思はれぬ文藝品もある。酒は飲んでも飲まいでも勸める所はきつと勸める、と立派に主張の出來る人もあれど、薄志弱行の或男女に取つては、酒さへ飲まねばといふことが多い。さういふ男女の青年に取つては一種危險な催眠的作用をする文學藝術が無いでもない。

とはいへ其の效果の善惡は畢竟其の藝術品の高卑にもよるし、其の規模の大小にもよるし、鑑賞程度の深淺にもよるし、其の藝術品を享樂する人其の人の人格にもよるのだから、一概には言はれない。が、ともかくも如何さまにか人を醉はせるといふことが文藝の本領——といつて不適當であるならば——其の必然の效果だと言つてよい。曾て誰れをも醉はせぬといふ藝術があつたら、それは未成品か然らざればもう壽命が盡きて枯槁してしまつたので、酒に比すれば腐敗したか、氣が拔けたか、何れかである。

場合によつては、只其の繪に見入り、其の曲に聽入つてゐるほんの刹那だけ恍惚となるに止まることもある。これを假りに刹那の忘我と名づける。或ひはまた其の當座數時間心が恍(ほう)となつて、よい心持になつて、何となく別天地に逍遙するやうな、物見遊山にでもいつたやうな感じになることがある。これを假りに遊神と名づける。少年青年が氣に入つた小說に讀み耽つてゐる際には、往々にして食事を忘れ、夜の深けたのを忘れて、篇中の人物と同化して全くの空想世界に遊ぶ。或ひは能に心醉した者に取つては、所謂「能の後三日」は、心が恍然となつて能舞臺に往きつ戻りつしてゐるでもあらう。「韶を聽いて三月肉の味を知らず」といはれた時分には、孔子も大分其の氣味があつたらうかと思ふ。芝居好の少女等の耳には「先づ今日は是れぎり」とシャギリの音で打出して、劇場の木戸を出ても、町中を往來する人や車の音や聲や足音が鳴物や白(セリフ)に聞え、家へ歸つても、祖母や父母の言ふこと、飼犬の鳴く聲さへも、尙ほ耳に殘る鳴物や白と混淆(こんがら)かつて聞える。此のうつらうつらとした心持、暫く現在を離れて夢の世界にさまよつてゐるやうな心持、これが藝術享樂の際の感じである。

人の好惡は其の顏附の通りに違ふ。泰平無事な、單調子な享保や天明の頃でも武家は武家、町家は町家、上中下、男女、老幼と分れて其の嗜好に著しい懸隔があつたとすれば、維新以來時勢の驚くべき激變によつて、精神界に於ける空前の大推移が僅々二三十年間に成し遂げられ、それがために思想も感情も信仰も主張も前後少くも百年がたに亙つた奴が同時同處に幷び存じて混雜紛糾を極めてゐる今日の我が社會には、どれほど異つた嗜好が成立つてゐるやら想像がつかない。精しくいふと、これは日本ばかりのことではない、西洋だつて全く同じだが、話が混雜するから、態と日本だけに就いて言ふが、先づ繪畫にも音樂にも文學にも新と舊の大區別のあるのは勿論の事、同じく

舊といふうちに中古派もあれば近世派もある。其の近世派にも派分がある。同じく新派といふ中にも西洋本位がある、日本々位がある。西洋本位のうちにも又それ〴〵の派分があつて、いやもう目まぐるしい。隨つて今の所謂文學、藝術の中で、一方では尙ほ怖しく持囃してゐるにも拘らず、一方からは、もはや新代の需要や好尙に適當しないといふ所から、あゝいふのは眞の文學でない、少くとも活きた藝術でないと貶されてゐるのもある。例へば、能や歌舞伎や漢詩や雅文や雅俗折衷體の文章や土佐、狩野の繪畫乃至其の他の日本畫の如き、少くとも數百年間の烹錬と彫琢を經て次第に發達し、法格も整ひ、錆も附き、歴史的聯想も加はり、圓滿爛熟の境に達した藝術品ばかりを眞の藝術と珍重する側からいふと、明治以後に出來た物は何もかも氣に入らない。新派の演劇、新體詩、口語體の新文章――小說だけは我慢するとしても、論文としては、――繪も今の折衷式油繪贋ひの生々しいものなど、皆見るに足らぬといふ。そのまた反對の、一に時勢に劃切な、何でもよいから舊時代離れのした新しいものをと、ひたもの斬新といふとを覗つてゐる方面からいふと、能や歌舞伎は全然たる舊時代の遺物で、乾からびたもので、骨董的價の値があるばかり、繪とても然う、土佐や狩野は模樣として見るより外はない、明治時代の人間とは風馬牛で、とりわけ若い者の血肉とは殆ど全く沒交渉だといふ。

時勢が時勢だから、かうなつたのに何の不思議もなく、雙方の言ひ分に眞理がある。人の好尙は

面の如くちがふ、あらゆる藝術があらゆる人を娛ます譯にはゆかぬ。或文學、或藝術は或種類の人人とは脊中合せで、あたまから其の心を惹く力がない、心を惹かぬ位ゐだから、見せたとて、聽かせたとて興を催さしめよう筈がない。江戸式俗曲や武家的能樂が現代の、殊に地方出の青年に向かないなぞが其の一例である。それから推して見れば、浪花節や源氏節や薩摩琵琶や筑前琵琶のたぐひが俗曲や歌舞伎を喜ぶ側の人々に喜ばれさうにないといふとも知れたことである。中には、あゝでもない、かうでもないといふ批評や講釋が七むづかしくなつた現下のことゝて、我れは未だ曾て忘我遊神なぞいふことを經驗したことはない、今日の自覺した、神經の昂進した人間には迚もそんな暢氣なことは出來ぬ、忘我遊神なぞは過去の藝術――空想專一の藝術――に對してのみ持出すべき要求だなぞと言ふ者もある。此の手合は娛樂とか興味とかいふ言葉を酷く嫌ひ、文學、藝術は單に娛樂のみを目的とすべきものではない、アケラカンと口を開いて緣日の見世物に見惚れる女子供の振舞は我々が眉とせざる所、我々はもはや全然夢に遊ぶといふやうな心持にはなれない、そんな三文菓子で泣き止む鼻垂し小僧ではない――小說を讀んでも音樂を聞いても我々は人生を忘るゝとは出來ない、いや、人生と相涉らざるやうな文藝は我々に何等の感興をも起さしめない――要するに我々は二六時中働いてゐても遊んでゐても我れを忘るゝといふことが出來ないのみか決して此の生を忘るゝことが出來ぬ――又何とかゝとか自他を批評してゐねば氣が澄まぬ、時々は因果なこと

だとも思ふが仕方がない、批判的態度を脱してしまふ譯にはゆかぬ——併しまた其の穿細な、苛辣な批判や分析や解剖のうちに、そこに一種言ひしれぬ面白味を經驗するともあるので、それで尙ほやめられぬのである——て、主として人間の事相を寫して此生其物の批判剖析に力める小說や演劇などに對しては、そこに我が生の不如意と不安と不平と悲哀と淋しさと覺束なさとの影を認めて我知らず涙が催され、時としては心がとろけるやうにもなり、或ひは腹立しくもなり、或ひは苦々しくも感じながら、尙ほさすがに言ひしれぬ淋しみに、彼の秋晩の光景に對して心の我知らず沈靜に歸すると同樣な感興を覺えるのである、此の趣きを感ぜしめざる藝術は我れは藝術とは名づけぬとは言はぬが、一段劣れる若しくは半ば過去れる藝術と評せざるを得ないといふ。

かういふ說が近來最も勢力を得て來たにも拘らず、忘我遊神は依然として藝術の特徵であると思ふ。つまり文學や藝術の其の鑑賞者に於ける效果は、酒の其の飲用者に於けると同じで、品質にもよるし、規模にもよるし、鑑賞の程度にもよるし、鑑識する者の見識にも修養にも氣質にもよるので、到底すべてを一樣に律し去るとは出來んが、とにかく多少夢を見てゐるやうな心持にさせる所に其の特質をもつてゐるとは爭はれない。もつとも子供はお伽話の畫を見ても忘我の境に入り、野蠻や無智蒙昧の田舍人なぞは二十五座式の舞踊を見ても遊神する。これらは酒で言へば酒量が弱いのに當り、酒に對する味覺の粗いのに當る。しかしながら匹夫も志を奪ふべからず、蓼喰ふ蟲も好

好、めい〳〵の嗜好に關ることは他人の容喙をゆるさぬ、彼れ是れ干涉せらるべきてない。貴樣の趣味は低いとか劣等だとか言はれたとて、見得名聞で面白くないものを面白く感じやうもなく、面白がらねば罰するぞと强迫されたからとて、こればかりは如何もならぬ。

おれは忘我遊神なぞは決してせぬと言ふ手合とても、その間に何等か心の慰めとなる所があればからこそ文藝にたづさはるのであらう。文藝が現在の苦惱を募らせるものなら喜び親しまう筈がない。心が沈靜に歸するといふのは慰められるので、慰められるといふがそれが卽ち忘我なのだ。一種言ひ知れぬ感じを經驗するといふのが取りも直さず遊神で、すなはち別天地に逍遙する境涯なのである。前に擧げたねぢ上戸や泣上戸の例を思ひ合はせて見たなら、此の間の消息は解るてあらうと思ふ。

人生道樂

厭でも應でも生きてゐねばならぬ必要上から食つたり飲んだりするのは萬人皆一樣だが、少し立入つて査べて見ると、態度に少くとも三樣の區別がある。只もう生きてゐたいの一點張で飲食するのもある。所謂飢ゑたる者は食を擇ばずて、何でも關はず肚が充くなればよいといふ氣で食ふ。味ひなぞは全然かまはぬ、解りもしない。衞生上の利害も滋養分の有無なぞも問ふ遑もなければ問はうともしない。これを農夫式といつてよい。極低い意味で實用的なのてある。

次ぎに一層進んだ意味で實用的に飲食する連中がある。先づ滋養分の多少といふ事を考へる、消化の難易といふ事をも考へる、又時としては經濟上の損德といふ事をも考へる、それから美味不味といふ事をも考へる。中には此の四拍子が揃はねば快よく飲食せぬといふ程の神經家もあるが、大抵は此の中の二拍子だけ揃ふを程度とし、飲食する。此の連中は只生きるために飲食するのては無く、健康に壯强に安易に愉快に有爲に生きてゐようと願つて飲食するので、第一種の飲食家に比べると立派に有目的の飲みかた食ひかたをするのである。隨つて一段高い意味で謂ふ實用的であるのだが、又考へると是れは平々凡々の飲食家であるとも言へる。

更に一種の飲食家がある。それは美味を味ふことを主として飲食するのである。俗に謂ふ食道樂。言はゞ貴族肌だ。此手合も初手には滋養とか消化とか損德とかいふ事を念頭に置かないでもなかつたのだが、何分にも味慾が熾んなので、いつの間にか只もう味といふ一點にのみ心作用が集中し、彌が上に舌に快いものをと望むところから、一へに珍味を漁り、果は美味といふ事以外の條件は殆んど全く眼中になくなつて了ふ。さてかうなると妙なもので、尋常一樣の飲食物は如何にも味が淡白過ぎて旨くない。第一、其の千篇一律の獻立が舌に馴れて妙でない。それに世の文明が進むと神經を勞するとが激烈なので腦が怖ろしく疲れる。で苦痛には未開人の十倍も感じ易くて、薔薇のトゲで突いた程の刺戟にも折々は躍り上つて騷ぐが、快感の方は上の上をと望んで止まぬ時代精神の作用で、すぐに饜いて慣れつこになつて、何か今一段激烈なものをと始終新しさを求めて止まない。丁度彼の肉體の勞働を甚しくするものが鹽からいものを欲したり油濃いものを欲したりすると同じ理合で、おひ〳〵味覺に變調を呈しはじめる。唐墨や雲丹や海鼠腸式の珍味では滿足が出來なくなる。鼻をも舌をも吃驚させるやうなのでなくては嬉しくない。で香りの高いもの、刺戟の鋭いものをと選好んで食ふ。果は清國人のやうに唐辛子の照燒をボリ〳〵とやりかねない。おひ〳〵工夫が盡きるとイカモノ食ひをもはじめる、それが爲に腸胃を害ふ、腦を惡くする、命を縮める。それを顧る遑がない。これらは味のために飲食するのである。味に耽溺して一生を送るのである。

文明が進むとおひ〳〵斯ういふのが殖える。すると又此の方面の專門家といふべき者が出來る。これは單に飲食に耽溺するのでは無い、多くは耽溺せぬ程度に此の道樂の仲間入をして、專ら飲食の特質や由來や製造法や原理やなどの取調べに從事してその結果を發表する。これは俗に料理通といふもので、割烹の理論家兼指導者である。之れに似て異なるのが料理人すなはちコック、俗に謂ふ厨夫である。前のが美味の批評家なら此れは美味の創作家である。前者は、凡そ美味い物には如何ばかりの種類があるとか、美味は如何して製せらるゝかとか、何處の品が一番旨いかとか、或ひはまた抑〻旨いとは何の謂ぞやとか、旨くさへあれば毒でもかまはぬとか、深い旨い味ひを知るが眞に生活する所以なりとか、種々の複雜つた理窟を研究して餘蘊無きに至らんことを期してゐる。彼等は聲を揃へて、飲食物の味不味も知らんで、又は十分に味はゝんで、一生を過して了ふ者をリヤルライフを知らぬ夢死者であると云つて憫然がる。料理人は概して旨い物を製するのが役目であるから、お互ひに競爭し、二六時中、三百六十餘日、如何にせば世間多數の食道樂の顧客を滿足せしむべきかを考へてゐぬとは無い。美味よりも眞味をと覘ふものもあるが、競爭が激しくなると珍味が主になる。日本料理で工夫が盡きると佛蘭西、土耳古、支那、亞米利加、何でもかまはぬ。凡そ物質的文明で鳴る限りの國々を漁つて料理の獻立に新案を凝らし、まッこと行詰ると逆戻りに室町、鎌倉、平安、奈良などゝ、水つぽいやうなのまで持出してくる。さうすると衞生上の利害などは思

はぬこともある。また果して毒か藥かは、頭で食馴けない代物であつて見れば、平凡な衞生學者などには解るものでない。

よしんば又多少有毒であらうとも、そこは文明の世の進んだ料理法で何とか毒消しの法をも講じておく。一方にはこりや食はれぬと目口鼻を一つにして苦い顔をする古い舌もあれば、一方には只もう珍らしがり、尙ほ其の上の珍味ねだりをするのもある。で、勢ひ香味、辛味の度を加へる、アルコール分が增す、醉ふ、逆上る、神經が間斷なく興奮する、嗜好が病的にもなる。さうなると忠告を試みても、命と取換へにしても遺憾はないといふ。

人生も美味と同じやうに扱ふことが出來る。全く人生を賞翫するばかりなのを人生道樂とも或ひは人間を對境にするデレッタントとも呼ぶ。又人生の味ひを批判し解釋し唱說することも出來る。又人生の眞味や奇味や異味や變味を調理して他人に味はせることも出來る。如何な農夫も此等自家の一臠を割いて珍羞を供しくるゝ厨夫に對しては深厚なる感謝の意を表せざるを得ない。但し單に其の道樂の對境となつて、自身が割烹の材料となつた場合は何と感じたものか？　彼の山海の珍味共は食道樂家の材料となつて味つて貰つてやがて排泄物となるを餘榮ありと思ふかも知れんが、吾々生身は何と思つて當然であらうか、それはまだ未定の問題である。モデル問題なども此の疑問から派生する。

今の小說を讀む若き人々のために

（大阪公會堂にて公衆の爲にせし演說の筆記を修訂して四十一年一月の『趣味』に揭載せるもの）

野蠻未開の時代は何事も不自由でありました代りに、總てが手輕で單純であつたらうと思ひます。例へば、船と云ひ車と云つても、其の種類が一つか二つ位ゐで、隨つて其の效用を取違へて居たとしても大した差支はなかつた。然るに世が進むにつれて、船と云つても、名前は一つでも其の種類は千差萬別で、渡し船やレースボートの樣なのから始めて、水雷艇だの、薩摩艦だの、ミネソタ號の樣なのもある。で之れを取違へて屠て、若し用ひようとしたならば大變な不都合を生ずるとであらう。車とても然う。丁稚小僧が推して行くやうな荷車から、電車、自轉車、寢臺附の汽車さへもある世の中。野蠻時代の人間の思ひも及ばなかつた大變化を來して居る。尙ほ藥劑に至つては一段と甚だしい。昔でさへ四百四病に適する藥があつたが、今日はペスト、虎列拉などゝ云ふ舶來の病が這入つて來たのであるから、之れに應ずる藥は詳しく數へたら、幾千萬種あるか定めし夥しいとであらう。されば若し之れを取違へて、例へばモルヒネとペプシネ、鎭經劑と興奮劑とを取違へて用ひては大變だが、幸ひにして學問も進み、公衆の衞生知識も進んで居るから、大概の人は其の樣な間違はしない。加ふるにお醫者と云ふ重寶なものがあるから、病氣になつた時分には、お醫者の

處へさへ行けば、一寸手を握り舌を見た許りで直ぐ調劑をしてくれる。それも度重なればお醫者の處へゆくだけの必要もない。一寸細君に、いつものの持病が起つたからいつもの藥を持つて來てくれと云へばよい。いや、それさへも終には只苦い顔をして見せれば氣の利いた細君は直ぐ藥を持つて來てくれる。で、あんまり便利過ぎて、うつかり苦い顔をすると、いつ何を飲まされるか知れたものでない。

と云つたやうな風に、文明が進んで、洵に何事も便利に、複雜に、自由自在になつた時に當つて、爰に一つ例外と思はれるは、文學、藝術に關するとで――いや、文學、藝術と申したが、今は藝術の話は省いて、又文學としても專ら小說だけに就いて申さうが――此の文明の大勢に連れて小說の作り方も同じく著しく進んで來た。西洋に於ては十九世紀以來、日本に於てはツイ此の十五六年このかた、名は同じく小說と云つても、內容と效用、卽ち人心に及ぼす感化影響は夥しい違ひとなつて來た。で昔の小說と今の小說との違つて居るのは、恰も昔の玩具と今の玩具とが違つてゐる程の度合で、昔のが豆鐵砲なら今の小說は空氣銃、イヤそこ所では無い、玉込をした拳銃にも比すべきものである。が、こゝの理合を諸君はよう心得て居られるかどうか？　或ひは諸君が此の理合を十分には心得ずに平生子供たちにも使はせ、自身にも使つて居られはせぬかと少々心配になつて來たので、そこで今日は聊か其の邊のお話をしようと思ふのである。

小說と云へば奢侈品で、言はゞ嗜好品で、十人が十人まで用ふる必要品では無いと諸君は思はれて、必要品で無い以上は、何も其の使用法を心得ずとものことだと云はれるかも知れんが、併し今日諸君が日常目を通さずには居られない新聞紙と云ふものは必要品であるが、それに小說の一つか二つ必ず載つて居らぬのは殆どない。諸君自らは讀まずとも、諸君の細君、子供達、家人が讀んで居られる。すれば小說の利弊は向う河岸の火事ではない。さてそれらの人々が正當な讀み方をして居るかどうか？　ペプシネとモルヒネを間違へては居らぬか？　或ひは鎭經劑と興奮劑とを取違へては居らぬか？　其の邊の注意が行屆いてゐれば善し、ゐなかつたならば文明國の國民としては甚だ以て迂濶な心得方であると云はねばならぬ。諸君の身の上に間接に直接に小少ならぬ利害關係のあることであるから、ふと見ると一の閑問題のやうであるが、其の實存外さうでないから、私の申すことをよう聞いて貰ひたい。しかし之れを小說に緣故の無い方に合點のゆくやうに說かうとすると、是非とも在來の小說の性質から說き明さねばならぬが、どうも時間が足らぬ。そこで極く手短に譬喩を以て語ることゝする。

先づ在來の小說、文化文政度式の小說は茶受に似て居てゐたものである。菓子や茶煙草と云ふところ。あア退屈でならんが、何か氣を紛らすやうなものはないかと、一寸一口羊羹と云ふ鹽梅に、ほんの慰藉消閑の爲に之れを讀んで、只一時我れを忘れる。胸のムシャクシャを忘れる。姑婆樣の小

言がうるさいと思へば、草艸紙を讀んで其の間五分か十分我れを忘れる。『田舍源氏』などはその役に立つたもの。或ひは中には少しく藥劑を含んで居る淺田飴やスコット乳菓やうの小說もあつた。此れは我れを忘れる以上の效用があらせたいとて藥を入れて見たので、一舉兩得を覘つたもの。其の代りあんまりおいしくはない。今日の續き物などには右に述べたうちの前者に屬するやうなものが先づ多い。或ひは又口當りのよい酒に類するものもある。讀んでるうちに氣が妙に浮れて、どうかするとダラシなくなつて怪しからん心持も起る。洒落本、人情本などに往々其のやうなのがあつた。併しこれらは何れもほんの一時の忘我用のもので、利も元より乏しい代りに、弊とてもまた知れたものであつた。これらを慰藉消閑用または忘我用の小說と名づける。

然るに小說も一歩を進めたものになると、一段複雜な働きをするとになる。一寸物見遊山或ひは溫泉行き、或ひは海水浴といふやうな效用を持つてゐる小說もある。たゞ十分二十分間我れを忘れるにとゞまらない。其の小說を讀んでゐる間に、いつか心が現在を離れて空想世界に遊ぶ。極端な場合には羽化して登仙するやうな思ひがする。假りに名づけて遊神用の小說といふ。心を暫く別天地に遊ばしむる力を具へて居るのである。夢の世界、理想の世界に遊ばせるのである。さて同じく別天地、夢の世界に遊ばしめても、夢が覺めては元の木阿彌、狐につまゝれたやうな心持ばかり殘る場合もあれば、どうかすると其の枕元に何等かの有實な土產物が殘つてゐるともある。卽ち讀了

して一種の敎訓を得ると云ふやうな小說もあつた。或ひは此れと云ふ訓戒又は實益を得ることは無いが、とにかく精神が爽快になると云ふ場合もある。譬へば溫泉に行つて宿痾がなほり精神が爽かになつて歸るやうなもの、これらを伊香保行き小說、有馬行き小說と名づける。勸善懲惡を表招牌にした馬琴の『八犬傳』の如きは、昔は幾分か此の溫泉行きの效能を持つて居たもの、私共の幼少の時分には犬塚信乃、犬山道節、犬江親兵衞などが多少感化力を有して居たものであつた。尤も馬琴のは少々度が過ぎてゐたので、藥臭くもあつた。さういふのは馬琴のに限らず、すべて草津溫泉式と名づける。

此等遊神用の小說中で、最も宜しきに適つたものは海水浴式の小說である。と云ふのは其の小說を讀むと云ふと、何となく大世界に出たやうで、體も胖かに、心も廣くなつて、白沙青松の間を漫歩して歸つて來た時の心持のやうに、心が爽かになり、快活になり、元氣が加はり、時としては知識も增し、思想も高尙になつたやうな感じがする。『三國志』やスコットの作などに多少さう云ふ效用があつたものだが、今は時代が變り、時勢が移つたからさうでもないが、昔はとにかくさう云ふやうな效能があつたのである。小說では無いがシェークスピヤの作などが、正に此の效用に富んで居るのである。

之れを要するに、昔の小說は、我れを忘れしめるを本領として、更に進んでは暫く別天地に遊ば

しめ、空想の世界、理想の世界、夢の世界へ暫く人心を誘ひ去ると云ふ效用を持つて居たものである。卽ち現在の我れを離れて、美しい、珍らしい、少くとも現實界とは違つた世界を見せて現在の苦悶や面倒やあぢきなさを忘れさせるを先づは眼目としてゐた氣味であつた。言はゞ娯樂用である。敎訓を交へたのもあつたが、主眼とするところは忘我遊神、現實を離れる所に其の本領があつたのである。而して此の種の小說は今日と雖も決して需要を減じたのではない。

蓋し今日のやうな生存競爭が激烈になり、自意識の鋭くなつて來た時代に於ては、種々の精神上の苦痛や煩悶が多いから、姑く我れを忘れて心を餘所に遊ばせることが必要である。諸君も處世の經驗がある以上は、多少この感があらうと思ふが、まづ三十歲以上で世路の辛酸を嘗めて居らる人々は、折々は競爭に疲れ自意識に疲れて、暫く我れを忘れ、現在を離れたいと思はるゝことがあらう。とかく今の人は大抵皆饜くことを知らぬ望蜀の慾を持つて居るので、財產の有無、名譽の有無に拘らず、現在の姿には滿足せずして、あるが上にも得たい、儲けたいと心を苦め、頭を使つて、一日も心の休まる時が無いと云ふ氣味である。で、時には芝居を見るなり、音樂を聞くなり、何か心を別天地に遊ばしめて保養し、休養することを必要と感ぜざるを得ない。心を遊ばせて休んで居ると、疲勞した精神が恢復せられ、そこに新しい元氣が加はつて來て、更に活動の勇氣を生ずるのだが、現實の社會ばかり見て居ると、不快なこと、あぢきないこと、淺ましいことのみが多くて、果

は厭世の念までも起る。が、何か別に心を遊ばせるとが出來ると、それが爲に心が慰む。心が何となく廣くなつて、ユトリが出來る。此の意味で所謂遊神用の小說が必要な働きをするのである。場合によつてはドロップ一つ口に入れても、一寸心が慰むとがあるやうなもの。然るに其の小說が西洋では十九世紀以來、我が國では僅かに此の十五六年このかたの間に、大きに內容を改めて來た。今の小說は忘我遊神と云ふことを第一の目的とするよりは、寧ろ他の特別な目的を持つて居る。かりに之れを見我用と名づける。「我れを見る」と云ふことを目的に小說を作ると云ふ傾向を釀し成して來た。これは中々複雜な問題だが、何か比喩を用ひて出來るだけ簡略に說いて見ませう。

今までの小說は、現在の我れを暫く忘れ、此の現實の世界を暫く離れて、先づは實際にはない空想の世界、理想の別天地へ我が心を遊ばしめると云ふことを主にして書いたもので『三國志』や『八犬傳』が證明する如く、出て來る人物の大概は男でも、女でも、其の主なる人物である限りは、先づは實際には無い、現實以上の人間で、惡人にしても餘程人工の加はつた空想七八分の惡人が出て居る。卽ち現實の世界ではなくて、半分以上夢の世界で、有りのまゝを寫すよりか心に快かりさうな部分だけを寫したと云ふ風、暫く現實を離れ、現實よりも立派なものを見るのを樂みとして居た風である。作者も然う、讀者も然うであつた。然るに十九世紀以來の小說は、現實の我れを忘れ、現實の世界を忘れると云ふよりも、寧ろ現實の我れの眞實の顏や姿を有りの儘に見たいといふこと

に重きを置くことになつた。畢竟は餘りに我れを忘れることにばかり着眼が傾いた反動である。今までの小説に寫されたのをば眞に人間の實相、自分の面影であるとばかり思つて居たのが、考へて見れば騙されて居たのであつた。あれは皆北齋や豐國が筆の先きで拵へたもので、おれの顔は彼樣顔ではないのだと、斯う氣がつきはじめて見れば、何だか今までの小説は馬鹿々々しくて讀まれなくなる。さすれば一體おれはどんな顔をして居るのか、其の顔を見たいものと思ふのは人情。此れが十九世紀以來の文壇の一大傾向であるのである。

それ、彼の「お國歌舞伎」といふ芝居に、累と云ふ醜婦がありませう。累の姉に某と云ふ傾城があつて、それが與右衛門と云ふ男に殺された。然るに累は其の姉の仇であるにも拘らず、其の與右衛門と相愛して遂に夫婦になつたので、姉の怨靈が怨み怒り、其の儘に連れ添ふならば、決して許しては置かぬ。姉の怨みでどんなことになるか知れぬぞ、今のうちに縁を斷てと、累に怨靈が賴んでも戀に心を奪はれた累は遂に與右衛門の妻になつた。それで亡靈が怨んで、祟をなして、累は忽ち其の半面だけは二目とは見られない醜婦となつた。玆に至つて與右衛門は深く之れは憫み、此れは本人に其の醜い顔を知らせないに如くとは無いと思つて、將來鏡を見るとはならぬぞ、若し鏡を見たならば離緣するぞと云ひ付けると、無邪氣な貞順な累は夫の吩咐を堅く守つて、假初にも鏡を見ないから、自分は元の通りに美人であるとばかり思つて居た。所が、或るお節介な第三者があつて、

仔細あつて、累に鏡を見せた。累は初めの間は他人の面が映つたとばかり思つて殆ど自分とは思はない。併し怖いもの見たし、穢いもの見たしが人情の常で、やがてジッと鏡を見つめると、映じ來る所醜ならざるはない。尙ほ半面は美人なれども、それはもう目には入らぬ。只もう醜な半面ばかりが目に見えて來る。

さ、此の瞬間の情態が丁度今の小説の情態に似て居る。今日の小説は在來の小説の行き方と違つて主として下劣な醜な方面を寫して居る氣味である。今までの小説は忘我遊神の爲を〳〵と覘つた所からして、自然半面の醜なる方面は度外視し、とかく其の方は寫し落してあつたから、そこで今其の反動が起りはじめたのである。今の小説は現實又は現實以下又は以内を寫すことを主とする。卽ち凡劣な人間、不品行な人間、醜惡な穢らしい人間、病的な人間、氣違めいて居るやうな人間が多く材料としてある。卽ち我々の目の前に幾らもぶら下つてゐるやうな平々凡々、家常茶飯的、乃至はそれよりも下劣なやうな材料のみを搔き集めて來て、物にして居るやうにも見える。是れ一は、只今も申した通り、在來の小説が餘り美しい方面ばかりを主として、剩へ强ひて教訓までも注ぎ込まうとして不自然に流れ、虛僞に流れ、小説と云へば、窮屈な道德や習慣の束縛を受けて書くものと云ふやうになつたから、其の反動で、もつと自然な、有りの儘な、紅白粉を着けない生地其の儘の人間を寫して見たいと云ふ傾向を釀したのが根本の理由であるが、尙ほ第二の一段大いなる

理由は十九世紀以來の時代精神の然らしむる所である。此の時代精神は西洋ばかりではない、日本も支那も朝鮮も引くるめて感化しつゝある精神で、此れをサイエンチフイック・スピリットと云ふ。卽ち事物の眞を求める科學的精神、此の精神から、今迄の小說のやうな只一時のみ陶然たらしめて、ほんの一寸心を樂しましめる、ほんの一寸心を餘所に遊ばしめると云ふやうなことでは滿足しない。小說をして人間の眞相を寫すの道具たらしめたいと望む。思へらく、決して小說は他の學問や藝術や或ひは政治や宗敎等の下に居るべき筈のものでない。彼等とおなじく人間生死の問題に觸れて、眞面目な眞劍な働きをすべき筈のものである。宇宙の間にはサイエンスの力でも哲學の力でも敎へ示すことの出來ない事相がある。それを文學、藝術の力のみが獨りよく敎へ示すことを得る。科學は解剖分析して物を殺して了ふが、それを分析しないで殺さないで、溫いまゝ、生きたまゝ其のまで見せるのは文學、藝術の力であるべきだ。特に人間の心の作用に關しても、彼の心理學などはホンの名目調べのやうなもので、解剖分析して死に果てた心作用だけを敎へ示すにとゞまる。それを活して血肉を附して見せるのは小說で、これのみが人間の眞相をともかくも見せ得るのである。あゝ自分の眞相が知りたい。今まで知つたと思つて居たのは、實は、紅白粉を塗つた贋物であつた、と云ふ自意識が鋭くなつて、常に人生問題に煩悶して居る世の中となつては、人間の眞相を知らしむると云ふことを標榜する小說が、最も歡迎せらるべき道理である。で眞相を知らしむると云ふこ

とに努めるところから、今の所謂寫實小說及び自然主義の小說が盛えることになつた。

さて又第三には、十八世紀以來、西洋でも日本でも人間の慾心が何事につけても限りを知らなくなつて來た。それと云ふは四民平等で、自分の力量なり資力なりが具はりさへすれば、何事も出來さうな、又出來得べき時代であるから、人の慾に限りがない。何事も或る程度で止めると云ふことを好まない。娛樂でも飲食物の贅澤でも上の上を好む。だん〳〵度が加はつて來る。今までは一寸舌に甘い位ゐで滿足して居たのが、腸に浸入るほど旨くなくては承知しなくなる。七味唐がらしでは不滿足で、果は唐辛子を附燒にしてかぢると云ふ勢ひ。裸體畫の變遷を見ても分る。今は眞の赤裸々でなければ氣に入らない。果は骨ばかり描くやうになるだらう。そこで人生のことを寫すも同じ道理、單に上面だけでは滿足しない。穿ちに穿つたものを得たい。穢い物なら穢い物のドン底まで調べて見たい。薄ッぺらや生ぬるでは齒がゆい。滓澁までも啜り盡したい。子供でさへ今日では昔のやうに豆鐵砲では滿足しないで、空氣銃をねだるといふ傾向になつて來た。これが穿ちに穿つた小說が行はるゝやうになつた第三の理由であると思ふ。

尙ほもう一つ別の理由がある。それは人間と云ふものは妙なもので、とかく同感者を得ることを喜ぶ。いや、同感者を得ることを喜ぶは自然の性の然らしむるところで何も不思議はないが、さて他人の喜びに同感することが多いか、人の苦しみに同感することが多いかといふに、どうも人間は人の喜

びに同感するより苦みに同感することが多い。人の難義を見ては何となく引寄せられるやうに感ずるが、あかの他人の喜んで浮れてゐるのを見ると、どうかすると癪に障つて冷眼に見るといふ傾きがあるらしい。つまり今日は生存競爭の如何にも激烈な世であるから、大概の人の胸に多少の痛み處がある。煩悶がある。人毎家毎に多少の悲劇がある。隨つて人がゲラ〳〵笑つて居るのを見ると嘲けられたやうに感じて不快を感ずるが、切なる惱みがあり痛みがあり苦みがある所を生々と寫したものなどを見ると、あゝ世の中の苦しみはおればかりではないな、と何となく慰められたやうな、道づれを得たやうな、同感されたやうに感じて、何となく心の痛みが和らぐ。人間が悲劇だちの作を喜ぶ源因は、たしかに一部分はこゝにあるのである。かてゝ加へて今の青年は早くより親たり兄たる人の膝元を去つて、世故人情の經驗も知識もなくて、都會の眞中に獨りぼつちで下宿屋住居をしてゐるのであるから、不斷はよいが、一つ何か蹉躓があると、大きに心細くなつて、煩悶が起る。併し相談する人はない、相談する人は自分と同じ境遇、同じ無經驗の者ばかり。此の際小說を讀んで見ると、如何にも人生の謎を解いてくれるやうにも、或ひは又、深く自分に同感して不幸を慰んでくれるやうにも思はれる。で喜んで之れに向ふ。隨つて、此の種の小說が盛える。これも十九世紀以來の傾向である。これが第四の理由。

それからもう一つ、それは作者たるものゝ特質に基く。凡て文學藝術の作に從事するものは、人

の尻馬に乘つて摸倣ばかりすることを好むものでない。先人未發のこと、先人がまだ手を附けないことを開拓せねば氣がすまぬ。ところで何か創新な方面をと覗つて見れば、西洋でも日本でも、藝術の方面も文學の方面も、もう大概のことは使つてしまつたが、只在來先づ等閑視せられて居た部分は凡劣な方面、不具な、病的な方面、醜穢の方面。で、自然に其の方面に向つて突進することになる。卽ち古人の寫さなかつた所を〳〵とあなぐり拾つて寫すと云ふのが今日の傾向。で今の小說は大體に於て凡劣や不具や薄志弱行や性慾や罪惡や醜穢を寫すと云ふ傾向になつて來たのである。併しそれが昔のやうに決して浮氣でなく戯れでない。讀者も一生懸命なら作者も一生懸命、勿論多分の例外はあるが先づ大概は眞面目で寫す。出來得べくんば哲學や宗敎や政治やなどゝ同列の者たる働きをしようと思つてやつてゐるのである。もう今日の小說は子供や女の玩具ではない。大人や敎育家や經世家の參考用として讀むべきものである。要するに、かうなつて來たのは、他にも無論因緣はあるが、ほゞ以上五箇條の理由からであると、さしあたり申しておいてよいと思ふ。

さてこゝに一つの疑問は、今の小說の多數は、頻りに眞を標榜するが、果して今の小說に寫されて居る所は、人間の眞相と見做すべきであるかどうか？ 果して眞相を寫して居るのならば、成程此れは重寶なものである。昔は、人は五十にしてやつと四十九年の非を悟ると云ふが關の山で、世故人情に精通するは中々手間のかゝることであつたが、若し今の小說に人間の眞相がよく寫してあるも

のならば、名作の十五六冊も讀んだなら、悟りを開く道も非常に近くなるらしい。電車、汽車で旅行の速力が早まつたと同じに、人間の悟りの道も近くなりさうなとだが、果してどうあらうか？

彼の「白扇倒懸東海天」と歌はれた富士の山、其の富士の山の景を賞美するに當つて、昔は多く軒端から眺めたり若しくは麓から眺めたものであつた。昔とても山上へ登つた者がないではないが、それは所謂行者で、宗教上の別の目的から登つたので、風流遊覽の目的で富士へ登るといふとは先づ殆ど無かつたとで、彼の旅行好きの西行法師も富士見西行の名は殘しながらも登山はしなかつた。芭蕉翁にも富士山巔の句と云ふのは無い。處が今日は交通の便が開けたので、吾れも〳〵と猫も杓子も、老人も女も七歳の少女までも登る。今に盲人も登るであらう。イヤもう登つたかも知れない。偖かくの如く皆が競つて、富士の頂上へ攀ぢ登つて見た其の結果は如何であるか？ 麓で見た美しさ神々しさに相當する美しさ神々しさを登つてからも經驗したかと云ふと、先づは案外を感じたものが十中八九らしい。故小泉八雲、ラフカヂオ・ヘルンは、西洋人であつて日本の風土、習俗を愛し、解釋し、記述し、稱讃した世に稀な文章家で、其の傑篇に至つては筆々總べて聲あるかと思ふ程で、眞に音樂のやうな筆、繪のやうな筆、其の名文家のヘルンが綴つた「富士登山の記」と云ふのがある。はじめ其の題目だけを讀んだときは、嘸面白からうと思つて、樂しみにして讀んだが、さて存外面白くない。イヤ當人自身も登つて見たら豫期に相違して頗る面白くなかつたらしい。遙に遠方から富士山の優美な姿を眺めた時は、何とも云へぬ程美しい、たとへば格構が美人の撫肩のやうで、そして裳裾を廣くゆたかに左右に牽いた樣子は此の上もなく優しくなつかしい。やがて次第に麓に近づく、强力を賴んで登りはじめる。段々登りゆくに隨つて、今までは蒼く見えて居たのが紫色になり、それが又追々黑ずんだ色になり、果は總べてが眞黑な物すごい色になり、彼方の岩間、此方の岩間に、斑に雪が殘つて居る其の有樣が、如何にも暗憺としてゐる。昔燒け死んだ女の骸骨の黑焦になつてゐる奴の間から白い齒がチラ〳〵見えてゐるのを見たとがあつたが、丁度それに似て居る。想像したとは大ちがひ。あゝ、すべて人間の理想と云ふ者は斯樣なものであるのではないか？ 遠くから見て居る內が花で、傍へ近づいて見ると存外詰らないどころか、寧ろ穢らしいもの、恐ろしいものであるのではないか？ 其處が理想の本體ではないか？ と例の自在な、幽婉な筆で書いて居る。何と、ヘルンばかりではなく大概のものが富士へ上つた時の經驗はほゞ同樣であるまいか？ 登つて見ると案外だ。噴火口などを見ても只凄い、恐ろしいと云ふ感が起るばかりで美しくはない。イヤ其邊あたりには竹の皮が散ばつて居るやら、それよりもつと汚いものがあちこちに散布されてあるやら。いやもう殺風景、目もあてられぬ。東洋第一の名山も、登つて見ては趣味も有難みもなくなる。登ると理想が破れるから、登らぬこと〳〵、と歸つて來た連中が口を揃へて「まし給へ、僕も欺されて登つたがつまらぬ。登つて見ると禿山だ、穢い所ばかり見える。矢張

遠方の方から眺めて置く方がましだ。西行や太田道灌流に限る」とめい〳〵口を揃へて富士の眞相は醜惡であるかのやうにいひふらすことになると、例の度重なれば市にも虎を出すの類で、世人が擧つてそれを信ずるやうになるかも知れぬ。さう聞いて見ると富士は決して芽出度い有難いものでないによつて、軸や屏風に描いてある富士も消して仕舞へ、額も外して仕舞へと云ふことになつたらどうであらう？　イヤさうしたばかりが眞理に叶つたと云へるであらうか？　登山者連の云ふ所が眞相ならば、所謂新知識で、それも結構だが、若し大きに間違つて居たならばどうであらうか？　こゝが少々心配な點で、今の小説を諸君がお讀みなさると、西洋物でも日本のでも、無論若干の例外はあるが、先づは凡劣な方面や醜惡な方面や不具な病的な方面が主として描かれて居る。其の甚しいのを讀むと人間は人三化七、獸的本能が七分八分九分迄もある者のやうであるが、それは果して人間の眞相であらうか？　富士山を醜惡と云ひ無趣味と云ふのが眞を得て居るか？　今の所謂自然主義の小説が、あれが人間の眞相を寫したものであるか、どうかと云ふのが一問題となるのである。

以上は日本の小説ばかりをいふのではなく、寧ろ西洋のを標準としていつたのである。で、近ごろやかましい我が國の自然主義の名高い作は私はまだ殆ど讀んで居ないと同樣に、まだ富士山へも登つたことが無い。隨つて登山者の報告の當否も我が自然主義小説のよしあしをも明確には斷定しかねる次第だが、どうやら今の富士へ登る人達は餘り氣が早くはないかと思ふ。今の人は此の間富

士へ登つたかと思ふと、もう直ぐに歸つて來る。滅法早い。富士へ登る位ゐなら、野中至君程度まで〳〵は無いまでも、少くとも一週間か二週間程留つて居たらよからうと思ふに、すぐ歸る。長くゐたら、どんな經驗があるか、どんな結果が生ずるであらうか、もすこし取調べて見たらよからうと思ふ。彼の雄大な富士の日の出の壯觀などは、迚も一晩泊りでは見られぬらしい。三日も四日も留つて見れば、彼の瞠々たる紅玉盤が東方の谷間から浮び出る世に比類の無い莊嚴な雄大な趣きにも接するとがあらうではないか？　併しそれは迚も一晩や二晩泊りでは見られない。よし日の出は見られないにしても、迅雷なり、疾風なり、雨なり、霧なり、到底麓では思ひも及ばぬ自然の壯觀に接する機會がありさうなものと思ふ。成程、遠方から見たほど優美ではあるまい。併し決して醜とか劣とか穢とか一口にけなすべきものばかりではなからうではないか？　今の登山者の視察は一を知つて二三を忘れたものと評したくなる。而して今の小説の態度が大分これに似て居る。こゝが諸君の反省を要する所である。云はゞ彼等は人間の半分を寫して居るのみではないか？　在來の小説が美しい夢ばかりを語つて居たものならば、今の小説は往々にして穢い夢を寫してゐるものともいへる。馬琴が美な方、高い方を強ひて誇張して書いて居るならば、今の小説は醜な方、低い方に偏して書いて居るのではないか？　つまり孰れも半分は嘘さ。人間の眞相を知らんと欲すれば、どうしても實の人間にぶつゝかつて味はねばわからぬ。小説だけでは合點の出來るものでない。古今の文

學書類、美しい方面を主として寫したものをも、高尚を主として寫したものをも、今の小說を讀むと同時に偏重偏輕なく、讀み味はつたら知らず、さうでなくて甚妙不思議の人間の祕密が、どうして分るとでない。昔は小說といへば、女子供のもてあそびであつたから、誰れも之れによつて人間を知らうとはせなかつたが、今は小說の位ゐがあがり、眞を標榜して作するのであるから、そこで一段責任が重く讀者もまた警戒を要するとになる。今の若い人達のうちには小說に依つて人生を知らう、いや、知り得らるゝものゝやうに思つてゐる傾向がないでもない。其の他、豆鐵砲がピストルに代つたゞけに、他にも多少の弊が生じ易い。こゝが當人は勿論、父母たる人、師たる人の反省と注意とを要する點である。さて然らば、そも〳〵どう云ふ弊があるかといふに、

第一の弊は其の筆付の如何にも眞實らしいところから生ずる。我れを忘れさせ、神を遊ばしめるといふよりも、往々にして益〻自覺を鋭からしめて實感を呼び起すといふこともある。昔の小說は頭から偽らしい、馬琴の小說を讀めば初めから荒唐奇怪で、殘忍なこと、殺伐なこと、時として猥褻なこともあるが、到底字の通りとは思はれないから、先づは實感は起らない。然るに今のは十分尤もらしく實らしく書いてある、讀込んで行く內には殆ど眞を寫して居るとしか思はれない。自然のまゝ有りの儘を書いてあつて、女が出ても男が出ても自分のお袋ではないか、兄ではないかと思ふやうなこともある。一概にさう巧妙であるともいへぬが、世故人情に通ぜぬ若い讀者には、ともかくもさう讀まれるのである。で身につまされて强い同感が起つて來る。藝術としての同感よりも、時としては實感が起り易い。例へば、飲食物のことが書いてあれば、子供の話食はうと同じ理合で、それが飲みたくもなり食ひたくもなる。男女の關係が書いてあれば、文藝專門の人でない以上は、時として羨ましくなるともあらう。よしやさう云ふやうな意味の實感は先づ起るとは無いとしても、恰も彼の累がはじめて鏡を見せられた時と同じに、初めのうちこそは、凄い恐ろしい顏付に驚きもし怖れもしながら、それが自分の顏かと思へば怖ろしいもの見たしで、目も離さず見つめたくなるが、それが久しくなると、おひ〳〵絕望的になつて來る。これがおのれの眞の顏か？　それならばもう化粧したり品を作つたりしたところで何になるか？　もう〳〵棄鉢だ、とヤケになるといふ結果を生ずる傾きがないともいへぬ。そればかりでない。始終神經過敏な、自意識の强烈な、薄志弱行的な人物ばかりを寫してある小說を讀んで居ると、おひ〳〵それにかぶれて來る。神經過敏になる、邪推深く、臆測がちになる。感情的になる。果は厭世悲觀の念が募ることが無いとも云はれない。薄志弱行の人物・病的の人物の心理を如何にも上手に穿つて寫してある。思ふに罪惡を犯す者とても其の內心に立入つて察して見れば、決して惡むとは出來ぬ道理である。そこを穿つのが今の小說で之れを敎育家なり、父母なり、經世家なりが、よく〳〵熟讀含味したならば、必ず益する所多大であらうと思ふが、これを弱行者みづから、病的人物自ら、罪惡者自らが讀んだ時はどうかといふ

と、恐らく其の意味の益があるとは云へまい。先づはそれが爲に自是的傾向と云ふものを釀し易いと思ふ。昔も今も青年の情に克ち得ないはありがちのことである。併し昔は酒に溺れるにせよ、色に耽るにせよ、行ふもの自らは之れを是としては居らなかつたのである。自分では所謂意馬心猿に驅られて我れ知らず溺るゝので、大概は半無意識、然らざれば心の中ではとかく濟まぬといふ念があつた。で翻然として發心したこともあつた。然るに今の小說中に現れる人物は、我儘者でも、薄志弱行者でも、或ひは罪惡を犯す者でも、作者が殆ど科學的立脚地に立つて、而も深く之れに同情して寫すのであるから、巧みに人情の粹を穿ち、祕蘊に觸れる、若しくは觸れてゐるやうに見える。見やうによつては斯うならざるを得ないものだと辯護を主にして書いてあるかのやうにも見える。無論作者は藝術に忠實なる餘りにさう書くのであらうが、全く文學に心なきものは、成程斯う云ふ譯だから惡いことは更にない譯だ。此れが人間の自然であると自分の都合のよいやうに適用して、自ら辯護し、自ら是とし、さらぬだに鈍りかゝつて居る己に克つと云ふ心を益〻鈍らしめると云ふ傾向を生じないとも云へぬ。シェンキイッの作に一の人物がある。其の男は初めは、どうもおれは優柔不斷で薄志弱行でいけぬと自ら責め、どうしておれは思ふ通りを實行することが出來ぬか、何故斯うであるかと平生煩悶するのみであつたが、或る時スラブ氣質を論じた一書を得てそれを讀むと、其の中に優柔不斷はスラブ氣質の常であると云ふ意味のとが書いてあつたので大きに安心し、

おれはスラブであるから遺傳的であるのだ、先天的であるから是非に及ばぬ、何おれ一人ではないと安心してしまふといふとが書いてあつたと記憶する。これは慥かに人情の弱所を穿つたものだと思ふ。世が擧つて濁つて居るならば、せめて功名心でなりとも、おれ一人は濁らないでゐて驚かしてくれようとは思はないで、皆が濁るならおれも濁らう、と意氣地なく、共に濁つて了ふといふが凡人の常情。世間に不道の多いのを見て、暗に安心し、薄志弱行者の多いのを聞いて暗に自ら是とするといふは、情けないとながら、凡人の陷り易い所。で今日の凡人本位、病人本位の小說を耽讀する結果は、此の道理から自是的傾向を助長する弊があらうと思ふ。卽ち凡劣に安んずる傾向を生ぜしめる。今の作に出て來る人物はよし病的でないまでも、大抵皆平々凡々な人間である、不思議なとには何れも標本其の人よりも遙に以下の人物である。今の世間に多少の名譽を博して居る位ゐの人は、西洋は勿論、日本でも其の實傳を書くにしても懺悔錄を書くにしても、それだけに仕上げるまでには種々の苦悶に打勝つて來た人々であるとは明かであるから、事實通りに詳しく書けば、何れも中々立派なものであらうと思ふが、乍併今の作に現はれて居るところは、それが多少實傳的であるにしても、ホンの一部分である。隨つて眞相を盡して居ない。蓋しこれは其の筈である。迚も事實通りに書けるものでない。一寸宮島なり、天の橋立なりを描くにしても、全き眞景を描くとは迚も出來ないと同じやうに、小說中に人物を寫すにしても、單に其の人の性慾に關することゝか

或ひは或る一事に失敗した當時の事だけとか、只一局部だけ寫すことは出來るが、迚も全部は寫せない。で出來上つた結果を見ると、始終女の事ばかり思つて居るやうな人物が出來たり、妙に薄志弱行な、如何にも意氣地のない人物ばかりであるやうにも見える。かういふやうな理合から、今の小說に出て居る人物は、時としては凡人としても餘程甚しい方のが多く、決して標準や模範とすべき人物でないとは勿論である。隨つて之れを讀む俗人が、あゝ之れに比べれば己れの方が餘程まシだ、幾分か取得があると、自ら安んずる念が起り、自是的傾向を生ずるは無理ならぬことである。彼の「伯夷の風を聞くものは云々」といふやうな奮發心は、迚も起らない。「舜何人ぞや」といつたやうな奮發心は起らない。さりとて小說はスコット乳菓に代用すべきものでもなく、有馬溫泉の役廻りをさすべきものでないから、それがために必ずしも小說をも作家をも咎めるには及ばないが、讀む人自らは多少工夫と反省を凝らして貰ひたい。

卽ち今の小說に寫されたところばかりを人生の眞相と思ふやうな誤解なからしむるために、平生何等かの解毒劑を用意しておいて貰ひたい。さてその所謂解毒劑の一番善いのは、私の信ずる所によれば、活人生に觸れることである。今の或青年のやうに室內に閉籠つて書物ばかり讀んで居ず、篤と本當の人間を看察して貰ひたい。眞に世故人情に通じさへすれば決して誤解することはない。今日成功して居る人、名を顯して居る人のうちに、恐らく人三化七も幾らかはあらうが、今の小說が示して居るやうに、決してザラに人三化七のやうな人間ばかりではない。成る程、人は時としては獸的行爲に流れんとすることもある、併しそれが常に人間的要素に打勝つやうでは、人は迚も人として成立ちがたいものであるといふことは、實際多年世に處して居れば自ら分つて來る。いや、若いうちにも虛心平氣で廣く深く看察すると其の位ゐの事は分る。而して此の理の分つてゐる人には、今の小說は參考用で、利はあるとも少しの害もない。

併しこれらの理合は、中々以て五年や六年では分るものでないから、そこでその補ひとして、小說以外の人間の眞相、若しくは現世以外の人間の有樣を寫したものを折々は讀んで貰ひたい。今の小說が或ひは眞に寫實かも知れんが、ツイ只目前の寫實たるに過ぎんことが多い。過去の人間も參考して貰ひたい。例へば歷史や傳記、在來のものよりも一層新しい筆で以て、確實に綿密に、公平に而も活々と人間の事蹟を寫したものを流行させたいと思ふ。在來のは矢張り方便的に善惡ともに誇張して綴つてあつたり、政治上や宗敎上の目的で拵へてあるのが多いから妙でない。人間の思想の變遷、古今の人物の性行等を寫した歷史や傳記、英傑の醜なる方面をも、美なる方面をも、公平に、有りのまゝに寫して居るやうなのがほしい。

次ぎにもう一つ必要なものは、善い批評家。學識のあると同時に眞に人情通である批評家。文學、書類を博大な見識で以て解釋し批評して、本當の判斷をして、若い人達に聽かせてくれる人たちがほ

しい。今の小説を批評するものは、目下のところは大概新聞雜誌の記者である。而して新聞雜誌の批評は大抵小説作者自身の友人である。でなければ大抵は同じ年輩の人が書いて居る。此れも必ずしも不都合ではないが、或ひは見識思慮が足らなんだり、或ひは活人生には緣が遠かつたり、或ひは當面の文學上の事にのみ重きを置き過ぎてゐて物足らない。今一段個々人々の受ける影響にも考へを及ぼして、今の作物を藝術上からも、心理上からも、社會に及ぼす影響上からも考へて、批評する人が出て貰ひたいと思ふ。子供達に小説を讀ませるのをわるいとは云はぬ、わるいといつたからとて今日の時勢に禁じやうもない。で父兄たり師たる人は、出來るならば自分みづから此の種の批評家たらんことを心掛けて、子弟を敎へ導かるゝがよい。すれば今の小説は、取りも直さず、よい敎訓の道具とも材料ともなるであらう。

尙ほもう一つは時勢に副ふやうな立派な倫理敎育の主義方針を立てることが急務である。今日の學校にはそれ〴〵倫理修身の訓へがあるには相違ないが、其の有效なものは殆どない。今の子弟の心は無主義、無方針、譬へば頭が空家(あきや)同然、どんな精神上の竊盜でもが這入つて來る。詰らぬ小説にさへ心が動くといふは、何等の有力な主義方針をも倫理上から授けてないからである。今の小説は恐るゝに足らんが、青年の頭を無主義、無方針の空家にしておくのは頗る寒心すべきことである。

次ぎにもう一箇條は、東京などで見ると、知識の最下等と老人社會に適するだけの娯樂機關はあるが、知識の上、中流と新代の社會とを喜ばせる娯樂は丸でない。能や舊演劇は德川時代の遺物である。新代には向かぬ。浪花節や薩摩琵琶は知識の上、中流には向かぬ。詢に樂しみが乏しい。そこで若い人などはツイ〳〵小説ばかりを讀み耽るとになるのである。で私は小説の外に何か弊のない娯樂を與へたいと思ふ。一體室内にばかり閉籠つて本ばかり讀んで居るのは善くない。今の小説は忘我遊神の效用に乏しいだけ尙ほ妙でない。何か小説とは全く趣きを異にした而も今日の人の趣味に適合すべき面白い娯樂機關はあるまいか？　今の芝居は段々今の小説と同じ傾向を持つやうになつて來るのでこれもいけぬ。それらとは全く趣きの異つた新しい組織のもので、――尤も馬琴風のおかしく藥くさい勸善懲惡流のものではない、――暫く恍として我れを忘れしめ己れの心を樂しましめる、彼の海水浴に行つたやうな二十世紀の大日本國民にふさはしい、快活な、優美な、而も規模の雄大な藝術が欲しいと思ふ。是れが私の多年心を勞して居る所であるが、今にまだ是れといふほどの物を發明し得ない。明かに云へば、西洋のオペラに比すべき、音樂を地盤にした一種優美な劇が欲しい。さすれば自意識の餘り甚しくなりつゝある時代の病的傾向を和らげる幾分の役に立つであらうと思ふ。

年少讀書家のために

（明治四十五年三月）

印刷術の空前に進歩した今日程書を讀む者にとつて便宜の多い時代はない。昔は千金を蓄へてゐたものでも讀むことを難んじた本が今は飜刻本となつて貧書生の手にすら這入るやうになつた。汗牛充棟も啻ならずといふ言葉は今では比喩用とするに足らない。毎月々々の出版物に對してすら此の比喩を用ひてよい位ゐである、隨つて今日は餘程注意して選擇して讀まぬと、年が年中勉強してゐながら、眞の意味で言ふと何の益をも得ないとがある。列國との自在なる交通が一種の累をなして、萬國古今の著書が雜然紛然として同時に眼前に横はるから、とかく取捨を誤り易い。かて〻加へて雜誌や小說など〻いふ、言はゞ、一時流行的のものが最も喧しく評判せられて、若い讀者はそれに心を引かれる。で學校時代などは、一方は教課に忙しく、一方は此等の流行書類を讀むに忙しくて五年六年を夢と暮し、その結果當世流の文章が達者になつた計りで、何等腦に殘す所も無いとが多い。新著は一年過ぎてから讀めとエマーソンが言つたとがあるが、その通りで、一年後にも尙ほ生命を保つてゐる書ならば、必ず何處かに吾人を益する所があるものである。西洋などで雜誌亡國論、小說亡國論を唱へるものがあるのも滿更無理ではない。是れ今日の印刷術の發達は今の讀書

子に便宜なると同時に累を及ぼすものであるといふ所以である。

蓋し書籍は之れを讀む者の見識だけにしか讀まれないものである。俗諺に蟹は甲羅に似せて穴を堀るといふことがあるが、正にそれだ。『論語』なり、『聖書』なり、その他名著の大抵は、讀む人々の人格次第で、その内容の解釋も違ひ、效用も違ふのである。昔、曹子は飴を見て親を養ふの料たるに足ると云ひ、盜跖は錠を開く用に供するに足るといつたといふ、これは支那の寓言だが、我々の古今の名著に對する時の感じもそれだ。カーライルが沙翁集を評して、翁の作は七歳にして讀みて面白く、七十歳にして讀みて更に面白しと言つたのもこゝの道理だ。面白味の内容に千里の懸隔がある。果してさうとすれば、讀み方によつては往々何等の利益をも得ずして却つて害を受けることもあらう。例へば、彼のルーソーの自傳だ。あれを若し世故人情の深い經驗も無く、ルーソーに關する眼識ある批評をも論說をも聽いたこともなく、唯有名な、尊敬すべきイポック・メーカーの包まず作らぬ正直な自傳だとばかり信じて、始めより深く同感してのみ讀んだならば如何であるか？　その感銘する所は、恐らく妥當でもなく健全でもあるまいと思ふ。ルーソーの自傳を讀むものは、是非ともジョン・モーレーの『ルーソー傳』か、せめてハドソンの『ルーソー傳』位ゐは一讀して後に讀んだがよからう。

是れはほんの一例であるが、稍〻複雜な内容を具へたものは、大抵之れに類する用心を要するもの

であつて、何等の準備もなくして讀むことは眞に讀書の益を得る所以でない。

凡そ書物は大別して二樣となすことが出來る。それは單純なものと複雜なものとである。玆に單純といふは平易といふ意味ではない。解釋の單純をいふので、例へば科學書や哲學書は概して單純である。もし二樣に解釋する者があつたなら、それは讀み方が惡いので、如何にヘーゲルが解せられなかつたといつて、ヘーゲルの哲學は一本筋のものであつたに違ひない。然るに文學書となるとさうはいかぬ。或作は只一の觀念を現はす爲に作られてあれど、他の作はさうでない。作者自身の本意が、種々の意味に解せられるやうに書いてある。例へば、ミルトンと沙翁、シルレルとゲーテ、バイロンとスコットなどを比較して見ると、前者は主觀的で、後者は比較的客觀的と名づけられる。主觀的の作者は主として己れの主張、感想、主義、信仰等を語ることに勉めるから單純だが、後者は屢〻自家を沒して客觀の世相を描かんとするから、其の讀者に與ふる感銘は讀者次第で樣々になる。甲の讀者の感銘するところと乙、丙、丁等の感銘する所と一致して居ないことが多い。而も何れも作者の本意ではないこともある。かういふ作を讀むに當つては、讀者の見識と鑑賞力が大分大切なものになる。何となれば、受くる所の利害は、一に之れによつて定まるからである。

そこで玆に一つ妙なことがある。十八世紀末から、誰れも承知の通り、人々が自覺して個人主義的傾向が盛ンになつた爲、文學は何れも多少自傳的傾向を帶んで來た。最初は自傳的といつては少

少過言かも知れぬが、叙情的すなはち主觀的傾向を帶んで來た。一時は客觀的詩人は、英ではスコット、獨では主觀詩人から轉じたゲーテの准客觀詩、そこらが止りかとも見えた。その他の詩人は、かのロマンチック派を擧つて皆主觀詩人であつた。

處が、例の科學的精神がロマンチック派の空想と狂熱とに反動して文學に入るに及んで、前には寫實主義、後には自然主義の勃興となつて、少くとも外面だけは沒主觀らしい文學が榮え出した。所謂無理想、無解決の文學がそれだ。尤も是等新派の小說もよく〳〵詮じつめれば、隱然として自家の抒情を主としてゐるので、夥しき主觀的解釋の加はつてゐるのは明かであるが、とにかく外形は客觀的文學である。例へばゾラにせよ、ツルゲネフにせよ、モーパッサンにせよ、その他の寫實家にせよ、表面はあくまでも有りのまゝを描いたと見せてゐる。イブセンの諸作の如きも、見樣によりては主觀的なれども、俗に問題劇と言はるゝ位ゐであるから、種々な解釋を入るゝ點に於て、准客觀的の作とも言へる。茲に於てか此等の諸作を讀むには頗る注意を要することである。讀み方によりては作者の本意を讀み誤る計りではなく、或ひは眼の低い爲か、或ひは見當違ひをした爲に、品性上か、或ひは其の他の點に於て、益は得ずして却つて害を受けまいものでもない。

嘗て今の若い學生が此等の名著を讀んだ後の感銘を聽いて見たことがあるが、大概は成心を以て迎へて讀んだり、或ひは雜誌などに見えてゐた或る批評を標準にしてん讀で居るのが多い。例へば

イブセンは個人主義の人と聞いて、一から十まで個人主義を發揮し主張するために書いてゐるかの如くに讀む。彼の『ブランド』を讀むにしても、イブセンはあくまでもブランドに同感し、徹頭徹尾彼れの行爲を是認して居ると解するなど。又は彼の『人形の家』を讀むにしても、ノラは作者の理想的女性であるかの如く解するなど。是等は皆イブセンを小主觀の作者として了ふのである。若しイブセンがこんなつまらぬ小觀念の爲に作したが事實なら、存外彼れは取るに足らない男だと思ふ。成る程、イブセンはケアルケゴールドの新敎義に興味を感じてゐたでもあらう、併しよもや徹頭徹尾之れをのみを奉じて作する程に小さくはあるまい。『人形の家』とてもその通り、あの作の本意は女權擴張に在りと見んとすればさう見えぬこともないが、又他面より見て、あれは段々と人間各自の自覺が擴張して行けば、今に婦人にも斯の如き女が出て來るぞ、之れが新婦人の型だぞと暗示したのだとも讀めるではないか？　卽ちあれは難ずるでもなく、無論奬勵する意味でもなく、唯藝術的態度で未來の女をほのめかしたのだといふ意味にも取られる。又見所を換へて見れば、此の作は個人と社會との關係に關しての疑問を提出して見たのだとも言へる。夫れ個人對社會の關係を最も小さくミニマムの程度に縮めたのは夫婦だ。夫婦程小さい社會はない。夫婦の間にすら調和が成立たぬやうならば、他の大社會に出て活動するに至つて調和の成立たぬのは明かである。而してノラと其の夫ヘルマルとは、互ひに自我を立せんとする結果、此の小社會内に於てすら衝突した。

公平に見ればノラも尤もだし、ヘルマルも必ずしも無理計りではない。（此の理は詳述せねばならぬから省く。）さて此の境遇は如何に解決すべきか？　ノラの去るを以て是とすべきか、如何？　から問ひかけたのだとも見える。作者の本意はそこにないにもせよ、さういふ風に讀むことも出來るのである。

處が、又他方から此の作を見ると、ヘルマルの友人ドクトル・ランク、それからノラの學友寡婦リンデン、それから又代言人のクログスタッド、此の三人ともが皆失戀孤獨の人である。ドクトルは病身で、獨身で、失戀者である爲に此の世を儚なみ、寡婦リンデンも夫や子に死別れ、世をあぢ氣なく思つて暮してゐたが、肉體が健康である爲に此の世を棄てようといふ氣は起したくても起らない。隨つて依然生活をつゞけて、何か仕事をしたいと思ふ氣は盛んであるけれども、さて誰れの爲といふとが無いので、如何にも此の世が寂しく感ぜられてならない。それから又代言人のクログスタッドに至つては、これ又失戀の結果、段々墮落して、今や惡くすると强請（ゆすり）さへも敢てしかねまじき程度に至つて居る。彼れは決して本來の惡人ではないのである。然る所、寡婦のリンデンが恰も此の代言人の昔の戀人なので、そこでノラを思ふの餘り、リンデンがクログスタッドと舊交を溫め、進んで妻にならうと言ひ出す。それが元でクログスタッドは忽ち心機一轉して、危く崩した惡心を飜すといふが此の作のエピソードである。さア此れは何を意味するかといふに、要するに人は

單獨で居ては寂しうて堪らぬ、少くともミニマムの社會すなはち夫婦といふ關係を成立たせねば堪へ難いといふ人情をほのめかしてゐるとも見られる。又此の關係の成立つと同時にひがみの心まで解けるといふ意味も見える。又此の關係を結ぶ日は、男か、女か、何れかゞ多少讓步する所がなくてはかなはぬといふ意味にも見える。然しながら互ひに自我を立するに當つては、何れが自尊心が盛んかと云へば、習俗上からいつても男が上なことはいふまでもないのであるから、現在のところは女から讓らねば成り立ち難いが習慣である。さすればノラの態度は女性自覺の必然の結果でもあらうけれど、あの如くにして社會を成立たしむることが出來るものかどうか大ぶ疑はしい。イブセンの本意がそこにあるといふのではない。さうも讀まれるではないかといふのである。

或ひは此の作の眼目はそれでもなく、これでもなく、寧ろ主としてノラといふ特殊な性格に感興を感じてそれを寫すのを眼目としたのかも知れない。猶ほ沙翁が『ハムレット』を作るや少くとも半分方は主人公の人格に面白味を覺えてゐたらしいと同じではないか？『ヘダ・ガブラア』を讀んでも其の感じが起る。もしさうでなく、理窟や觀念が主でイブセンが作をしたが事實なら、イブセンは此の後五十年と壽命は持つまい。少くとも僕などはイブセンの所謂主張とやらに餘り多く感服はしない。むしろ彼れの人間を寫す筆力と劇的技巧（ドラマチックアート）に感心する。イブセンは技巧を用ひぬなどいふ人があるなら、それは實際の劇といふものを知らぬ机上論者であらう。

シェーンキイッの作『クオヴデス』なども、見様によつて種々に見える。作者の同情は何れにあらうとも、それには拘らず、讀者の同感は美的生活の殿りにして懷疑主義者らしいペトロニウスに集るとも出來れば、利己主義、本能主義の頂點を代表するニロを壯んだと思はれんともない。無論無我獻身を主義とする基督教徒にも同感は出來る。それやこれやを考へて見ると、書を讀むのは容易のことでないことが分るではないか？

近頃自然主義の小說に關する論議の盛んなのにつれて、一方には靑年者流に之れを讀ましめぬがよいと唱ふる者があると同時に、他方にはかゝる注意の愚なるを笑つて、寧ろ如何に小說を讀むべきかを敎へよと注文する向きもあるが、是れは恐らく望み難いとではないかと思ふ。酒か煙草ならば、何本とか、何杯とか、時間の制限とか、二三の原則を與へて方針を明かにするともできるが、小說類は前述の二三の例でも解る通り、一つの作が種々に解釋が出來るし、又相應な批評家ですらその見當を誤る位ゐである。況んや世故人情に暗く、比較すべき他の著述をも殆ど未だ讀んでをらぬ學生などに適當の讀み方が出來る筈が無い。よしや學校の校長か又は或敎師が指導するにしてからが、文學專門の學校ならいざ知らず、年が年中出來るとでもなし。よし出來るにしても全國の中等程度のあらゆる學生を指導するに足る程の適當の批評家的敎師がさう大勢あるであらうか？　僕は如何に讀むべきかを敎へぬと言ふ人に向つて、も少し詳細な說がきゝたい。一冊々々についてなら指導も出來よう。應用のきく讀み方は敎へやうもないと思ふ。さりとて僕は小說を讀むのを禁ぜよなどゝ愚なことは言はぬ。言つたとて無論無效だから言はぬ。

今の自然主義の作を人生を知る道具としては無價値とは思はない。よし眞相を傳へてないまでもよい指導者さへあれば敎育上にも多少の益があらう。然しながら全く手放して讀ましたならば、益する所と害するところと、大まかにまけても相半するであらう。

尙ほ之れについていふべきことは色々あるが、今は唯思ふ所のみを述べた。

文部大臣の訓令につきて

（明治三十九年十月）

青年社會に意氣鎖沈、風紀頽廢の傾向あることは、大體に於いて爭ふべからざる事實らしいとすれば、文部大臣の訓令は必ずしも時弊に中らないものではない。若し此の一訓令のみで以て時下の弊を救ふに足ると思ふ者があらば、それは大いなる誤りであるが、防止的方法の一としては、必ずしも異議はない。併し唯〻一時を防止する姑息の手段には相違ないから、何等か別に根本的の矯治策がなければならぬことは勿論である。

譬へを以ていはゞ、連日の豪雨で、或る大河が增水して將に氾濫せんとするにあたつて、これを治むるの法は、單に堤防のみを修覆する位ゐにては事足るまい。恰も彼の訓令は、唯〻此處彼處堤防を修覆せんとするのに比すべきである。根本を矯治する所以でないことは明かである。卽ち青年の諸弊は如何にして生じたかといふ點が十分研究してないやうに見受けられる。「家庭の監督其の方を誤り、學校の規律漸く弛緩せるの致す所」とのみ言つてあるは、たとへば杙の折れたのや、石崖土堤の崩れたのを以て、氾濫の原因となすに似てはゐまいか？ 尤も別に、「社會の一部の風潮漸く輕薄に流れんとするの兆あるに際し」といふ一句があれど、これを主な原因と見做してはないやう

に見える。若しこれを主要な原因としたのなら、先づ第一に此の方面をどうかせねばなるまいと思ふ。譬へでいふと、山林の濫伐や、連日の豪雨や、河底が淺くなつたのやらが、氾濫の主な原因であらうのに、それらはすべて無視されてあるかのやうに思ふ。

青年の意氣鎖沈といふことにも、種々の原因があらうと思ふ。思ひつきのまゝをいへば、先づ第一に、生活問題が面々の鼻の尖端に迫つてゐるといふこともあらう。十五六年乃至廿年以前の青年は、今の青年と違つて豪放であつた云々といふ評が、大ぶ諸先輩の間に唱へられるやうながら、これは今の青年を責むる語としては穩當でなからうと思ふ。生存競爭の激しき今日では、私立大學程度の學校を卒業しても、尙ほ中々たやすくは生活の道を得がたい有樣ゆゑ、周圍の事情が當人をして生活問題を無視せしめない。父母親戚がやかましい。こればかりでも何となく鼻の尖端の悶へる感じがあつて、非凡の英才でない以上は思ひ切つたことが出來ず、それがために意氣の沮むべき傾きがあらう。加ふるに、平等時代の自然の結果として、人々皆叶ふべくば最優等の地位を得たいと願ふ。立志傳などを例話にして、勉强次第で誰れでも大發明家になれるやう、英傑になれるやう敎へるのも、時としては一の弊源で、人によつては、天分不相應の功名心を燃やして、學校を卒へて四五年にして優秀の地位に昇り得らるゝものゝやうに思つてゐる。天分が秀でゝゐて、其の理想、願望も合理的であり、且つ之れに伴ふ所の克己力があらば、その望みも達せらるべきであるが、そ

こが今の敎育の利弊で、一面、愚人をも並の人位ゐに薫陶し得る便利な敎授法であると共に、他面、克己力の修練に乏しく、學校で、お伽草紙同樣なものばかり讀ませて育てるから、樂に學問をする癖がついて、小學時代は遊んでゐるも同然、苦學の眞味を知らぬから、英才は別として、並のものは中學時代になつて、もう已に鼻が悶へ始める。俄かに學問といふ物が六かしい者になる。幾つも關門が出來る。現に早稻田中學などの實驗に照らして見ても、四年級、五年級への補缺入學を許すといふ場合に――高等學校へ多數の入學者を出した中學へは志願者が多い――志願者が多いために、やむを得ず競爭試驗を課して、百五六十人中、時としてはたつた十五六人を採るといふ體。で地方から出て來て及第し得ないものが多い。卽ちもう此の時分から失望失敗の經驗を嘗めて臆病になつてゐる處へ、第二の關門は高等學校に入るとの困難である。この競爭試驗に數回の失敗を經驗するためしは少くない。これ全く學制の缺陷に基くものであるが、この失敗に伴ふ失望、それにつゞいては煩悶、やがては自暴自棄ともなる。これが意氣鎖沈の第二原因であると思ふ。

さて、煩悶といふのも、主義のため、人のため、世のために、事が志しと違ふための煩悶といふのでなく、往々にして爲我的で、自分本位の小さい煩悶が多い。隨つてこの種の煩悶は薄志弱行の徒に多い。然るに、さらぬだに、斯くの如く薄志で自分勝手である煩悶にジャスティフィケーションを與ふるに類する言論が往々にして世に行はれる。或ひは自分自ら誤解して煩悶のジャスティフィケ

ーションとなすことがある。たとへば一知半解の厭世論、本能滿足論、懷疑說、或ひは凡人本位の小說などが、このジャスティフィケーションの道具に使はれることがある。平民時代のことであるから、小說の人物も多くは平凡の人間、弱點や罪過の多い人間を寫す。それも文學上より見れば何等の差支へもなく、讀者の識見が高ければ寧ろかゝる小說の中にこそ深い敎訓を見出すこともある習ひではあるが、まだ根ッから世故人情に通じない靑年者流が讀んだ日には、作中に見える斯やうの事は世間普通のことであるとばかり思ひ誤ることもあり、時としてはそこにジャスティフィケーションを求めることもある。戀愛の話だからといふよりもむしろ此の點に今の小說の危險はあらうと思ふ。要するに一知半解のペッシミズムやシニシズムや功名心に驅られての破壞主義等は往々にして言譯に過ぎない。

又一方からいふと、失意煩悶のあまり何等かの慰めを求めて心の悶々を遣らんとする場合に、今日の寄席や芝居は迚も之れを救ふに足らない。で何か慰めを得ようとしていつしか酒色に耽り、不攝生の結果病ひを釀すことがあつても、醫師の診察を請ふを面倒がつて賣藥で濟すので、とかく激藥の濫用にも流れ易く、竟には病ひが本物になり、遂には神經衰弱に陷ることもあらう。

かゝる場合に、諸ろの誘惑が來たるとすれば、如何なる自由主義の人も多少考へねばなるまい。所謂戀愛小說の不健全なる暗示、いかゞはしい繪畫や娛樂。誘因だけを防いだからとて病ひは治るものでないが、醫者が來るまでは、先づ防ぐはうを先きにするといふも無理のないことだと思ふ。

次ぎに風紀頽廢の原因は何であるかといふに、これは要するに滔々たる時代の風潮の然らしむるところと答へたはうがよい。イゴイズム、センシュアリズム、エフェミナシー、エピキュリアニズムは、物質的文明に伴ふ一代の風潮である。平等時代の特質として、交通に、衣食住に、十九世紀以前には手に入れられなかつた奢侈、便安、娛樂が、今は手輕に得られるやうになつた。老人のみの用ひた襟卷、手套も今は壯者も用ひる。濫食しておいてヂャスターゼを濫用する者もある。無ければ歩く若い者も、あるから電車に乘るやうなもの。畢竟ずるに、平等時代のおかげで奢侈品が一般に普及し、これを享樂するの自由が增して來た。已に自由平等の世ならば、これらの奢侈をも平等に得たがるは人情の自然である。昔は羅馬の所謂市民は、中等以上は遊民であつた。藤原氏時代の公家もまた一種の遊民たるに過ぎなかつた。しかし乍らそれらは、何れも時の社會の上流のみであつたが、今は平家の公達などのして來たことを、平民一同がしようとする。上の好むところ下またこれを好むといつても、昔は法律や習慣やで多少の制限があつたけれど、今は何等の制限もない。靑年も同じ渦中に在るのである。

右の便安や娛樂の濫用は、時代の風潮をなしてゐるのだから、正に連日の豪雨に比すべきであらう。是れを矯治しようとすれば、勢ひ物質文明の弊竇の根本に大刀を下して治療せねばなるまい。

甚しい薄志者、無分別者でも、――已に幾年かの習慣によつて殆ど病的となつたものでない限りは、――流石に中年以上の者ならば、半ばは生理上の因縁で、半ばは經驗的知識の功德で、肉體上の諸慾に耽ることも、金錢上の濫費も、他人との應對上の手心も、さすがに極端には至らない習ひであるが、青年、少年はそれと違つて、全く向う見ずで、とりわけ肉體の慾は甚だしきに流れやすい。血氣盛りのことであるから、情ばかり激しく、克己力の弱いのが常である。それも、在來は家庭の教訓や家屋の構造上、父兄の目前にゐては自然の監視拘束もあり、近處、近傍、親族、緣者などの輿論といふやうなものもあつて、いくらか自ら抑へてゐたのであるが、父兄の手元を離れ、あかの他人の中に出ては、所謂旅鴉で、旅の恥を耻ぢぬこともあり、かた〳〵放縱に流れやすい上に、個人主義の今日では、前に擧げた種々の學說などに助けられて、自己のなすところに一々ジャスティフィケーションを與へ、自是的となるから、一段と始末がわるい。

況んや、所謂顯官、名家、先輩といはれる人々が惡い手本を示すことがあるから、彌〻困る。青年の師表が無い。これを河底の淺くなつたのに比する。この事も維新以來の大勢であつて、今遽かに如何ともしがたい。それも少數なれば除いてしまふことも出來れど、畢竟時代の風潮の釀し出だしたものであるから、如何なる人でもあなぐり穿鑿すれば、今か昔か、社會に對してか、家庭に對してか、金錢上にか、事業上にか、私行上にか、何等かの點に於て一點なり二點なりの故障があつて

何等の缺點も全く無いといふ人は少なく、一人や二人の沙汰ではないから困る。たとひ別に宗教家の側などに局部的の指導者はあるにしても、全般を率ゐる人は、先づない。さて又斯かる折柄、道德の基礎でもせめて確立してあればまだしもなれど、それさへもない。良心を指導する標準がない。本來良心は盲目的である。多年爲慣れた範圍だけは「勘」で行くが、それ以上は半信半疑に成り易い。今の青年の心には良心の標準がないから、言はゞ怖いものなしである。たとへば主なき家も同然、それゆゑ一段誘惑といふ賊が入り易い。中學時代は最も大切なキャラクター・メーキングの時代であるのに、今の中學ではそれが殆ど行はれてゐない。

倫理教育の功果の擧がらぬは、畢竟は倫理の標準が定まらぬからである。これは山林濫伐などに比すべきものであらう。今俄かに植ゑつけをしたればとて、禿げた山がまさか二年や三年で立派な林になる譯にもゆくまい。一日も早く植附けに取り掛るべきは勿論なれど、いづれ急場の用には立つまい。加ふるにかゝる亂脉の際に、早くから父母の手を離れて、自墮落に生活し、下宿屋住ひの惡感化を受けるのであるから、弊が一層甚だしい。文部大臣の訓令があれだけに止まつて、それ以上に言ひ及んでないのは不備であるが、應急の一策としては已むを得ぬところもあらうと思ふ。

尤も、すべて誘惑物の禁止は家庭以外には實行の出來るとでない。小說を讀むなといつたとて、讀まうと思へば讀むから仕方はないやうなものだが、さりとて讀ませるはうがよいといふことも考

へ物である。若し讀ませろといふ積極的の說を主張するならば、どういふ風に、どういふものをといふ事を、コンクリートに說明する責任があらうと思ふ。其の效能をも明かに說明してかゝらねばなるまい。

之れを要するに、最上の策は防止にあらずして展開にあることは明かである。一方を切開いて新しい水路を作り、汎濫せんとする濁水を其の方面へ決するに限る。青年の心機を轉ぜしむる工夫が第一だと思ふ。肉慾以外、瑣屑な煩悶以外、戀愛以外、小さい功名心以外に求むる所あらしむるが必要である。然らばそれはどうしたらよいかといふに、迚も手短には言ひ盡されない。當面の問題でもないから今日は言はぬが、彼の訓令を世間の人達が非難するのも大かた此の邊の方策が講じてないからであらう。

文藝に對する三の異なつた標準

倫理標準が崩れたと同時に審美標準の思ひ〳〵となつた今日は、文學藝術に對する標準が幾つあるか分らない。併し大まかに分けて見れば三つの大標準があると思ふ。それだけは豫め區別しておいて論をしなければ、何が何やら一切ごつちやで、互ひに何の益する所もないであらう。三大標準とは普通の鑑賞者——卽ち俗衆——の有意無意の間に奉ずる標準が一つ。それから社會經營を念とする人々、卽ち內務や文部や司法や警察側の役員、或ひは敎育當事者、或ひは年少子弟の薰陶に從事する父母や監督者などが有意無意の間に奉ずる標準。是れが第二。それから第三は文學、藝術の製作に從事する人々もしくは自ら創作せぬまでも專ら之れを研究批判することを專門とする人々が奉ずる標準。

此の三者は其の文藝に對する本來の心持——動機——が全く異つてゐるために、稀には相一致することもあらうが、先づは相背反する傾向を持つてゐべき筈である。例へば、普通の鑑賞者は只何でもおのが嗜好を滿足するに足りさへすれば可なりとする。陽氣だちと陰氣だちとの別、快活がゝつたのを好むと悲哀がゝつたのを好むとの別てそはあれ、大體の目的は何等かの娛樂か慰藉かを求

むるにある。甚しきに至つては如何に不條理な野卑なものでも、殘忍なものでも、猥褻なものでも歡迎する。病的なもの、不具なもの、奇怪なもの、醜陋なものを敢て辭さない。何となれば彼等の本意は、一へに現在の憂鬱か苦悶か單調子か無聊か不平か何かをまぎらさうとするが主であつて、必ずしも藝術上の眞鑑賞に重きを置くのではないからである。これらのうちにも追ひ〳〵高尙な趣味に感化せられて眞の鑑賞者となりゆく者もあらうが、一生單へに實感ばかりで文藝を玩弄し、知らず知らず自から害ひ自ら傷くるの媒介となすに過ぎんものも少なくない。これらの徒から見れば、爲永の作も自然主義の作も見さかひはない。要するに娛樂本位だから利害の如何を問はない。只さしあたつて面白ければよいといふが此の手合の標準なのである。

次ぎに社會經營者、敎育者は、これは又單に個人及び社會に於ける感化影響の上からばかり文藝を見る。これも遠視と近視との區別こそあれ、其の功利主義的たることは一である。隨つて作家の動機乃至社會に於ける利害以外の效能なぞは眼中に無い。而して前に擧げた娛樂本位の標準で以て歡迎する文藝品が社會人心に有害である場合は實際頗る夥しいとであるから、此の派の神經は日に月に鋭敏になつて來る。そこへ以て來て第三の作者側、批評家側からは彼等を無學だの頑瞑だのと詈り嘲ける。これらの批評や議論が彼等の自尊を傷くることも多いので、相激成して彌〻過敏になり犬と猿とのやうに仲たがひをすること、古今東西とも一轍である。要するに凡人の心に於ける現在

の感化といふことが此の派の標準である。而して所謂凡人といふものが大多數である以上は、此の派の說も專門家側の言ふやうに一概に等閑視去る譯にもいかない。かういつたつて、何も僕が功利主義派の肩を持つのではないが、文藝の永遠に於ける功過の豫算位ゐは一應試みて見る必要がある。今日行はれるやうな或小說は、よしや二人三人にもせよ、生きた人間を眞に犧牲にする價値があるかどうかと考へて見る位ゐの義務は、作者側、批評家側にもあらうと思ふ。旅順一つ落す爲なら或論者は二萬人までは忍び得ないまでも二千人位ゐまでは容易く忍び得られるなぞといふであらう。して見ると「爲永春水全集」は果して何十人を犧牲にする價値を持つてゐるであらうかといふ議論が起りさうではあるまいか？　此の點は作者達は虛心平氣になつて、自からも只の讀者になつた氣で、今現に十六七歲以上の子供を大勢持つてゐる人になつて考へねば解らないとである。

それから第三の作者、專門の鑑賞家、これも小別はいろ〳〵だ。唯美主義者もあらう、方法こそは違へ志しは科學者の如く眞を寫さうと覘つて、少なくとも目前の利害などは眼中におかぬ者もあらう。單に好奇癖、研究癖から何とはなしに珍らしい方面へ手を出すといふ連中もあらう。貝塚を發く人が史蹟研究が五分、道樂が五分、言はゞ遊び半分で骨を折るが如く、どちらかといへば一種の本能滿足でやる者もあらう。人生五十年、文藝より外には心を慰むるに足るものがないからとてやる者もあらう。絕望のあまり、とはいへ幾分か心に餘裕のある所から、せめても自分のヤケクソ

を客觀視して自ら慰め樣といふ料簡でやるのもあらう。或ひは敎訓主義者もあらう、功利主義者もあらう、宗敎的傾向の作者もあらう。但し今日の傾向をいへば、前に擧げた第二の功利主義者と同一見地に立つ者は先づ少ないと言はねばならぬ。いな、多くは現在の社會に於ける利害や他人に於ける利害などは丸で眼中に置かないといふ個人本位主義である。成程、個人性の發揮を文藝の本意とする以上は是れも必然の沙汰と言つてよい。さりとてこれは藝術家側から見る事で、一々之れを御尤々々といつてゐては社會側は大迷惑といふ場合も往々にして生ずべき道理である。例へば、屍體解剖などは公然衆の前で行つたとて差支へなさゝうなものだが、それさへ人心に於ける感化上其の他から見て、異論を唱へるが通例であるとすれば、溫いまゝ、湯氣の立つまゝの社會の解剖には神經を惱ます手合の多いといふことも一概に無理とは言へぬ。つまり作の價値が問題の根本だ。どえらい作品さへ出れば第三の標準におのづから身方が幾らも殖えようが、凡劣な代物では此の派の足元が時としてはあぶなくなる。さう言つては何だか、今日の作位ゐではまだ〳〵眞にヤッキとなつて文藝辯護の役をつとめようといふ程の氣になれない。眞のことをいへば、止めても止めないでもどうでもよいやうな氣がしてならぬ。當局の本屋には氣の毒、作者にも氣の毒だが、文藝全體の消長には大した關係も利害も無いやうに感ぜられる。もつともゾラやモリエールの禁止は何のことだか、讀んで見ぬから分らぬ、隨つてこれは別の事にしておいて貰はう。

要するに、第一の標準と第三の標準とは期せずして相一致することはあるが、第二と第三とはとかく犬と猿になり易い。殊に作家が四十以前である間は此の扞格が一段激しからざるを得ない理由がある。それは今言ひ盡せないから後日に讓る。

文藝取締り問題

（明治四十三年四月）

此の問題に關しては、嘗て「三つの異なれる標準」と題して話した事があつた。が、話の順序として、ざつともう一度其の事を言はう。

私は、文藝上の作物に對しては、少くとも三の截然として異なれる標準が成立つと思ふ。既に截然として異なる以上、時に相衝突することを免れない。三標準とは、一は文藝家や專門の文藝鑑賞家の奉ずる標準。二は普通公衆の奉ずる標準。三は俗に其の筋と稱するオーソリチーや教育家や宗教家や凡そ實際に社會の經營や風紀の振肅に當つてゐる人々の奉ずる標準。くはしいことは前にいつた說話にあるから、今は只要點のみをいはうに、所謂其の筋及びそれとインテレストを同じうする手合は專ら現下目前の功過や利害を標準にして文藝を取締り、文藝家は主として藝術上の本能滿足を標準として、言はゞ藝術絕對觀に住して製作し、世間普通の玩賞家は千差萬別の心を以て之れに莅む。第一は實利主義、第二は要するに本能滿足主義、第三は詰り娛樂本位。作者の本領は自己を發揮するにあるのだから、成るべく奇拔に、成るべく斬新にと狙ひを附けて作するでもあらう。而して世間の玩賞家はとかく陳いものには饜く習ひだから、是れ亦た成るべく奇拔なもの、成るべく斬

新なものをと望むでもあらう。こゝに於てか、作者と普通の公衆とは、其の目的や見識やは恐ろしく違つてゐるにも拘らず、又其の標準の本來が同一でないにも拘らず、其の結果に於ては時に全く一致するともある。獨り其筋や敎育家や道德家等は成るたけ「事勿れかし」本位だから、とかく奇拔なものや斬新なものを忌む傾きがある。何となれば奇拔とか斬新とかいふ色を帶んだ者はとかく從來の習慣や風俗と背馳し若しくはそれを危うする傾向があるからである。斯樣に標準が異つてそれぞれのインテレストが一つでない以上は、時に取締り問題の起るのも止むを得ない次第である。

蓋し如何に世の中が進んだとても社會に人格の階級は盡きない。先づ老少の別がある。智愚、學不學の別がある。病的な感情を持つたものもあれば、健全な生れつきのものもある。意志の薄弱なものもあれば堅固なのもある。思想や好尙や敎育や遺傳や境遇や周圍との關係等が異なれば、同一のものに對しても聯想や解釋が違つて來る。さすれば同一物が與ふる感化影響が人によつては大變な相違であることを思はねばならぬ。現下目前の風紀を取締ることを責任とする人々が、機に臨み變に應じて何等かの取締り法を講ずるの必要を感ずるは當然の事であらう。

然し是れは抽象的にいふので、今日の取締り法が當を得て居るか否かは全く別の問題である。そこで、文藝品から生ずる危險といふは一體どんな事であらう？　取締らずに打捨てゝ置いたらどういふ弊が生ずるであらうか？　先づそれから考へて見る必要がある。普通言ふ所によると、秩序破

壞とか治安妨害とか風俗壞亂とかいふ語で蔽はれて居る。是丈(これだけ)では少々漠然に過ぎて內容が分りかねる。「危險なる思想」、「不健全なる感情」などゝいふ名稱も同じく抽象的で漠としたものだ。所謂「危險」、「不健全」の定義を聞かぬうちは議論のして見やうがない。成程、政治上の或目的で綴られた著作物などには、確かに治安妨害の虞れのあるものもある。其等には秩序破壞とか危險な思想とかいふのが當嵌まる。又或種の繪畫幷びに著作は、餘りに露骨で、グロッスで、誰れが見ても明かに風俗壞亂と認められる。然しそれらは皆文藝品で無い類である。近頃禁止せらるゝ小說類、雜誌類に至つては、或ひは一二の例外はあるかも知れんが、僕の見た限りでは殆んどどれもさういふ定義には當嵌まらないものと思ふ。イブセンやメーターリンクやシ゛ーの中にも、知つての通り、一時興行を禁止せられたり、禁止同樣の運命に出逢つた作もあるが、あれらも無論のとさういふ定義には嵌まらない。イヤ大槪の禁止せられた作が——古今內外——此の定義には外れてゐると思ふ。されば こそ作者側及び批評家側から種々の激烈な抗議が起るのである。何を標準にして危險と認め、不道德又は不健全と呼ぶかと反問するのも尤もである。然るに當局者側ではとかく此漠然たる目安だけを主張して其の他を發表しないのを例として居る。或ひは祕訣として居るのかも知れない。理窟一點張の法律問題だけに餘りに要領を得た時分には後になつて動きが取れぬから、そこで議會に於ける大臣の答辯竝(な)みに不得要領にしておくのでもあらうか？　さりとは如才の無いことだが、文藝

家に取つては迷惑千萬である。併しさう思ふのは或ひは買ひ被りで、實はそれ程深切には、精紀には考へてゐないのかも知れない。

僕の考へる所では、文藝品から生ずる弊は――專ら目前の利害のみを標準としていつたら――非常に瑣屑な、複雜なもので、前に擧げた目安卽ち秩序破壞とか治安妨害とか風紀紊亂とか危險なる思想とか不健全なる感情とかいふやうな大ザッパな、御大層な性質の者からばかり生ずるのでないと思ふ。是等の目安は恐らく其筋の目的を的確に言ひ現はしてゐないのでもあらう。今の法律家の頭は文藝問題に對しては尙ほ頗る粗雜で、其言はんとする所を言ひ得てゐないのではなからうか？ 彼等の意は寧ろ下の如き點にあるのではなからうか？ 曰く危險もしくは不健全な意味に誤解せられ易い思想。曰く讀む者の意で曲解して自家の行爲を辯護するの料となし、甚しきは放僻邪侈の口實にも供し易い作意。曰く既に何等かの惡傾向を具へて居る靑年などに讀ましむれば、意識的に又は無意識的に其惡傾向を煽動し募らしむるの端緒（ヒント）、暗示（サゼッション）、誘惑（テムプテーション）になり易い作柄。卽ち其作物の本來は決して不都合ではないのだが、右の如き虞れがあるので、現下目前の利害上より見て之れを取締らざるを得ぬと認定す、と斯う言はうとするのではなからうか？ 文藝家に取つては至極迷惑であるにも係はらず、此解釋による時は、文藝家、批評家の見て何等の危險なしと認むるものも、又幾多の玩賞者が見て何の惧れなしとする作も、或ひは場合によつては取締る必要があるかも知れな

い。當局者の眼から見れば、十人廿人の少數に弊を及ぼすばかりでも、時と場合によつては等閑にはならないことがあるかも知れない。といふのは前の諸條の外にまだかういふ事がある。其の作物自らは何れの點より見ても些の差支なく、不健全なヒントともならねばサッゼッションも與へないとする。而して如何な神輕過敏の其の筋もそれ丈（だけ）は認めたとする。而も其れを許した場合にはそれに似て非なる者が盛んに續出する惧があるとする。或種の女風俗畫や裸體畫や特に男女の間柄を寫した或種の小說類には此の類のことがあらう。純正（ピュエイン）なものと似て非なるものとの距離が明著な場合には、別を立てることも容易いが、繪畫又は有りのまゝを寫した文章などであつて見ると、時に辨別の附きかねることもあらう。『田舍源氏』の或挿畫と『梅曆』の或挿畫との距離は頗る接近したものだが、精しく觀れば距離がある。『田舍源氏』の畫を忌むことなれば德川時代の草艸紙は殆ど皆忌まねばならぬ。が其の筋は『田舍源氏』をも禁じた。思ふに是れは見分ける標準に窮した餘りのワザクレではあるまいか？ 梅曆式がすぐ接踵し來ることを恐れたのではないか？ それはともあれ正純と似て非なるものとの距離は殆ど俗眼では辯別しがたい程であるから、若しやゝ寬大な態度を取ればやゝ非なるもの位ゐは見のがしておかねばならぬ。すると其のやゝ非なるものを標準にして更に一段非なるものが出ることになる。而して此二つの距離はほんの一二歩だとする。そこで據ろなくそれの發行をも許して置くとすると、次第々々に其の度合が高まり、同時に之れに刺激せられエンカレージ

されて他の方面にも同傾向の作物が續出し、果はそれが一代の流行になつて底止する所を知らない、とさ其の筋は取越し苦勞をすると見做す。何と此の摸倣者の輩出といふ事、作其の物を摸倣するばかりでなく、其の傾向、其の風潮を摸倣する事の盛んになるのを恐れること、是れも亦た暗に禁止の理由となつてゐるのではあるまいか？

惟ふに、一代の道義的標準や信念が鞏固であつて、倫常が維持せられ、法律以外の制裁も程よく行はれて、人心が輕薄でない時節や場合ならば、如何な危險な文藝品が世間一般に瀰漫しようと、固より聊かも憂ふるに足らない事だ。恰かも身體の健全な場合には、如何なる病毒をも恐るゝに及ばぬやうなもの。よしや身體が幾分か弱つてゐたとても、せめても相當の醫者がゐるとか、何等かの立派な解毒劑さへ具へてあるなら、是れまた些かも恐るゝに及ばんとである。是れは所謂文藝品が眞に不健全で危險であつた時ですらも然う。況んやそれが其の實質に於ては健全であり高尚であるが、單に曲解せられ若しくは誤解せらるゝ虞れがあるといふのみの場合に於てをやである。畢竟ずるに文藝品は酒に比すべきものだ。中には非常に淡白で、酒といつてもビールの程度、時には更に淡白でサイダー程度のもないではない。然し又日本酒のやうな、シャンペーンのやうな乃至白酒のやうな、蜂印何とかのやうな、又はウイスキー、ブランデーのやうなのもある。それらは酒を飲みなれぬ、まだ餘り堅固でない腦髓の者が飲めばついグラ〳〵となることを免れない。酒は飲まずとも、わるいことをする奴はする、といふ議論も尤もだが、酒さへ飲まねばといふ場合も屢〻ある。これがヒントたりサッゼッションたりテムプテーションたりといふ所以で、其の筋の頭痛が果してそこにあるのならば、一概には無理ともいへない。清酒と混成酒の別は、前者が下等で後者が上等であつた時には殆ど見分けやうがないであらう。之れを要するに、インテレストの相違が其の筋の態度をして文藝家のそれと直反對たらしむるのであるとすると、他のイレテンストを以て頭から彼等を非難する譯にも行かぬ。彼等の不當を責めんとするなら、かうすればよいといふ方法を講じてやるが最も親切な態度であらう。

處で、其の方法を講ずるに先きだち、一應文藝家の主張を考へて見る必要がある。今日日の事だから、文藝家の主張も色々だ。僕が今、當座の考へで並べ立てるのはホンのその一斑を蔽ふに過ぎぬかも知れんが、ホンの思ひ附きをいつて見ようなら、詰り文藝家の第一義は、自己を發揮するとにある。前人未發のオリヂナリチーが彼等の本領で、概して藝術絶對觀に住して居るものと見てよい。それを假に分類したら美のため專一の派と眞のため專一の派と人間のための派とで、其のうち美のため派も唯美を是れ寫して現下の利害をば顧みない、で時に風紀と衝突するが、とかく取締り問題に觸れるのは第二者と第三者とであるやうに思ふ。其の「眞」と呼び「人間の爲」と號する所に一種オーソリタチーヴな力があるので、其の筋の神經を驚かすのであらう。眞のためといふ派は自然及

び人間の眞趣または眞相を傳へて科學や哲學の缺陷を補はうといふ抱負に立脚するもの、"as it is"を本領とする文藝家と名づけてもよい。併し此の仲間の中に、眞相を寫すと同時に暗に之れを以て在來の謬想や謬信を破却するの用に供せんと望むもある。所謂"naked truth"を示して世間の迷夢を警醒せんとする手合である。是れは人間のためといふ事を暗に主張してゐるのである。かういふ作物は舊秩序や舊風俗や舊思想の維持者に取つては大分危險らしく思はるゝものである。さて其の次に、頭から人間のためと名宣りかけてゐるのがある。それは前のよりは更に一歩を進めて、其の所謂"naked truth"を材料として之れに對する新らしい解釋をも加へ、時としてはそれを一種の主義に仕立て、進んで實際的に社會革新の活動をも計らんとする派である。前にいつたのは單に破壞的で、消極的に止まる。是れは破壞的であると同時に建設的でもある。プロパガンヂズムが目的である。トルストイやニーチェやゴーリキーやイブセンやショーなどの作には陽に或ひは陰に此の傾向が見える。かうなると明かに廣義にいふ倫理的であるから、勢ひ舊倫理と衝突せざるを得ない。以上三類中最も其の筋の神經に障はりさうなのは第三と第二とであるが、是等とても其の本領からいへば決して危險とか不健全とか評すべきものでない。極端とか矯激とか評することは出來る。併し單に極端又は矯激とだけの理由ならば、禁止は不當で、むしろ其の極端な理由、其の矯激な所以を說破する反對の議論を世に布いて道理に訴へたはうが民衆敎化の眞義に叶ひ、最も文明的政策であ

らう。生中壓迫し禁止するは一知半解の徒の好奇心を喚び起して益〻曲解の緣を拵へるやうなものである。何となれば知識世界は之れが爲に邪說僻論の利害を公然と研究するの好機會を奪はるゝからである。まして第一類の、只有りの儘を寫すといふのは、いはゞ科學者の態度であるから、動植物の研究や死體の解剖や病毒の研究などに比すべきもので、成るべくは之れを許して眞知識の傳播を計るべきである。で表面からいふと少しも禁止すべき理由がない。かそこが例の裏面の理由で、若し當局の惧るゝ所は主としてサッゼッションにあるとすると、多少問題が變つて來る。專門家以外の、公衆がどのやうなサッゼッションを得るか、どのやうなジャスチフィケーションに曲用するかは其の國の文明程度と其の國民の人格問題で、豫め一定律で以て決することは出來ない。獨逸などは流石に進んだもので、文藝上の自由が大分ゆたかに與へられてあるらしい。彼の近頃評判のヴェデキンドの『春期發動』の如き、まだ普通の劇場では演ぜられぬやうだが、或劇場では屢〻演ぜられてゐるといふが、脚本を讀んだところでは無論何のともない作だが、舞臺では大ぶ問題になる科(しぐさ)があるとのことだ。文藝家側の主張によれば、斯の如き作も今は勿論許すべきである。知識の上中流に位ゐするものは斯樣な劇を見たとても決して野卑な聯想などは起さない、穢ないサッゼッションなどは得やしないと主張するとの事だ。自然主義運動の初めに當つて、ゾラなどが唱へた所も同樣であつた、寧ろかゝる祕密を明白に、冷靜に發表するとによつて在來の迷夢を破り、世を益するとが出來るといふ

のだ。我が近時の文藝家諸氏の抱負も大體其の邊にあるだらうと思ふ。僕も此の點に異存はない。然し或種類の作については尙ほ些か疑ひがある。尤も、危險とか不健全とかいふのではない。「果して其れ程必要であらうか」といふ疑ひだ。例へば今いつたヴェデキンドの作だ。脚本としては勿論の事、舞臺で演じたとて劣情煽動などゝいふ惧があらうとは思はれない。然し本來誰に見せようといふのであらうか？ 其の崇拜家のいふ所によると、性慾に關する知識を豫め子供らに與へておかないのが弊の源である、徒らに好奇の念を募らしめて、果は自他を殘害するやうな失行を敢てせしむるに至る。『春機發動』の如き作こそは恰も此の弊を寫したものだから、在來の謬想を破るに足る、云々。それが果して作者の抱負ならば僕は甚だ疑ふ。十四や十五の少年男女が、舞臺で性慾問題で煩悶し、遂に罪惡を犯すに到る所をあり〳〵と演じて見せなければ、今の父母は悟らぬであらうか？ 今の知識の上中流は斯樣な劇を見ても決して惡いサッゼッションは得ないといふ。如何にも得ないであらう。然し其れ程の知識のある手合が、わざ〳〵此の作を見る必要があるであらうか？ かう考へて見ると、是れは抑〻誰に見せる作だか分らなくなる。見せねばならぬ當人は、むしろ無學無智の、而も餘り年をとつてはゐない父親や母親や或ひは同じ弊に陷り易い少年男女自らではないかな？ 果して然らば、さういふ手合は之れを見て必ずしも正解を下し得るとも思はれない。妙ならざるサッゼッションを得ないとも限られない。何だか要領を得ないことになる。

崇拜家の唱ふる所は作者の本意ではなからうと思ふ。强ひて效能書を附けたのではないか？ 文藝家は矢張り有りの儘といふ所に住してそんな教育的主張や現社會に於ける利害問題は第二位、第三位に斥けた方が當然でもあり立派でもある。併しさうなつた場合には、彼等の主張と現社會の利害を第一義とする其の筋のインテレストとは方向が違ふから時に衝突するとをまぬかれない。況んや舊秩序破壞もしくは新秩序建設を第一義とする作物に至つては彼等役人連の神經を過敏ならしむるも無理はない。

話がだらしなくなつて來たが、詰り僕の言はんとする所は、假りに自分が當局者になつて見ると大分標準の立て方に迷ふであらうと思ふによつて、暫く全く局外に立つて、公平に取締り法を講じて見たらどうなるかといふ點にある。前にいつた三種の文藝家が、知識や趣味の上中流に鑑賞せられてゐる間は何等の不都合もないとして、扨其れが知識や趣味の下流にも鑑賞さるゝ場合には何としたものであらうといふ點である。また如何にして知識や趣味の上中流を分つか？ 中學程度以上の學問さへあれば知識の中流と見做すのか？ 或ひは身分や年齡で別つか？ 其の中、年齡で分つと丈は或ひは行はれないものでもないが、其の以上は無法な話である。且つや知識のあるもの必ずしも趣味が高尙なのでなく、趣味の豐かなる人必ずしも識見の高い人でもない。斯う考へて見ると、多少前にいつたやうな弊害があらう。所謂文藝批評家など稱する中にも、時としては存外見當の間違

つたのもある。作者の寫した有りの儘を看取することさへ出來れば、よしや其の作に寫されたる思想感情は矯激であらうと、極端であらうと、有りのまゝをさへ傳へれば必ずしも差支がないと思ふ場合に、往々原作とは大分違つた、寧ろ評者自身の分相應の解釋、甚しきに至つては自分の持論を强めんが爲に牽强附會したやうな說を原作の本意であるが如く吹聽する評者、紹介者がある。偶像破壞家たる資格ある近代諸作家の如きに對しては、特に此のやうな例が多い。バアナード・ショーの英才を以てしてもイブセンを評した說の如きは少々見當違ひで、イブセンをショーに化して了つて居る。其の他初めて『人形の家』を譯した英の某女史の如き、『ブランド』の後段を小說に綴つた那の某女史の如きは、女ながら、とにかくイブセンの精讀家だが、何れも大ぶ見當違ひ。これらは見當違ひながら弊の無いはうだが、之れに似て非なる例は內外に少くない。して見ると所謂知識の上中流でも餘り當(あて)にならぬもの。蟹は常に甲羅に似せて穴を掘るのである。批評家さへさうとすれば、飜譯書や雜誌、新聞等によつて纔かに原作の面影を窺ひ、或ひは何等かの他の動機をも加へて單に氣に入つた所のみ拔き讀みするやうな讀者等は、どのやうな解釋をするものか、取越苦勞をすれば限りが無い。卽ち末派の弊、摸倣より生ずる弊、口實に利用するの弊等を之れに加ふる時は、等閑視しがたいこともあらう。所詮はインテレストが違ふのだから仕樣がない。此の上は至極大ざつぱに普通公衆は濫用するもの、誤解するものと假定し、其の筋は神經過敏なものと假定し、文藝家は

藝術絕對觀に住して勇往邁進するものと假定し、めい〳〵勝手に己が信ずる所、己が好む所に從つた方がよいときめて了ふか？

一部の論者はいふ、所謂其の筋はフィリスチンの集合だから困る。フィリスチンも人にこそよれ、薄給の屬吏などに一任してあるから無法だといふ。是れは如何にも眞理である、檢閱官の資格は今よりも數段改良されねばならぬ。又之れを改良し得たなら多少今日よりは理に叶ふ取締り法も行はるるであらう。併しながら、要するにそれは比較的の沙汰で、インテレストの相違はいつまでも附いてまはらう。名ある文藝の專門家もしくは批評家連は其の筋の顧問にでもしたらば此等諸弊を一洗し文藝の取締りを每に有理ならしめ每に妥當ならしむることが出來るかといふに、おそらく安心することは出來まいと思ふ。何故ならば其の顧問となる專門家にして若し全く文藝に忠ならば、其の筋とは全(まる)でインテレストが違ふのだから、始終係り官と衝突してゐて、其の筋の目的は少しも通らぬ事となるであらうから、とゞのつまり退職するであらうし、又其の反對に其の筋のインテレストに同感し、成るべく現社會に危害なからしめようと思ふやうになつたら、いつとなく神經が過敏になつて、詰る所お役人肌になりかねない。且つ又他方からいへば、一旦取締りが緩んだとなると、文藝家は之れに氣を得て大膽にもなつて玉石眞贋一齊に勇往邁進を試みることゝならうから、如何な文藝最屑の顧問も、自家の職責上止むを得ず其の幾分を取締らねばならぬやうにもならう。或ひは甚

しきに至らざる先きに、防止政略として、或一作を禁止することもあらう。犬を笞打つて獅子を誡むる故智に倣つて大弊を未然に防ぐといふやうなことがあらう。其の局に當ると早晩そんな破目が生じさうである。すると、話が前に戻るが、何處からが限界といふことは、詰りは認定に屬する、だから其の認定の仕方が穏和黨の氣には入つても急激黨の氣には入らぬといふ結果になり、矢張り其の筋と文藝家との間には角づきあひが止むまいと思ふ。

要するに、取締り問題を是非するのは今の所無駄な事だ。むしろ文藝家は文藝家、其の筋は其の筋、各〻其の信ずる所に向つて十分に大膽に驀進させて置いて、イザ禁止となつた場合に、其の作其の者について問題を起した方がよい。此の作を禁止しては實に文藝界の一大事、一大損失であると認められる樣な大作物があつたなら、其の際最も深く損害を感ずる當事者及び其の崇拜者が眞先に立つて之れを主張し、廣く世間の同感者又は文藝家に訴へて――丁度メーターリンクの『モンナ・ヴンナ』を英國の檢閲官が禁止した時のやうに――一同連署して反抗運動を試み、輿論に訴へて禁止を取消させたがよいと思ふ。或ひは其のやうな臆切な事が一つ〳〵には出來ぬといふ人もあらう。然しそれ程の熱心が當事者幷びに專門家側にさへ起らぬやうな作なら、詰り、どうでもよい作かも知れない。其の樣な作を禁止するのは不當でもあり馬鹿らしくもあるが、禁止問題を云々するのも或ひは稍〻大業過ぎるであらう。で禁止の當不當を鳴らさんとするなら、其の第一手段として、禁止さ

れさうなドエライ作を作ることである。ドエライとは禁止される度合のドエライのではない、文藝品としてドエライのをいふのである。十人、二十人乃至百人、二百人に及ぼす幾分の弊害位ゐは黙過して貰はねばならぬと思ふ程の作をいふ。旅順一つ陷すに何萬人の人を犧牲にしたか、それを思へば文藝の傑作も若干の犧牲を要求する權利があるに違ひない。どう考へて見てもそれ以上の名案は浮ばない。由來、文藝家は自尊心の強いものであるから、人によつては自分の作以外は、どのやうな作でも、ドエライとは思はないかも知れぬ。さういふ場合には一寸團結が困難だが、然し身方には勿論、競爭者でも、敵でも、フィリスチンでも感服させて了ふやうな作でなければ、實はエライ作ではない。小さい譬へだが、僕は或一時、故團十郎の高慢熱の盛んな時分に、團十郎が憎くなつて、嫌ひになつてゐた事もある。それでも其の得意の或役、或藝を見る段になると、やッぱり感心せずに居られず、褒めずに居られなかつた。さういふ事は文藝品の偉德だと思ふ。

畢竟ずるに、其の筋の近頃のやり方は殆ど全く當を得て居なくもあるし、禁止せられた作は、殆ど何れも差支のない作であるとは思ふが、以上述べた如き込み入つた困難があるとすれば、當局の攻擊を試むる人は、當局者の爲、二つには文藝の爲、何か策を講じて見る義務があらう。かういふ標準で取捨せよとか、斯く〳〵の作は取締れとか、十分具體的に獻策するのが實際的であると思ふ。從來見聞した限りでは其の筋のやり口も甚だ抽象的で漠然として不得要領であるが、攻擊者の

主張する所も茫漠としてゐるのが多かつたと思ふ。

劇は教化機關なりや？

明治四十四年に早稲田大學に於て催した或初中等教育家の集合の席上にての講話筆記

昨今の如く、中央に於ても、地方に於ても、劇が盛ンに興行せられる場合には、劇の社會人心に於ける關係は侮る可からざるものがあります。然うとすれば、直接教育事業に關係の方は勿論、其の他の諸君とても、演劇はどう云ふ働きを人心に及ぼすものであるか、どう云ふ役に立つものであるかと云ふことを一應御承知置きになる必要がありませう。萬一、演劇の用ひ所を誤つたならば、或ひは世を害することがないとも限らない。其の邊のことに就いて聊かお話を試みようと存じます。が、時間に限りがありますから、御參考になるほどのことを、此の時間内で申すことが出來ませうかや心元なく思ひます。

題は演劇は教化機關なりやと申すのですが、先づ最初に演劇は果してどう云ふ役に立つものであるかと問うたとすると、それに對する普通の答へは自から二樣となります。曰はく演劇は娯樂慰藉の機關で、人の心を樂ましめ人の心を慰める働きをなす道具であると答へる。第二には曰ふ、演劇は感化教導の機關である、世間の人を感化し教へ導く機關である。斯う答へるのが通例です。

さて此の二つの答への中で演劇が娯樂慰藉の機關であると云ふことは別段説明するを俟たぬ。而曰

ければこそ諸君が見に行く。蓋し人生には娯樂慰藉と云ふものが必要である。人生に苦痛ばかりあつて樂みがなかつたなら誰も生きて居ようと願はぬ位ゐのものである。所謂デヨイ・オフ・ライフ――生の悦樂――の肝要な部分を形成するものは娯樂である。但し一概に娯樂と云ふ内に色々の種類がある。下等な樂みもあれば高雅な樂みもある。品質、等級は樣々で、無論、それを選ばねばならぬが、要するに娯樂慰藉の必要だけは動かぬ事實である。昨年の十二月本校に於て大隈伯が催された國民教育講演會の際にも、「演劇と教育」と云ふ題で、一通り此の邊のことを辯じて置きましたから、今はわざと省き、直ちに第二の答への説明を試みませう。

教化機關卽ち社會人心を感化し教導する機關として、演劇はどう云ふ働きをなし、果してどう云ふ效用を有するであらうか？　第一、教化機關とは抑どう云ふ意味であるか？　これは分つたやうな分らぬやうな言葉である。彼の宗教や德育は確かに社會人心を感化し教へ導く大機關であるが、其の宗教や德育と同じ意味で演劇が教化機關たるの働きをすると云ふのであるのかどうか？　更に之れを碎いて言ふと、勸善懲惡と云ふやうな力を有つて居るのであるのかどうか？　御存知の例の『ハムレット』の中で、主人公のハムレットの白に、「昔し或惡漢があつて、人殺しをしたのであつたが、或時、人殺しを主題とした演劇を見て居たうちに、自分の過去の罪惡を想ひ起して悚然として怖れ靡然として悔悟したと云ふことがあるが」と云ひ、さて「我が叔父クローデヤスは確かに我が

父を毒殺したに相違ないから、若し彼れの面前にて我が父の毒殺そのまゝの場面を演ぜしめて見せたならば、或ひは良心の苛責を覺え、其の苦悶の色が顏に現はれるであらう、然る場合にはそれを證據にして云々」と、斯ういふ目的で以て演劇を催す一段がありますが、これは劇に强大な勸懲力あることを語つてゐるのである。日本に於ても、往々にして人殺し又はその他の罪惡を犯した者が、自分の犯した罪惡に似寄つたことを俳優が舞臺で演ずるのを見て、突然と悔悟の念を發して自訴した實例が新聞紙などに折々見える。果して演劇にさう云ふ意味の感化力があるのであるか？　教化機關と云ふのは、さう云ふ作用を劇にさせようと云ふ意味であるかどうかと云ふ疑問が起ります。

教化機關の種々の意義

教化機關と云ふ意味は又他の意味にも取れます。まづ、廣い意味で言ふ社會教育、卽ち文部省の所謂通俗教育と云ふ意味にも取れる。昔から日本で芝居のことを「無學の早學問所」などといひました。芝居を見て居る間には色々のことを覺える。或ひは歷史や傳記を學び、或ひは各地各樣の風俗人情を知ることが出來る。百聞一見に如かず、直ちに耳目の直覺に訴へるから學校の教師などが煩はしく細々と書物に縋つて口で以て分析して教へるよりも遙かに早くて有效だと云ふ意味で、一種の教化機關と見做す。通俗的教育機關と云ふ意味である。例へば「六十日間世界一週」と云ふや

うな外題の芝居を演ずるとする、一日の間に急行列車的に世界各國を周遊して其の間に種々の出來事に遭遇するとを脚色とするのである。卽ち一幕毎に場面が變はる、今まで地中海に居たのが忽ちにして埃及に移る、埃及にゐるかと思ふと既に西班牙に渡つて居る、それから又佛蘭西に入る、忽ちドーヴーの海峽を横切つて英吉利へ渡ると云ふ風に場面が變る。樣々の山水、樣々の風俗、幾ど應接に遑がない。言語の相違、容貌、態度の相違までが直覺的に分る。或ひは南極探險劇　居ながらにして南極に行つたと同樣な知識を得る。或ひは日淸戰爭なり日露戰爭なりの實地を舞臺面に見せる。無論正確なものではないが、ともかくも早分りがする。觀光團的知識とでも稱すべきものである。これも知識には相違ないが、甚だ薄つぺらな、茫漠としたものである。若し劇を單にさう云ふ意味で敎化機關だとするならば餘り重んずべきものとも思はれない。幻燈や活動寫眞や蓄音器を利用して學校の老練な敎員達が說明をなされた方が、恐らくもう少し正確な知識が與へ得られるであらうと思ふ。成程、六尺の男兒大勢を使つて活人畫にして見せた程の活々とした印象は與へないかも知れないが、其の代り一段正確な知識が與へ得られると思ふ。故に斯樣な淺薄な知識を與へると云ふだけの意味の敎化機關としてならば取るに足らないのである。ほんの輕い意味の方便に過ぎない。併し普通はこれをも敎化機關と云ふ意味のうちに入れてゐます。

或ひは敎化とは斯う云ふ意味ではないか？　あたまから智慧に訴へては到底會得せしめ難いことを主として感情に訴へて味識せしめる、卽ち演劇と云ふやうなものを藉りなければ到底感得させることの出來ないたぐひのことを味はせると云ふ意味で敎化機關と云ふのではないか？　說明したり解釋したりしないで只其の儘を耳に目に想像に訴へて感得させる、社會の實相、人生の眞理、人情の隱微等を知らず〳〵の間に呑込ませようといふのではないか？　固より是れは之れを觀る者の能力識見、閱歷經驗の程度に因つて結果が違ふ。それを觀たとは見たが何等味得する所のない者もあらう、併しともかくも相應の能力があり識見があり世故の經驗がありさへすれば、それ相應に何等か味得する所がある、而してそれが本となつて直接もしくは間接に反省し悟入する端をも得る。一言以て蔽へば、人生の眞の相、眞の味ひを味得せしめると云ふ效能があるのみならず、ある種類の人人に取つては、頭から說明してかゝつたり頭から訓戒したりするよりも、何も言はずに唯有りの儘を見せるだけの爲に、却つて知識を與へる上にも、訓戒を與へる上にも有效の度が高いといふともある。さう云ふ意味で敎化機關と云ふのではあるまいか？

之れを要するに、演劇をして宗敎や道德と全く同じ意味の感化力を有たせようとするのは、それは劇をして一種の藥劑のやうな働きをさせようとするのである。直に效果あらしめようとするのである。而して第二の普通知識宣傳の機關たらしめようとするのは、假りに之れをも譬へて言へば、衞生の理の極の入門を講述して居るやうなもの、養生法のほんの初步を略說して居るやうなもので

別に大した役には立つまいと思ふ。さて第三の人生の眞の相、眞の味ひを作者が平生信じ、俳優らが平生信ずる所によつて活々と有りの儘に活躍させて見せて深い感動を與へ、暗に又は期せずして觀る者の反省悟入の媒介ともならしめる力あるものゝ如きは、之れを譬へて言へば、必ずしも衛生の爲といふのでもなくて種々の滋養になるものを食はせたり、食ひ過ぎれば毒になるが、二口三口は舌に快いといふやうなものを食はせたりして、取舍は食ふ當人に一任するといふのに似てゐる。

劇の目的に關する種々の說

以上三種のうち何れが教化機關としての演劇の本領であらうか？

此の事をお話するに就いては古今の學者の申したことを多少參考に述べるのがよいと思ふ。されば言つて外國の文明時代に名をなした學者達の說を一々擧げて居ては果しがない。且つ又、劇に關するとは存外學者たちの說は迂濶であつて餘り重きを置けないこともある。畢竟劇は一種特別の藝術であつて、親しく其の事、其の道にたづさはつて深く實地について閱歷した者の言つたことでないと、存外に價値が尠い。で學者たちの說を引くと申したからとて、重きを置くに足ると思ふほんの四五人の說だけを引くのであるから、さう御承知あつてお聽きを願ふ。

最も古い所では例の希臘のアリストートルの言を引きませう。アリストートルが劇に就いて言つた言葉は、意味が稍〻含糊で、學者に因つて解釋が違ふ。私は其の中の或一解に因つて諸君にお話をする。其の解によると、悲劇は恐怖及び憐愍の情を淨化して、卑しい恐怖を抱かぬやう、不正な憐愍を感ぜぬやうに人を敎へ導くものであると言ふことになる。もう一つ碎いて言つて見ると、人間には恐怖心と云ふものもあれば惻隱怵惕の心もある、併しとかく人間は恐怖心を濫用するともあれば惻隱心を濫用することもあるので種々の弊を生ずる。然るに立派な悲劇を觀ると其の恐怖心の不健全な部分は除かれて健全な部分だけが殘る、穢ない下等な部分は洗ひ去られて淸淨な部分だけが殘る。又憐愍の情も婦人の仁とか宋襄の仁とかいふやうな間違つた部分は皆洗滌せられて純粹な部分だけが殘るといふのである。これがアリストートルの有名な悲劇論です。丁度支那で古人が音樂の德を稱して「蕩滌邪穢」と言ひ「移風易俗」と言つたと同じ理合であると見てもよい。アリストートルは劇を以て一種微妙な働きをする精神的下劑と信じてゐたやうに思はれる。人の氣格を高尙にするといふ漠然たる效用以上を劇が有するものと思つてゐたらしい。

次ぎにはずつと時代違ひのシェークスピヤの言葉を引きませう。シェークスピヤは今尙ほ劇道の祖神のやうに言はれて居る作者であり、二つには彼れの此の語は其の實、羅馬全盛時代の學者らの言葉を敷衍したのであつて、希臘時代の名言と暗に連絡してゐると言つてよいのですから。さてシェークスピヤは、「演劇は今も昔も、言はゞ、自然に對して明鏡を捧げ、正邪美醜の姿形を有りのまゝ

其の儘に寫して見せるものである、故に度を過すときは本意に外れる」と言つて居る。丁度寫眞のやうに善い所も惡い所も美な所も醜い所も其の儘に寫して見せるといふのであるらしい。で、味ひやう次第で修身處世の參考になるともあらうし、學問になることもあらうし、有害な挑發や危險な刺戟を受けるともあらう。營養にもなれば、時としては毒にもならうといふのである。シェークスピヤの見るところでは、劇は必ずしも藥劑ではないらしい。

第三にずつと飛んでごく近代の說を引きませう。例へばイブセンはどんなことを言つて居るか？アリストートルは二千年前の人、シェークスピヤは三百何十年も前の人、イブセンはつい近年歿した作者、あんなり時代が違つてゐるが、代表者として引くには此の三人が適當であらうと思ふ。さてイブセンが言ふには、「詩人たるものは、見た事や見たものを、自身が見たと恰も同樣に公衆にも見せしめるやうに寫し出さねばならぬ、併しさうするには是非自身が寫すこと其の事を實踐體得してかゝらねばならぬ。要するに、實踐體得した事を寫すと云ふことが現代文學の特徵である」と言つて居る。

イブセンが又言ふに、「私が今迄書いたものは、何か自分に主義主張があつてそれを宣傳する爲に書いたかと云ふにさうではない。私の仕事は一へに人生を寫すと云ふ點にある、我が國を進歩せしめ且つ一段高い標準を公衆に與へようとするにある」と言つて居る。之れに因ると、イブセンは特

に或主義を宣傳する爲に書いたのではないらしいが、尙ほ國を進歩せしめようとか、國民に一層高尙な標準卽ち理想を提供しようとか言ふ志望はあつたらしい。一へに人生を寫すにあると言つてゐるものゝシェークスピヤとは大分態度が違ふらしい。人生を有りのまゝに寫すと同時に國民の理想を高めようと云ふ目的を持つて居るのだから、敎へ導くといふ氣がある。五味を調理して陳列するに止まるのではなく、營養といふことが主になつてゐる。大分藥の方に近い。アリストートル程明確には言つてはゐないが、敎化機關たらしめようといふ意志は認められる。又彼れの作に就いて見ても、明かに社會を感化しよう敎導しようとしてゐるのが見えて居る。

更に轉じて彼の特に藝術論を公にして現代の藝術家を罵つてゐる例のトルストイはどう云ふことを言つてゐるかといふに、彼れが言ふには、「藝術は人間の一活動である……（こゝに藝術と云ふのは主として劇などを指すのである）……而して此の活動の目的は藝術家の身みづから經驗したる感じをさながらに其の儘に他人に傳ふるにある。藝術家は感じた事を或記號を用ひて他人に傳へる、例へば運動とか、線とか、色彩とか、音譜の配列とかを利用して以て藝術家は自家の感想を赤の他人に傳へ、同一樣の感銘を納受せしめる。藝術を通じて以神傳神の妙作用が起る。そこで以て藝術は人と人との間を和諧するの方便となる、人心を同化せしめる道具となる。なぜなれば、さう云ふ風に藝術が媒となつて、同じ感じが世界中に弘まり傳はつて行けば、竟には自然に人心を融和する

とが出來るからである。劇はさう云ふ大した働きをするものであるから、作者たる者は眞摯誠實の心掛を以て其の作に從事しなければならぬ、遊戯三昧の態度で以て劇を作つたり演じたりするのは最も不正なことである」といふのが、それが大體に於けるトルストイの演劇論であるのです。これは明かに劇は是非とも教化機關でなければならぬといふので、劇は藥劑の働きをすべきものだと云ふことになる。

もう一つ、英吉利で目下名聲のあるバーナード・ショーと云ふ作者、これはどんなことを言つて居るかと云ふと、曰はく「劇とは自然に對して單に暗筐（カミラ）を設置するとにあらず、劇は人間の意志と其の周圍との間の軋轢を喩話（たとへはなし）の形式にて表現するもの、一言にていへば問題の表現なり」と。此れはシェークスピヤの向うを張つたのである。シェークスピヤは造化に對して鏡を捧ぐるものが劇だと言つたのを、ショーは決してそんな單純なものではない、喧〻寫しさへすればよいと云ふのではない、否、劇は人間と人間との意志や思想が衝突し軋轢する、其の軋轢の模樣や鹽梅を――喩語（たとへはなし）の形式と云ふのだから、單に有りの儘に寫すのではなく――多少綜合的に、又暗示的に、中心思想の在る所を理解せしむるに都合のよいやうに表現するものが劇である、更に言ひ換へれば、現代の社會に於て一の問題となすに足る或人生現象を著明に縮寫して提供する、それが劇だと斯う言つて居る。それから――ショーの著書中には明かには斷言せられて居ないやうですが――ショーに會つて聽いたといふ人の話に因ると、彼れは自分の目的は教化にあると明言して居るさうである。之れに因つて見ると、ショーは、劇を藥劑に用ひようと云ふ程ではないまでも、彼のシェークスピヤのやうに藥とも毒ともきめずに食はせようといふのではない、いや、むしろ同時に衞生の理論までも並べ立てゝ、兼ねて社會の實相をも味はしめようといふのである。新說を吹き込んで新知識を授け、同時に教訓をも試みようといふのである。

以上五家の說を綜合して見ると、大體に於ては劇の教化機關たらんこと、たるべきものたることを望んで居ると見て差支ない。シェークスピヤだけがやゝ例外になつて居るのであるが、他は皆何等かの意味に於て教化機關たらしむべきものと認めて居るらしい。尤も、近代においては、劇の目的を全く教化作用から引離さうとする傾向も盛んである、又さういふ風なのが、卽ち純粹に客觀的なのが劇の本領だと主張する作者も多勢ある。殊にショーやトルストイの說とは直反對なのが甚だ多い。同じ英吉利の作者でも、彼のゴルスワージーや愛蘭土のシングなどは、劇の客觀的たるべきを主張する論者であつて、殊に後者は問題劇の排斥者である。

さて翻つて世間一般の人々の考へてゐる所を査べて見ると、出來るものならば劇を一種の教化機關たらしめたいと望んで居るやうである。但し豫め諸君に注意して置くが、こゝに教化機關と云ふのは必ずしも因襲道德の機關と云ふ意味ではない、文部省などが望んで居るやうな教化機關と云ふ

意味ではない、場合に因つては時の政治家や宗教家や道德家らが教へようとしてゐる所とは全然反對の意味の道德や主義やを鼓吹する機關となることもありませう。此の理を御承知置きあつてお聽きを願ひます。

劇が教化機關たるべきことは諸家の說の如くであるとして、さて過去時代に於ける劇の實際は果して如何であつたか？　果して教化機關たる效用を實現してゐたか？　精神的藥劑といふやうな働きをなしたことがあるか？　それを少しく取調べて見ませう。

希臘劇に伴へる特別の事情

彼のアリストートルが滌邪蕩穢の效能があると言つた演劇は、それは古代希臘の劇であつて、一代の大學者アリストートルがさう言つた位ゐですから、成程一種の教化機關であつたらしい。古代希臘の觀劇者は何れも肅然として襟を正して、恰も宗教を信ずる者が其の信ずる宗教的儀式に參列でもするやうな態度、心持で觀てゐたと云ふとは事實である。彼のソホークリスの作「エーディポス王」やエスキラスの作「オレスチス物語」やに對する希臘觀劇者の態度もしくは彼等が觀劇よりして得た感銘は、今日普通の觀劇者のそれとは著しく相違したものであつたらしい。「オレスチス物語」は因果應報の怖しさを示すもの、「エーディポス」は先天的運命の避くべからざるを教ふるもの。何れも當代の宗教的及び倫理的信仰を結晶したるに外ならざる作意だと言つてよい。されば此れらの劇を觀てゐる間、古代の希臘人は眞に皆肅然として襟を正して、因果の理法は實に恐ろしいものである、人生は常に斯くの如き運命の支配を受けてゐるのであると感じ、知らず〳〵の間に卑しき恐れを棄てゝ眞に怖るべきを恐れ、不正の憫みを棄てゝ眞に憫れむべきを憫れむといふアリストートルの言葉通りの效果を感じたといふとも事實らしい。併し希臘の劇に、それ程偉大な感化力があつたには、其の實、中々複雜な理由があつたのだと考へられる。ざつと見た所でも六七ヶ條ある。

第一、希臘は傑れた文明國であつたとはいへ、時は比較的原始時代であるから、其の頃の希臘の人心は比較的單純でもあり又質撲でもあつた。それが劇を觀て容易く感動した一の理由であらうと思はれる。第二には、其の劇に仕組まれた話の筋と云ふものは作者が空想で拵へたのではなく、希臘の謂はゞ神代の昔から言ひ傳へ語り傳へて來た傳說であつて、日本で言ふと『古事記』の傳說などの如き、極めて貴い一種宗教的威力を有する傳說であつたのをそれを土臺にして拵へ上げた劇であつたと云ふとが人心を深く動かした第二の理由であらうと思はれる。又第三には、深く國民全體の心に沁込んで居る一種の國民的信仰、倫理的觀念と云ふものがある、卽ち宿命は避くべからざるものであるとか、因果應報は恐るべきものであるとか云ふやうな一の國民的道念と云ふものがあつたのですが、それが又是等の劇中に寓してある。卽ち劇中に寓してある道念は作者一個の道念ではなく

して國民一般の道念である、所謂國民的倫理觀念であると云ふことが深く人心を動かした第三の理由であらうと思ふ。それから第四には、希臘の劇は無論一種の娯樂であつたには相違ないが、又一方から言へば之れを宗教上の一儀式、國家の一典例として演じたのである、決して遊戯三昧で演じたのではなかつたと云ふ其の作が人心に於ける感化力を頗る大いにした所以でもあらう。第五には、脚本其の物が決して尋常一様の作ではなく、古今有數の傑作であるから人心を感動させたのだといふのも一の理由。第六には、希臘の劇は音樂劇である、卽ち樂を奏し且つ歌ひ且つ踊つて演ずる丁度今日のオペラのやうな一種特別の藝術的魔力を以て人を醉はしめる劇であるから、一段と感銘が深いといふこと。第七には、劇場規模が如何にも雄大で、そればかりでも觀る者の心目を駭かす。加ふるに少くとも三千人以上の人が優に一所に集まつて見るとが出來る芝居であつたといふこと。近頃も舞臺に一千人からの俳優が現れ而して八千人乃至一萬人の民衆が一時に集まつて見るやうな劇がアメリカやヨーロッパ大陸に行はれ始めてゐるが、さう大勢の人が同時に集まつて觀るのと舞臺面の規模が雄大であるのとの爲に特に一種の感動が起る、所謂「群集の力」と云ふものが感ぜられる。それやこれやの種々の原因が相合して古代希臘の劇をして有效な教化機關たらしめたのであつたらしい。

それ程の感化力があつた希臘の劇も、降つてソクラテス時代となると、漸く面目を改めてゐる。

娯樂機關に墮したとはいはれないまでも宗教的と云ふやうな感化力は著しく薄らいでしまつたらしく思はれる。まして況んや更に降つて羅馬時代となると、最早全く單なる娯樂機關となつて了つて居たと言つてよい。それから更に降つて歐羅巴の中古時代となると、希臘傳來の劇は一旦衰滅してしまひ、其の代りに基督教の僧侶の工夫に成つた幼稚な粗笨な宗教劇が行はれてゐる。これは無學の民衆に宗教上の教義を教へる爲の方便であつた、娯樂機關としてゞはなく全く一の教化機關として始められたのであつたから、一時は相當の效力があつた。所が追々と世の中が進むにつれ、それが僧侶の手を離れて專門俳優の手に移つて、遂には純然たる娯樂機關と化して了つた。而してそれが時の好尚に導かれて、更に大いに發達したのがシェークスピヤ時代の劇である。シェークスピヤ自からも劇は娯樂の爲のものであると云ふことを言つて居る。固よりシェークスピヤの劇にも勸善懲惡の意をほのめかした跡は見えて居る、種々の意味に於て教化の效能を有してゐたであらう。併しながら大體に於てはシェークスピヤ時代の劇は教化機關と云ふよりも娯樂機關である。これはシェークスピヤのばかりではない、其の時分の劇はおしなならして皆娯樂慰藉の機關たるに外ならなかつた。次いで十八世紀の劇とてもさうで、娯樂機關としての働きは十分あつたやうであるが、希臘時代に於けるやうな教化機關としての働きをして居たとは思はれない。十九世紀の後半に近づいても尙ほさうである。然るに十九世紀末に至つて俄かに局面が改まつた。

近代の寫實劇、問題劇

十九世紀以前には娯樂機關と云ふ點に重きを置いたから、作者はどういふ風にしたなら見物の好みに適ふか、どうしたら當りを取るとが出來ようかと云ふとにのみ苦心したもので、要するに態度が幇間的、隨つて見物も遊玩的態度で以て劇に對したものである。我が國の如きは今日でも尙ほ依然として其の有樣である。劇場に臨んで飲食しながら、或ひは甚しいのは婦女に戯れながら觀てゐる。それが當り前になつて居る。西洋は比較的早くよりさう云ふ趣きは少くなつて居るのだが、尙ほ劇の普通の作者と云ふものは他の詩人や小說家程に重んぜられてはゐなかつた。偶〻立派な學者や立派な詩人が劇を書いても、成功しないのが常であつた。然るに十九世紀に入つて思ひ掛けなくスカンデナヰヤから一人の大作家が躍り出でた。それがイブセンである。イブセン以後芝居の性質は一變したと言つて宜しい。一變した理由は、主として作者の人格に原因する。藝術は詰り作者の人格の發揮で、高尙な人格の作者が作すれば、其の作が自からにして高尙な光りを放つ。社會人心に於ける感化もそこから生ずる。イブセンは尋常一樣の作家でなく、主張もあり抱負もある作者だから、作物の形式も變れば、其の寫す材料も作意も悉く變つた。一言以て評すると、如何にも眞面目な作である、最も嚴肅な態度で以て作した劇である、隨つて觀る者も之れに對しては自然に襟を

正さゞるを得ない。加ふるに其の內容が在來のとは全く變つてゐる。イブセンのが變つて居るのみでない、イブセンが名高くなるに從つて、之れに倣ふ作家が列國に輩出して、何れも多少同じやうな態度を取つた。それは一言以て評すると反抗的態度である。在來の劇に反抗するといふのみの意味ではない、あらゆる意味に於いて、在來の習慣や道德や制度に對して批評的乃至反抗的の態度を取つて作して居るのである。尤もこれは劇ばかりでなく、凡そ十九世紀後半以後の文學には常に附帶する所の現象であるのです。彼の現實曝露、因襲道德の攻擊、新思想の皷吹と云ふやうな態度がそれで。かういふのを問題劇ともいふ。蓋し在來は現實の有りの儘を直寫することを標榜してゐる作とても、其の實尙ほ二歩も三歩も時代の道德や習慣に讓歩して、妥協的に、當り障りの無いやうに幾分か現實を取捨して寫して居たもので、眞に現實の暗黑面や醜惡面を鋭く、根深く、有りの儘に無遠慮に寫して居る劇や小說は幾ど先づ無かつたのである。然るに十九世紀の後半以後は、小說家も劇の作家も、在來のそれに反し、思ひ切つて現實の醜惡方面を計發的に寫さうと云ふ態度を取るに至つた。在來重んぜられて居つた宗敎、道德を俗道德、俗宗敎などゝ罵つて其の缺陷を發くとに力めた。啻に今迄の道德を第二義、第三義の道德であると貶したばかりでなく、我々將來の國民が守るべき道德は斯く〳〵のものでなくてはならぬと言つて、新しい道德を主張し皷吹すると云ふやうな態度を取るものも現れた。さうして斯樣な態度は劇の方ではイブセンの作に於いて現はれ始め

た。中には如何にも矯激に思はれる作もあるが、其の傑出したのになると、さすがに一時の場受けや人氣取りの爲に言つてゐるものとは思へない、如何にも作者が眞にさう感じて居るらしく思へるから、之れを老錬な名優が活々と劇に演じて見せる段となると、見物は之れが爲に動かされる、前代には例の無い程の深刻な著大な感銘をも受ける、一種の侮るべからざる感化力がそこに生ずる。時としては敎唆的、煽動的、挑發的なぞと評すべき働きをも有しかねない。トルストイやシューなどが劇を敎化機關に利用しようとするのは、畢竟さう云ふ力のあることを認めたからでありませう。

深刻な感銘を與へる作の例を擧げるに當つては、先づ第一にイブセンのを擧げなければならぬ。彼の有名な『人形の家』とか『幽靈』とかいふ作の如きは、其の當時に於ては歐米民衆の心を驚かしたものである。でそれらに倣つた作が幾らも出來た。併しこれらの作の內容は大概の人が御ぞんじのとであるから筋は話しませんが、かういふ作が感動を與へて以來、之れを摸した又は之れに類する劇が續々列國の劇壇に上つた。在來の作とは全く異なつた着眼で、所謂反抗的態度で、會釋もなく社會の暗黑面や醜所や隱祕を寫すのであるから、單にそればかりでも世俗の好奇心を牽くに足るところへ持つて來て、作者が眞面目であつたり、其の文學的手腕が卓絕してゐたり、又それを演ずる俳優が名人であつたり美人であつたりした場合には中々の效果が生ずる。保守的の連中をして悚然慄然として怖れしむるに足るものがないでもない。ハウプトマンやブリューやシューやストリンドベルヒやウエデキンドやゴールキーやの作にも其の例となるのが幾らもある。若い連中が痛快だと言つて歡迎するだけに老人連は眉を顰める。何となればこれらの作中に含まれて居る思想を見ると、手近きは夫婦間の道德や親子間の道德の根本標準を、更に進んでは國家組織の基礎をも動かさうとして居る氣味がある。所謂良妻賢母主義や敬神や愛國や忠孝や柔順や謙讓や、すべて在來神聖視されたものは、是等の作中では、概して嘲弄もしくは非難の的にせられて居る。極端な個人主義的もしくは社會主義的口吻も是等の作中には頻りに仄かされて居る。とにかく、在來の國家的乃至社會的道德や家庭的道德とは全く相反した傾向の思想感情を皷吹してゐる。だから舊來の道德や宗敎を奉ずる者の目から見ると、又在來の習慣風俗を重んじて居る者の目から見ると、甚だ危險な思想を煽動して居るものとも感ぜられる。併しながら全く立場を變へて、現在の國家組織や社會制度や風俗習慣に夥しい缺點弱所の存するとを認めざるを得ない側から言へば、これらの劇は慥かに一種の有力な敎化機關であるともいへる。文部省や內務省や警視廳の方面から見ると明かに危險でもあらうが、其の反對の側から見ると頗る有益な働きをするものともいへる。とにかく、昔の所謂勸懲主義の芝居などに較べると、ずつと眞面目な、力の强い、一種の賴もしげな道具だと云ふとは事實である。昔の勸懲主義の作と云ふものは、例へば馬琴の小說、古河默阿彌の芝居、これらは或部分は婦女童蒙を敎へ導かうと云ふ志しがあつて作つた物であり、又さう云ふ輩に對しては相應の感化力も